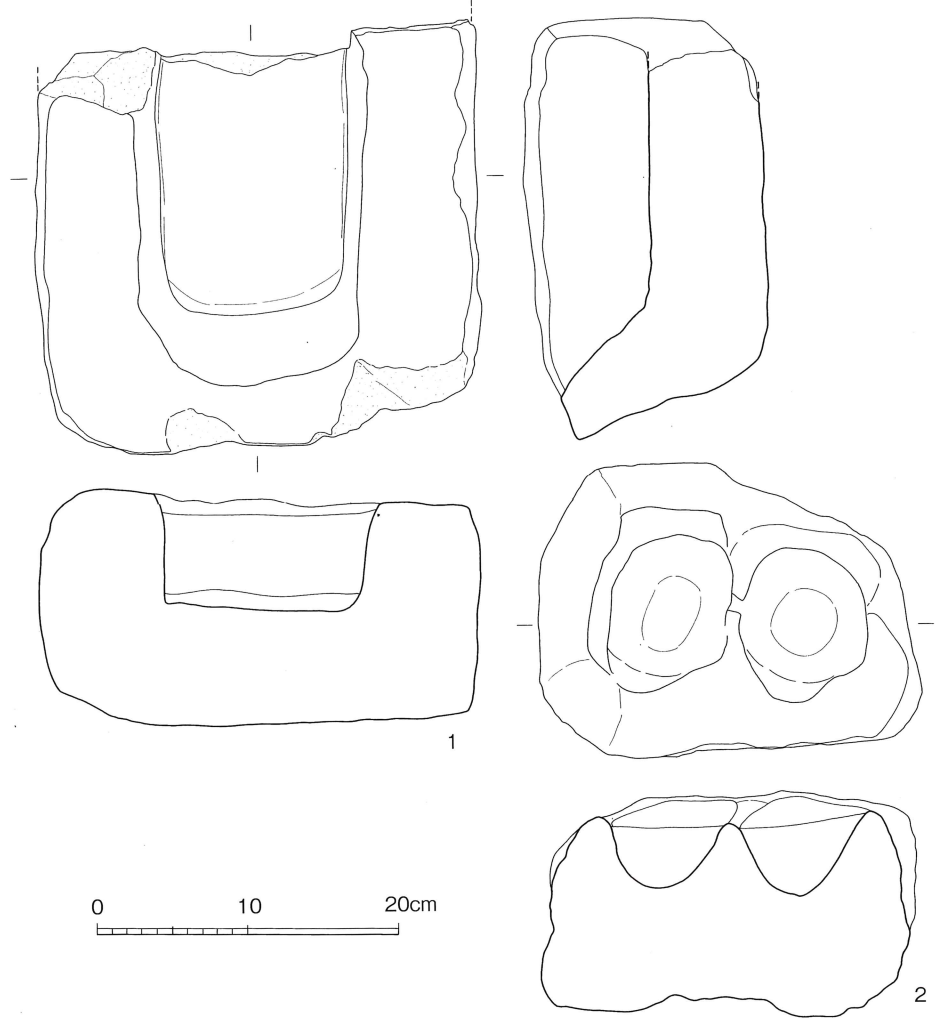


の規模から推定すると、径50cmの円形土坑で、深さは約10cmである。

小型の遺構であるため、出土遺物も少ない。目立つ遺物として第100図1の鉄釘が出土している。長さは5.1cmで、断面は一辺0.4cmの方形をしている。

SK102

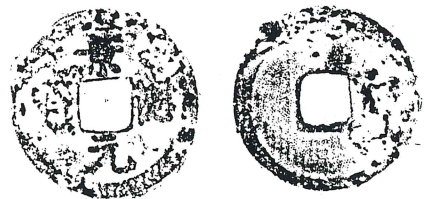
SK102はK-74で検出された土坑で、南北約2m、東西約2.2mで、浅い皿状の窪みである。出土遺物は第100図2に図示した口径8.2cm、底径6.8cm、器高1.3cmの土師質土器の皿がある。



第98図 SK090出土遺物実測図② (1/5)

SK109

SK109はJ-74で検出された遺構で、第101図に図示したように半分近くは調査区外に広がる。確認された遺構の規模は、直径4.1mで、深さは検出面から約2mまで掘り下げたが完掘出来なかった。遺構内を調査した結果、多量の遺物が出土した。その出土状況は、遺構が埋まって行く段階で投棄されたと推定され、土坑の上層と下層の2ヶ所に遺物の集中ヶ所が認められた。



第99図 SK090出土銅銭実測図 (1/1)

第2節 遺構と遺物

出土した遺物は上層を第102・103・104・105・106図、下層を第107・108・109図に図示した。

亀山窯系

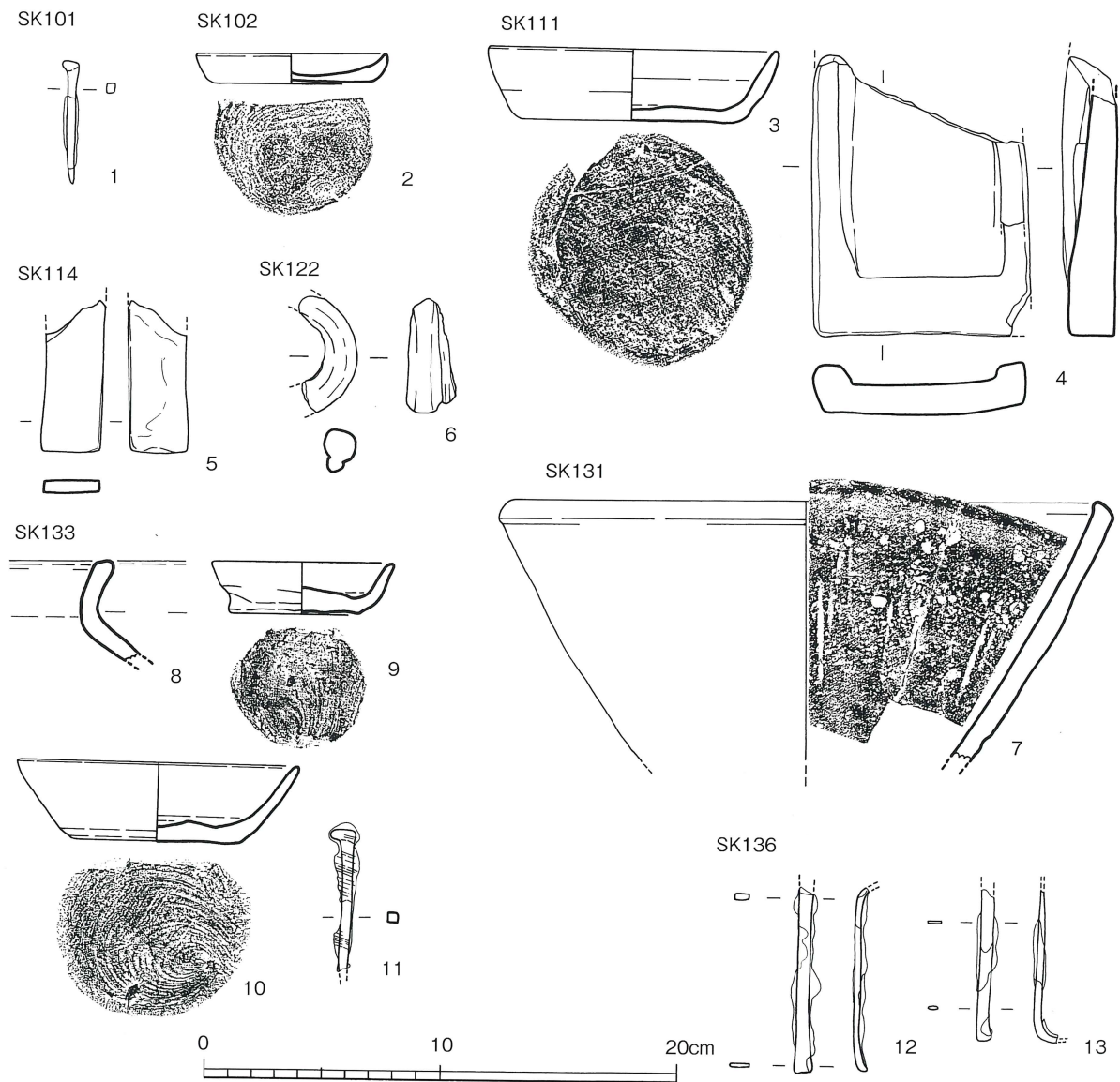
第102図1・2は同一個体で、器面に格子状叩きの調整痕が残る口径47.2cmの亀山窯系の甕である。3は瓦質土器の鉢で、外面にススが付着している。4～6は備前焼の播鉢で、口縁部がわずかに肥厚する。色調は灰褐色をしている。

ヘソ皿

第103図は土師質土器である。1・2は京都系土師器のヘソ皿である。3は口径16cmの瓦質土器の碗で高台は磨滅している。4は在地系土師質土器の坏である。5は口径7.6cmの小型の坏である。6から38は皿で、法量の平均は口径8.1cm、底径6.7cm、器高1.3cmであるが、38は次に報告する坏との中間形態と言える。

第104・105図は在地系土師質土器の坏である。37点を図示したが、法量の平均は、口径が12.5cm、底径が9cm、器高が3.1cmである。口縁部の形態は、第105図に掲載したように底部周辺の器壁が厚く、先端に向け尖るように延びるものが目立つ。

第106図の1～5は平均口径が12.4cmに対し、底径がほぼ半分の5.8cm、器高が3.3cmの碗形をしてい



第100図 SK101・102・111・114・122・131・133・136出土遺物実測図 (1/3)

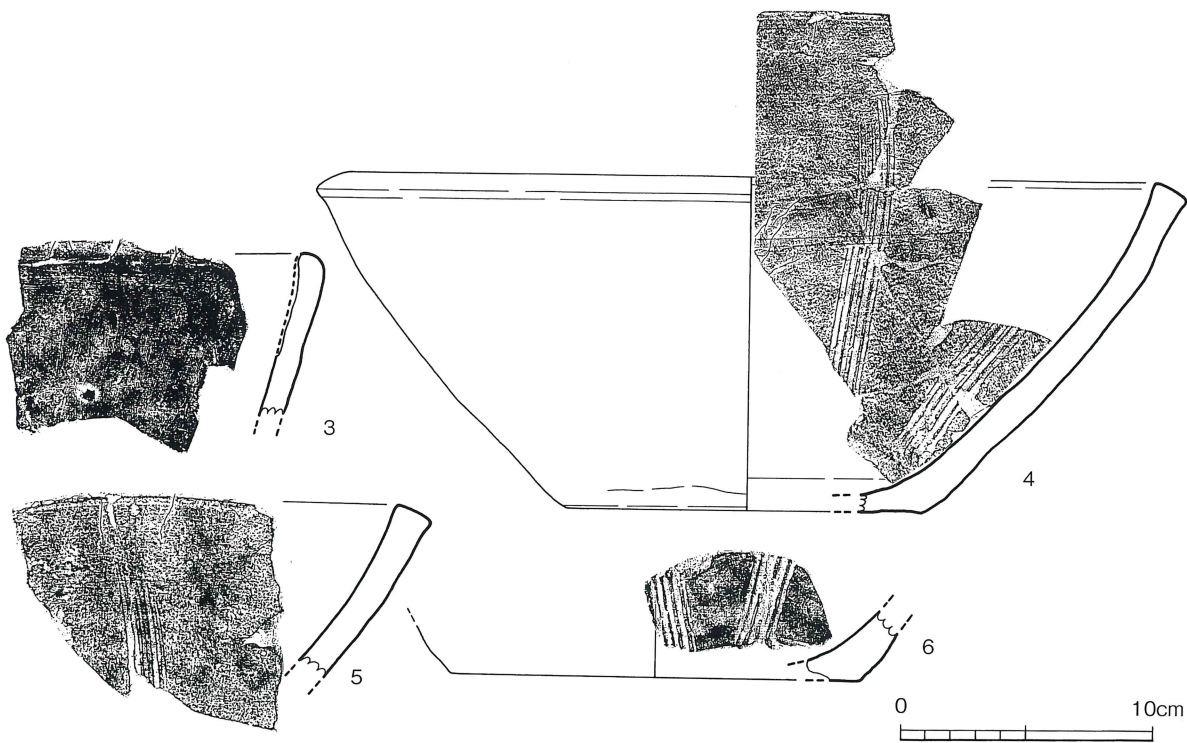
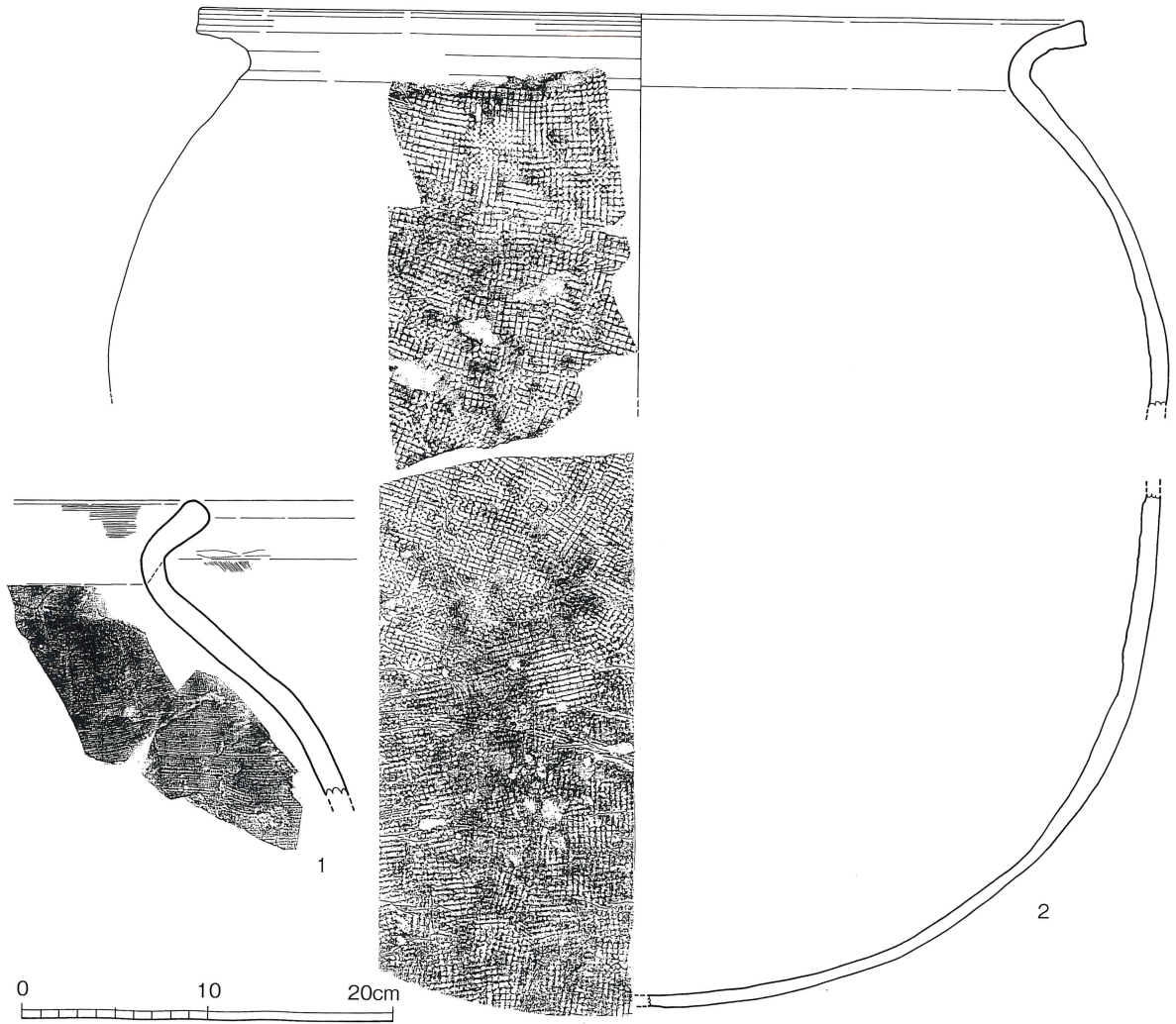
軽石製  
滑石製石鍋  
フイゴ羽口  
東播系  
碗形

る。7・8は在地系土師質土器の皿に高い高台が付いたもので、皿の中心には穿孔がある。9～12は土鍋である。9は口縁外端部に突帯が付き、底部には格子状の叩きがある。10・11は口縁部が屈曲する。13は軽石製でドーナツ状に加工している。14は滑石製石鍋で、15は砥石である。16・17は土製のフイゴの羽口で、径2.5cmの通風孔が開けられている。

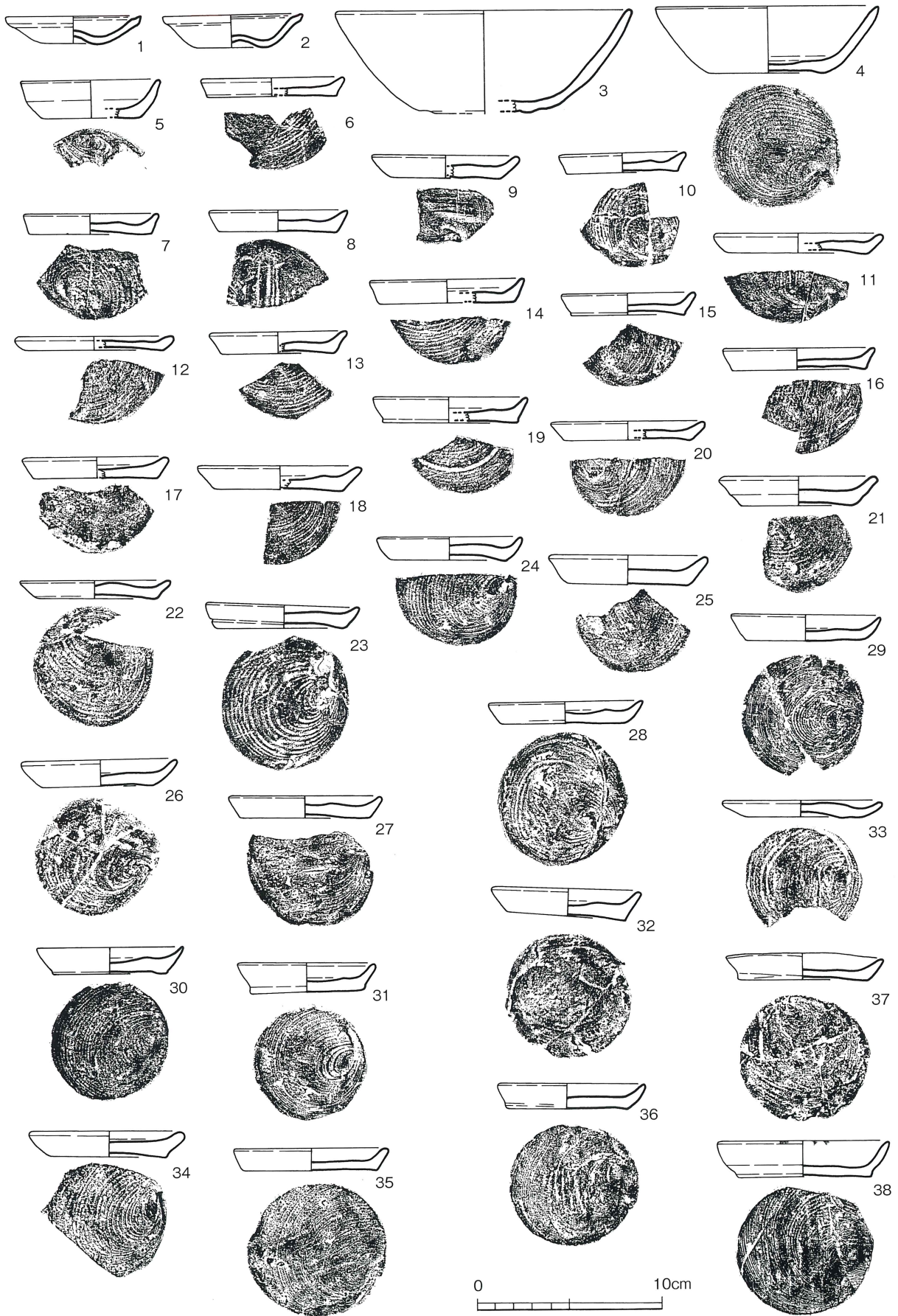
次に下層出土の第107・108・109図であるが、第107図の1～5は東播系の須恵質、6は片口の瓦質土器の鉢である。7は瓦器碗の底部である。8～18と第108図1～3は在地系土師質土器で、8～12の皿の平均法量は、口径8.3cm、底径6.9cm、器高1.2cmである。第107図13～18・第108図1は坏で、平均法量は、口径12.5cm、底径8.9cm、器高3.1cmである。第108図2・3は口径13cmに対し底径6.8cmの碗形をしている。



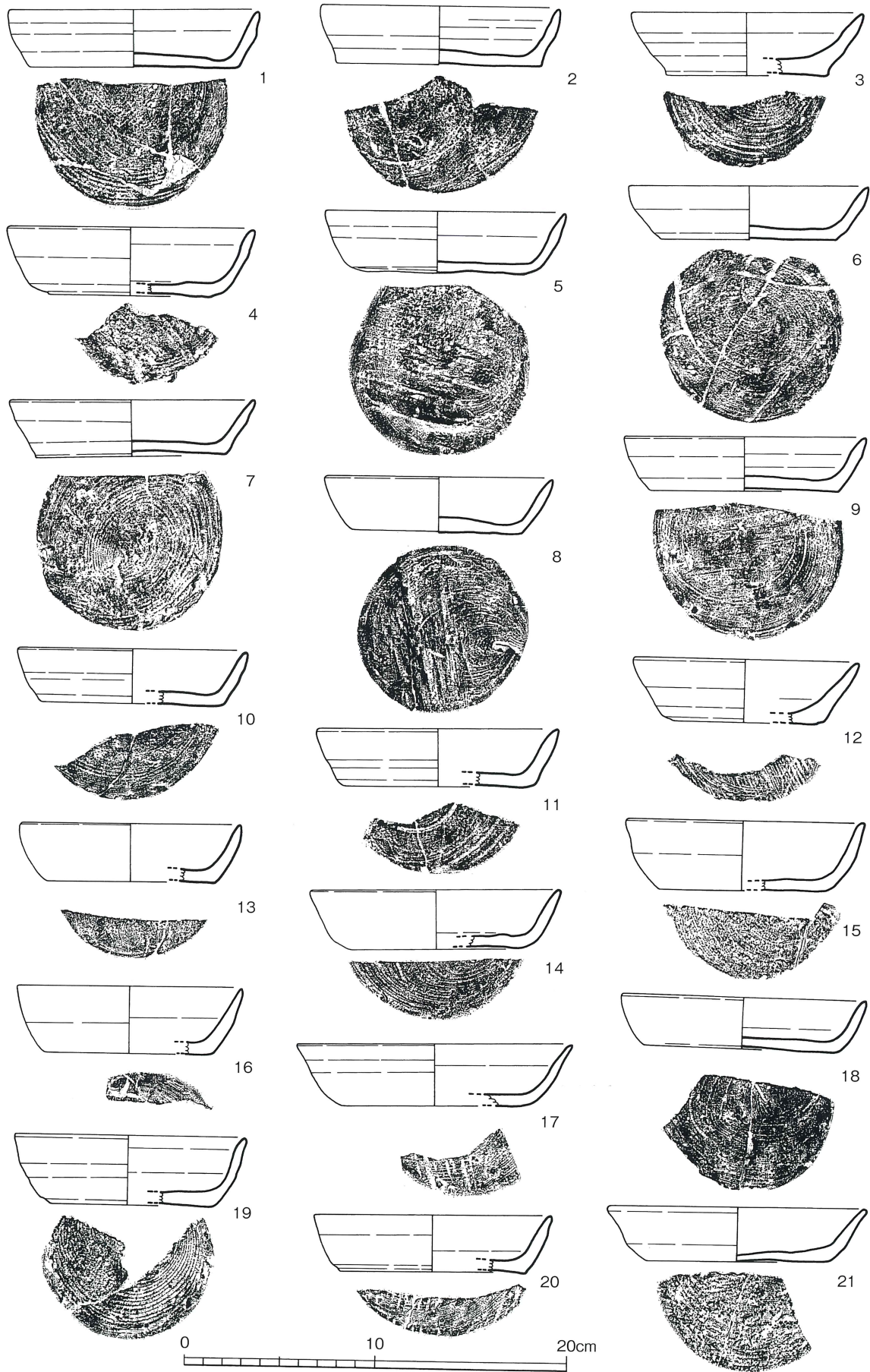
第101図 SK109実測図 (1/30)



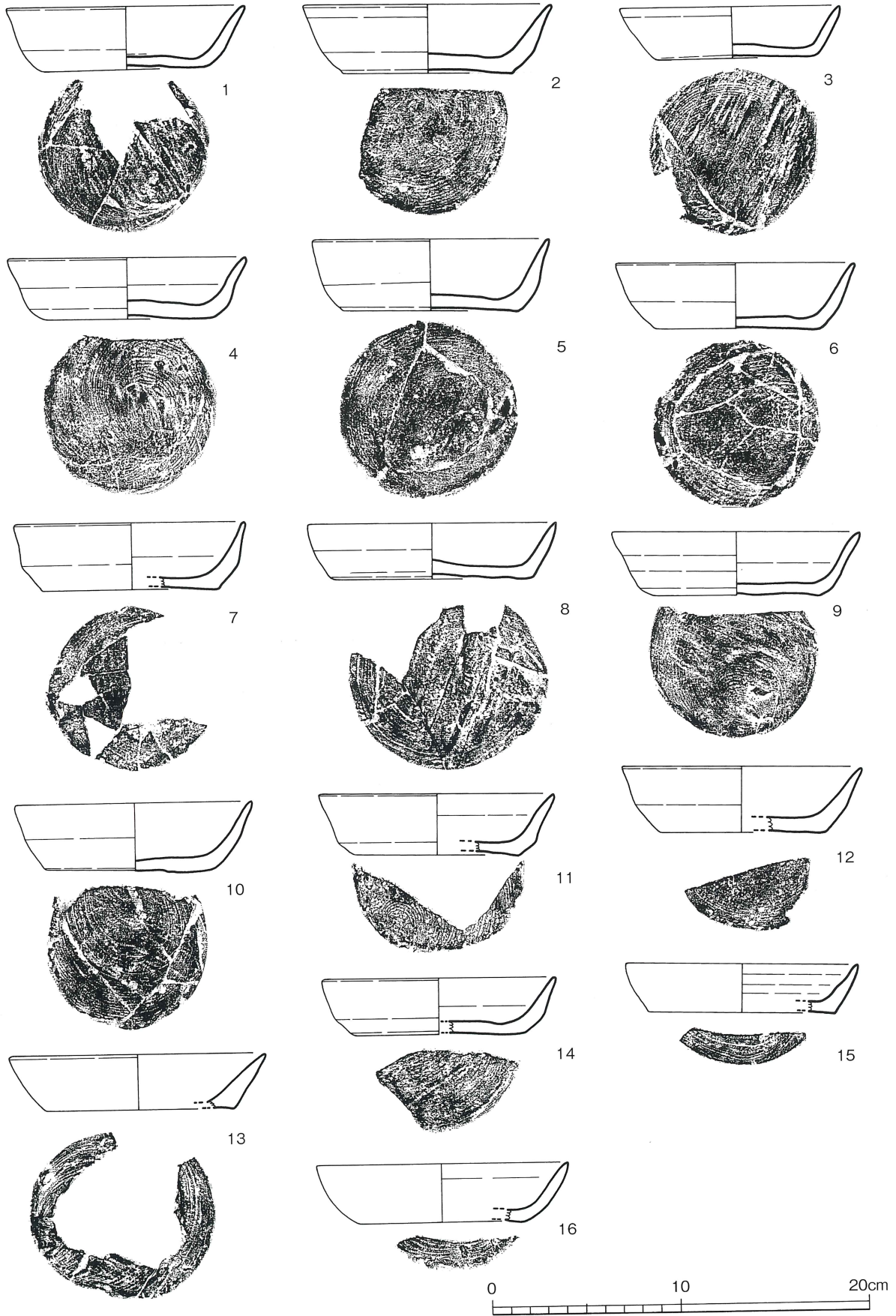
第102図 SK109上層出土遺物実測図① 1・2は (1/4) 他は (1/3)



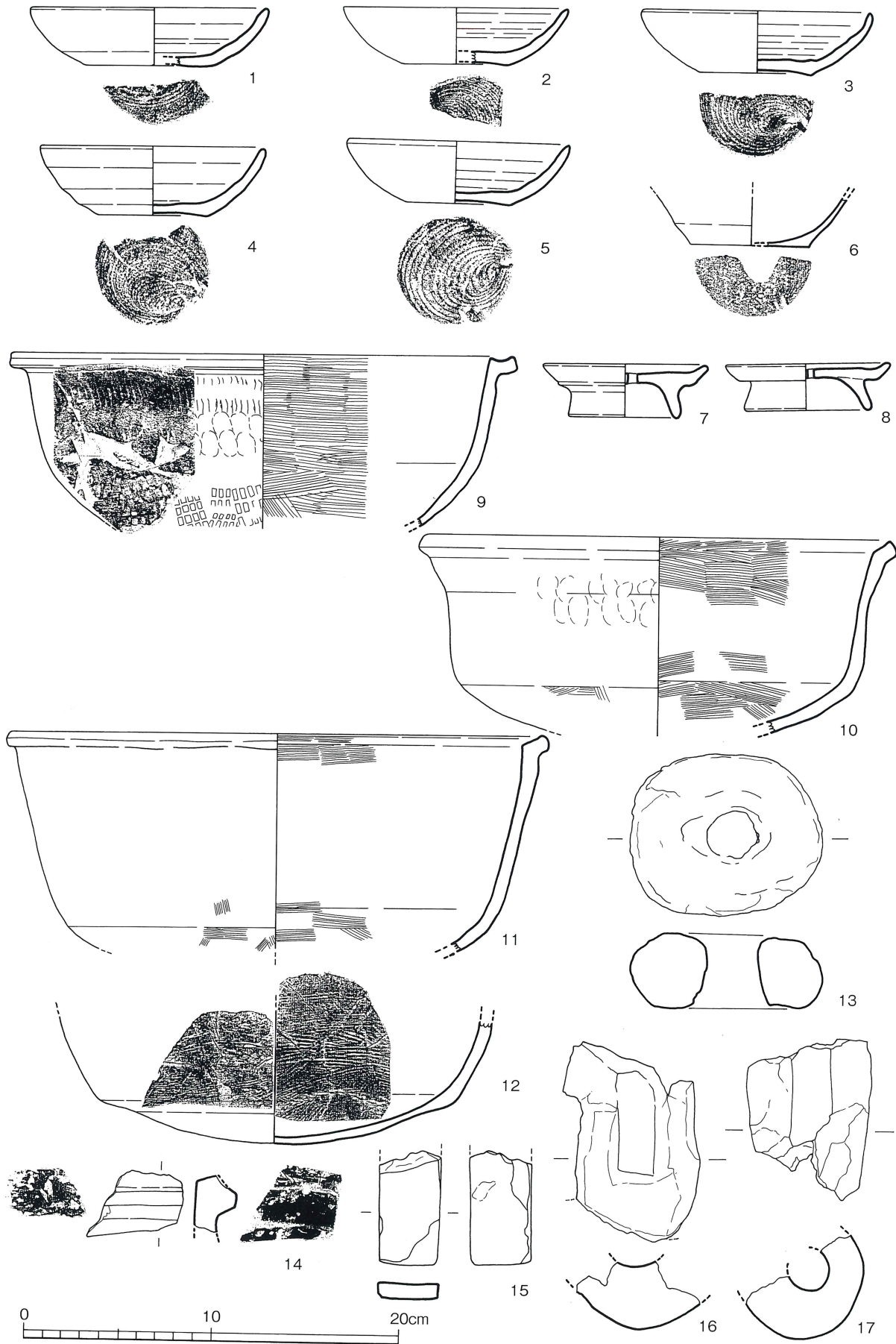
第103図 SK109上層出土遺物実測図② (1/3)



第104図 SK109上層出土遺物実測図③ (1/3)

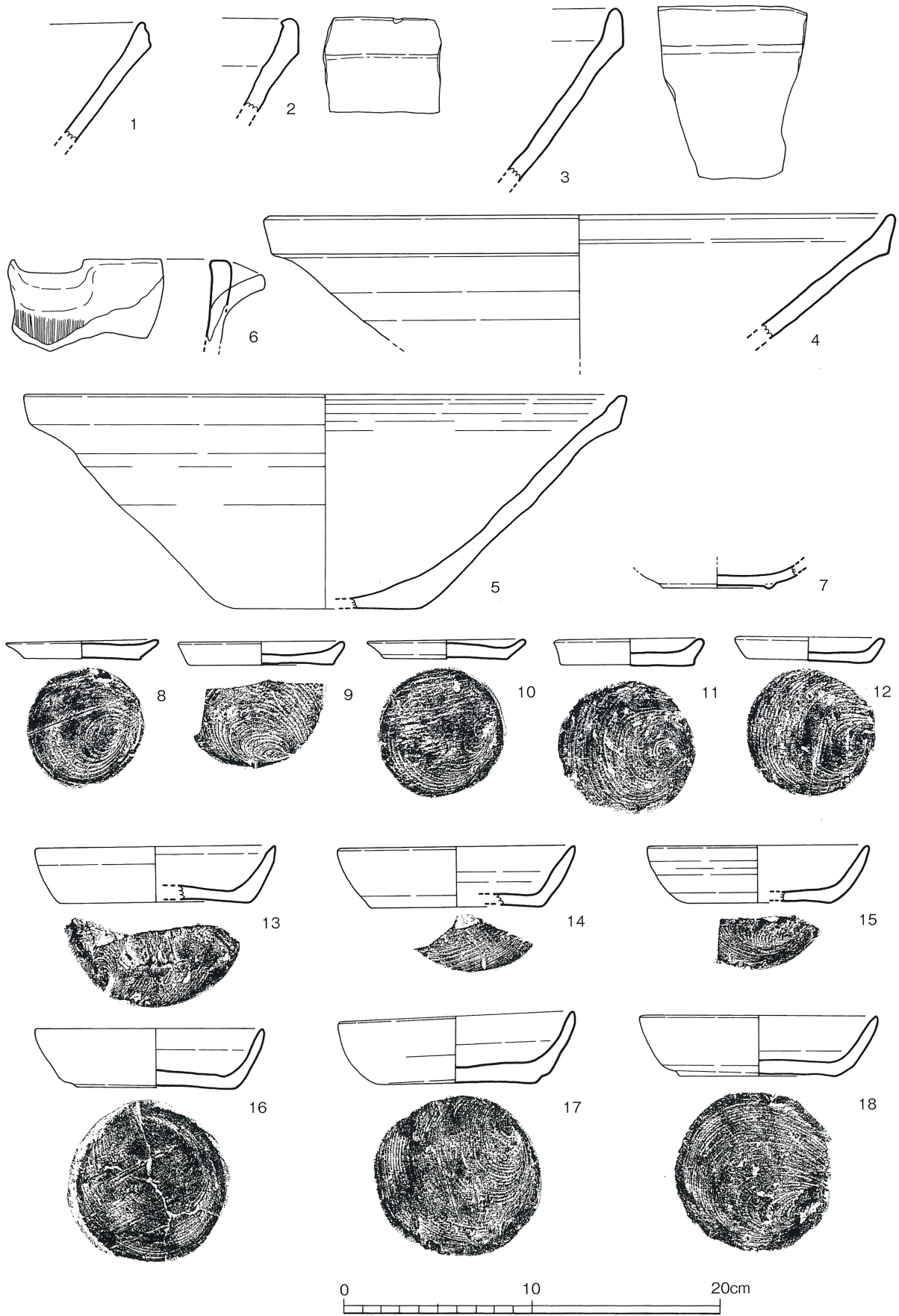


第105図 SK109上層出土遺物実測図④ (1/3)



第106図 SK109上層出土遺物実測図⑤ (1/3)





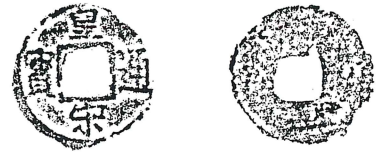
第107図 SK109下層出土遺物実測図① (1/3)



第108図 SK109下層出土遺物実測図② (1/3)

砥石

4~10は土鍋である。4は口縁端部が外に突出するタイプであるが、それ以外は口縁端部を屈曲させるものである。器面は内面が撫で、外面は指圧痕が残る。11は砥石の破片である。第109図は北宋の1038年初鑄の「皇宗通寶」である。

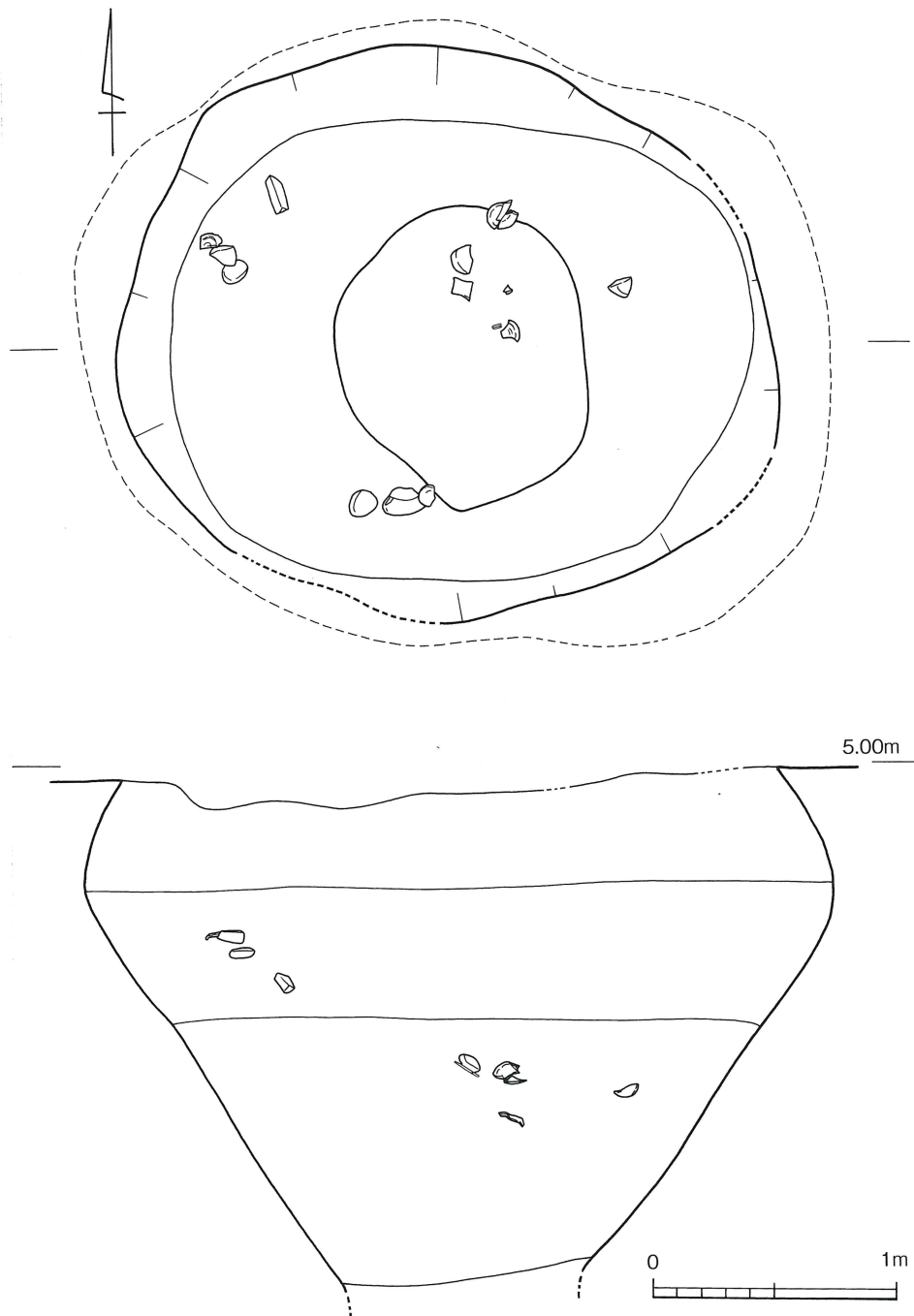


第109図 SK109下層出土銅銭  
実測図 (1/1)

SK109の時期は、土師質土器の形態や組成、備前焼の播鉢の形態から14世紀中葉と考える。

SK111

SK111はJ-78で検出された直径約40cmの遺構で、中から第100図3・4に図示した土師質土器の



第110図 SK123実測図1/30

第2節 遺構と遺物

坏と硯が出土している。3は口径12.3cm、底径8.4cmである。4は幅9.1cmで青灰色をしている。

SK114

SK114はK-76で検出されたSE-013の上面に掘り込まれた浅い土坑である。遺物は第100図5に図示した砥石の破片が出土している。

SK122

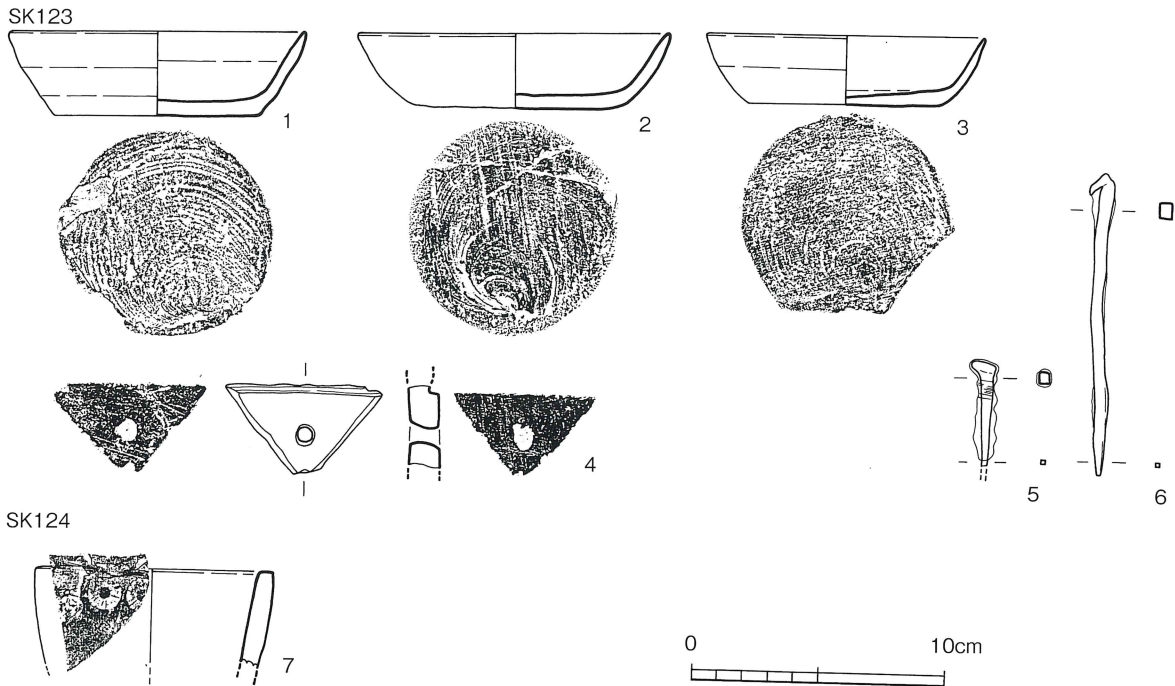
SK122はK-74で検出された幅約40cm、長さ2.8mの浅い溝状の土坑である。遺物の出土は少なく、第100図6に図示した瓦質土器の取っ手がある。

SK123

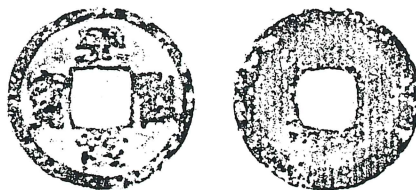
SK123はSK122の下で検出された土坑で第110図に図示した。遺構の規模は南北2.3m、東西2.7mの楕円形をしており、深さ2mまで掘り下げたが、直径1.1m×1.2mと狭くなり、中断した。遺構の断面はオーバーハングしており、中からは第111図1~6・第112図に図示した遺物が出土している。

在地系土師質土器 第111図1~3は在地系土師質土器の坏で、1は口径11.8cm、底径8.2cm、器高3.3cmである。2は口径滑石製石製品 14.4cm、底径8cm、器高2.9cmで、3は口径11cm、底径7.6cm、器高2.7cmである。4は滑石製の石製品で、穿孔がある。石鍋の二次加工品と考えられる。5・6は鉄釘であるが、6は完存しており、長さは11.9cmである。5は先端部を欠く。

第112図の銅銭は北宋の1023年初鑄の「天聖元寶」である。



第111図 SK123・124出土遺物実測図 (1/3)



第112図 SK123出土銅銭実測図 (1/1)

井戸

SK123は井戸遺構の可能性を残すものの、井戸枠等の痕跡は認められなかった。時期は14世紀代と考える。

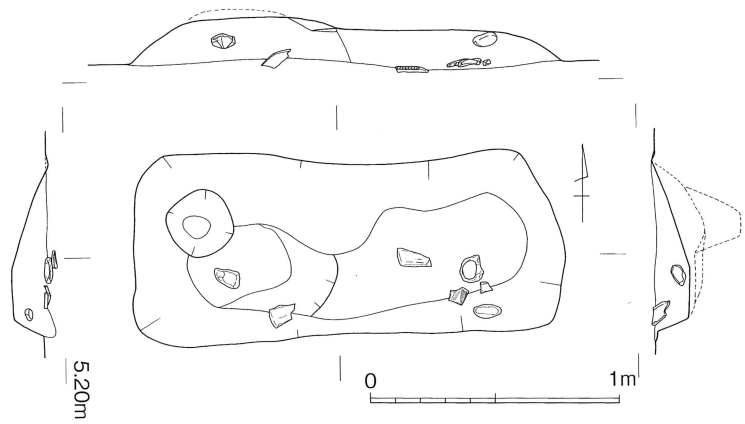
SK124

第113図に図示したSK124はJ・K-76で検出された土坑である。東西1.7m、南北70cmの長方形をした土坑で、検出面からの深さは、東側が浅く約15cmであるが、西側は約20cmある。遺構内からの出土遺物は、細片が多く、量は少ない。主要な遺物は第111図7に図示した瓦質土器がある。この土器は、口径8.5cmで、口縁部外面に菊花文のスタンプが連続して付く。

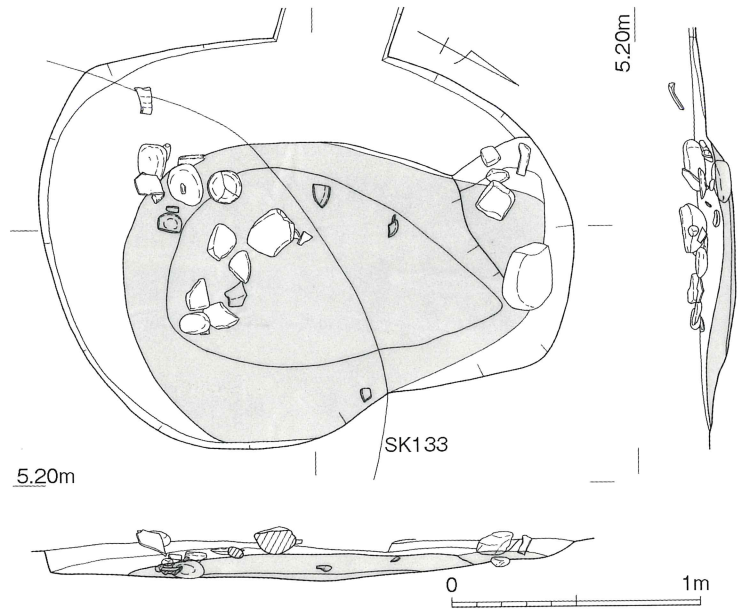
菊花文

SK127

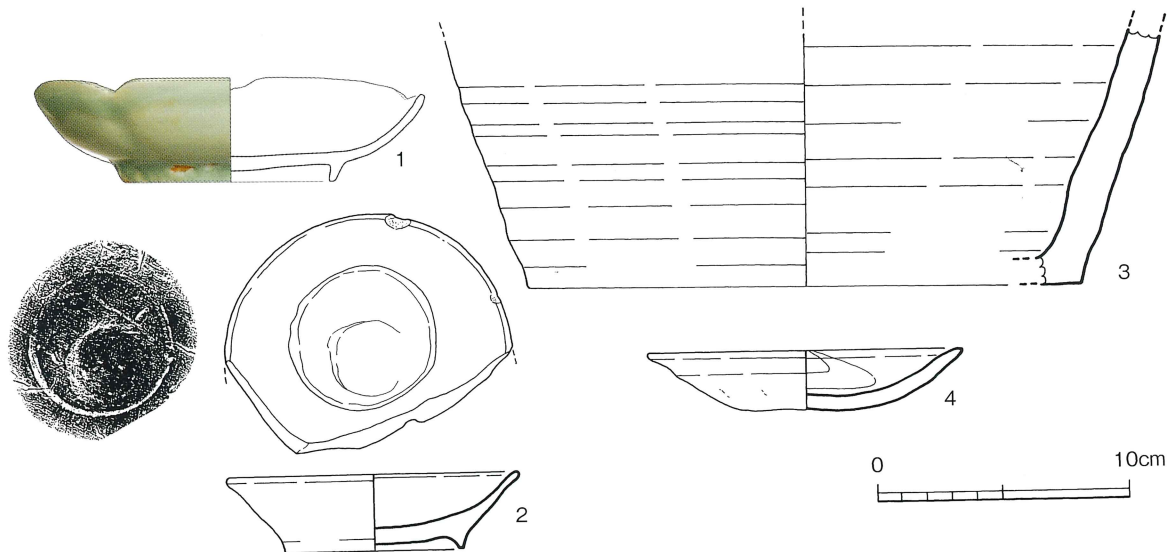
第114図に図示したSK127はJ・K-77検出された土坑である。規模は南北約2.1m、東西約1.6mの楕円形をしている。深さは、最深部で10数cmあり、床面には炭化物が敷きつめられたように分布している。遺物は遺構の上面に礫が分布し、そ



第113図 SK124実測図 (1/30)



第114図 SK127実測図 (1/30)



第115図 SK127出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

して炭化物の上面で出土したのが第115図の遺物である。

龍泉窯系  
輪花皿  
備前焼  
水屋甕

第115図1は龍泉窯系の青磁の輪花皿である。2は高台の付く瓦質土器の皿で、口径11.6cm、底径7cm、器高3cmである。高台の中央部に回転台に固定した痕跡がある。3は備前焼で、水屋甕の底部と考えられ、21.8cmである。4は京都系土師器で、口径12.5cm、器高2.4cmである。

遺構の時期は、古い遺物も含まれるものの、京都系土師器が出土していることから16世紀後葉と考える。

SK128

SK128はK-76のSK007の床面で検出された土坑で第116図に図示した。炭化粒を含む埋土が詰まっていた。確認された規模は南北約1.4m、東西約1mで、深さは検出面から約50cmである。遺構内からの出土遺物は多くないが、代表的なものを第117図1に図示した。

灯明皿

この遺物は、内面に螺旋状に段が付く調整痕を残す坏で、口径は12cm、底径6.3cm、器高2.5cmで、口縁部は逆ハの字状に開き、端部は緩く外反する。口縁部内端部には煤が付着しており、灯明皿として使用されている。

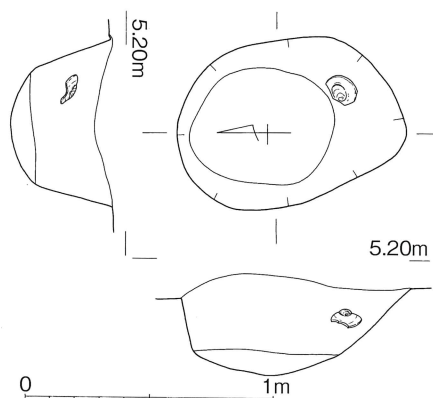
SK128の時期は、切り合うSK007が16世紀後葉で、その床面で検出されたことや、遺物の形態から16世紀初頭から前葉と考える。

SK129

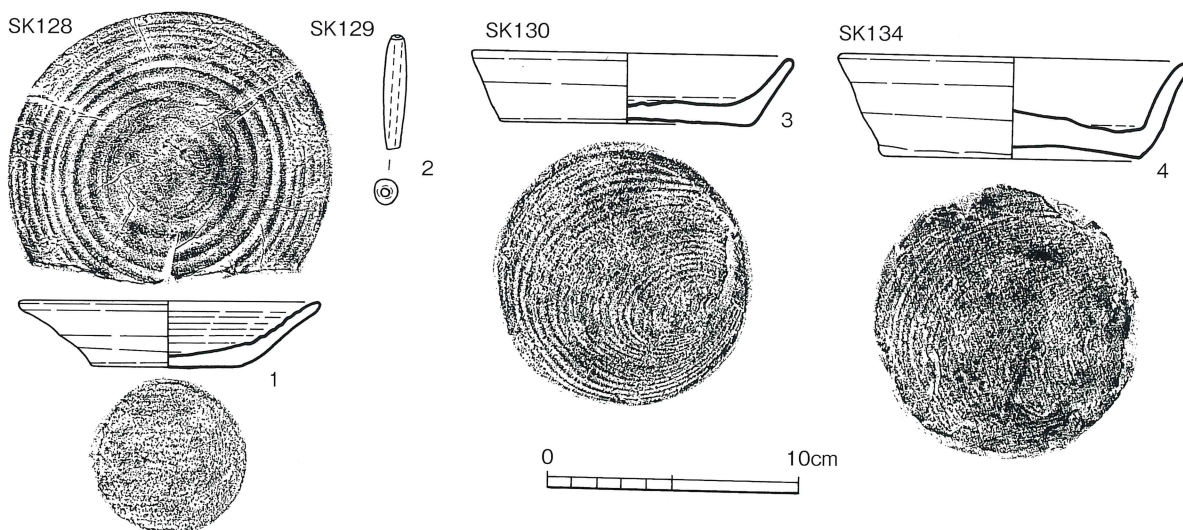
SK129はK-76で検出された小土坑である。遺構の周辺は大小の土坑が複雑に重なり合い展開している。SK129はSK101から上部の大半を切られている。第118図のSK130の南端に図示した遺構の規模は、南北約40cm、東西約60cm、深さ約40cmである。遺構内の埋土は焼土粒を多く含む。

土錘

出土遺物はほとんど無く、第117図2に図示した土錘が出土している。この土錘は長さ4.6cm、重さ4.7gである。遺構の時期は不明である。



第116図 SK128実測図 (1/30)



第117図 SK128・129・130・134出土遺物実測図 (1/3)

SK130

SK130はK-75で検出された土坑で第118図に図示した。遺構の規模は長さ約5m、幅約1mで、溝状をしている。深さは南から徐々に深くなり、北側半分は約20cmである。遺構内の埋土の床面付近には炭化粒を含む。遺構は比較的大きいが内部からの遺物は少ない。

第117図3に図示したのは、ほぼ完形品で出土した在地系土師質土器の坏である。法量は、口径12.8cm、底径10.1cm、器高2.7cmである。口縁部の内端部には部分的に煤が付着しており灯明皿として使用されている。

遺構の時期は、在地系土師質土器から14世紀代と考える。

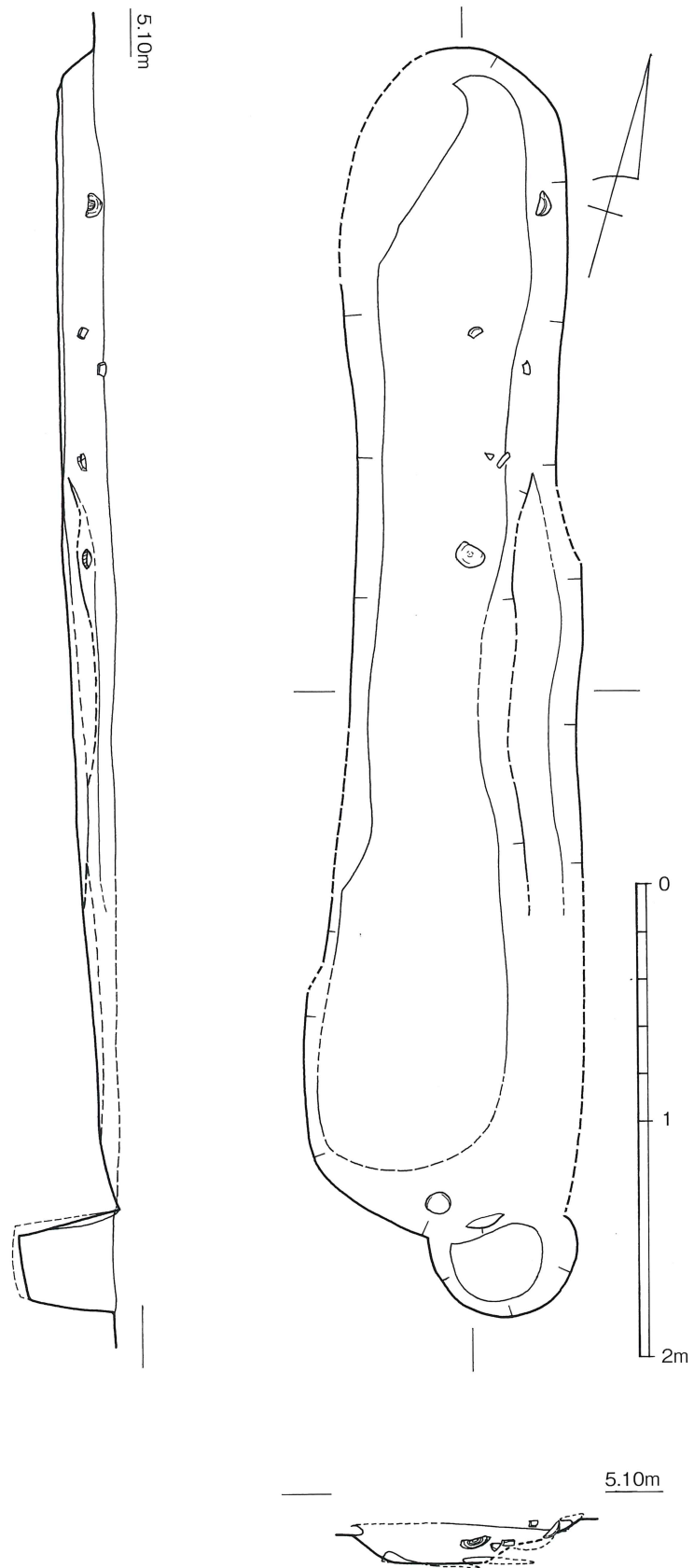
SK131

SK131はJ-77で検出された土坑である。確認された遺構は弧状で、規模は南北約1mである。遺構は円形になると想定できるが、大半は西側の調査区外に延びている。遺構の深さは30cm以上あるが、不明である。遺構内の埋土には炭化粒を多く含む。

出土遺物は多くないが、第100図7に図示した瓦質土器の挿鉢が出土している。この挿鉢は、SK124出土の資料と接合する。口径25cmで、内面には放射状の挿目が確認できるが、磨滅している。胎土に砂粒が少なく、色調は白灰色をしている。

灯明皿

瓦質土器



第118図 SK130実測図 (1/30)

14世紀代の遺構と考える。

SK133

SK133はK-77で検出された土坑で、SK090・SK127・SK142と重なり合う。確認できる遺構の規模は直径約2.8cmの円形であるが、深さは浅く約15cm程度で、中央部が最深部で皿状に窪む。

椀形  
鉄釘

遺構内からは糸切り底の在り系土師質土器を中心とした遺物が出土し、その主要なものは第100図8～11に図示した。8は瓦質土器の壺である。9は口径7.7cm、底径5.5cm、器高2.1cmの小型の坏で、口縁部の外面と内面の一部には煤が付着し、灯明皿として使用されている。10は口径12cm、底径7.3cm、器高3.3cmの坏で、同類の坏に比較すると口径に対し、底径が小さく、椀形との関連が推測される。11は先端を欠く、長さ6.3cmの鉄釘で、木質が錆と共に付着している。

遺構の時期は、在り系土師質土器の形態から14世紀代と考える。

SK134

人骨  
土坑墓  
副葬品

SK134はK-77で検出された人骨を検出した浅い土坑である。整地層を掘り下げて行く途中で、人骨のまとまりを検出した。その状況は第119図に図示した。土坑墓と想定され、土坑の規模と掘り込みを精査したが明瞭ではない。人骨の保存状況は悪く、取上げは困難であったが、埋葬姿勢は側臥屈葬で、顔は西に向けている。胸部付近から第117図4に図示した在り系土師質土器の坏がほぼ完形で出土しており、副葬品の可能性が強い。

坏の法量は、口径14.2cm、底径10.6cm、器高3.9cmで、口縁部は、外反する。同類の坏に比較するとひと回り大きい。胎土には砂粒が少ないが、石英を少量と角閃石を多く含む。底部には糸切り痕と板状圧痕が残されている。

SK136

毛抜き  
土坑墓

SK136はK-76で検出された土坑である。確認できる遺構の規模は、東西0.9m、南北約1mのほぼ円形で、深さは約80cmあり。遺構内の土層は、短期間に埋められて状況であり、内部から骨片と第100図12・13に図示した毛抜き状の鉄器が出土している。

第100図では12と13に分けて図示しているが、同一個体で、長さ約8cmの毛抜き状の鉄器と考える。遺構は形態や土層の堆積状況、骨片の出土から土坑墓の可能性が強い。

SK140

瓦質土器

SK140はK-77で検出された土坑で第120図に図示した。東半分を攪乱層で削られており全体を見ることは出来ない。確認される遺構の規模は、南北約3.5m、東西約2mの半円形で、深さは検出面から10～15cmで、床面は平坦である。床面から平面が方形の柱状遺構が9ヶ所確認されたが、この遺構との関連は不明である。遺構内からは北側を中心に礫や遺物が出土した。

出土遺物の主要なものは第121図1～6に図示した。1～3は瓦質土器で、1は口径31.2cmの内湾する鉢で、口唇部は肥厚し平坦部を形成している。口縁部外面には2.3cmの間隔で二条の細い突帯が巡り、その間を回転施文の幾何学的な押捺文が施文されている。2は口径13.5cm、底径12cm、器高5.6cmの小型の鉢で、香炉の可能性もある。口縁部は直口し、筒状になり、外面には菊花文のスタンプが連続的に押捺されている。3は口縁部が直口する火鉢の破片と考える。器面は内外面ともヘラ磨きされている。4は在り系土師質土器の坏で、口径は13.7cm、



第119図 SK134実測図 (1/20)



底径10.2cm、器高3.9cmで、口縁端部は外反する。胎土に角閃石・砂粒・赤色粒子を多く含む。底部には板状圧痕が残る。5は砥石の剥離した破片である。6は砂岩製茶臼の受けの部分である。直径28.8cmで、和泉砂岩の可能性はある。

SK140の時期は、14世紀代であるが、4の在地系土師質土器の形態から後葉と考える。

**SK141**

SK141はK-77のSK140の南で検出された土坑である。確認できる遺構の規模は、直径約2mの円形で、上面には多量の礫が埋め込まれており、礫により一気に埋め立てられた状態である。このた遺物の出土は少ない。

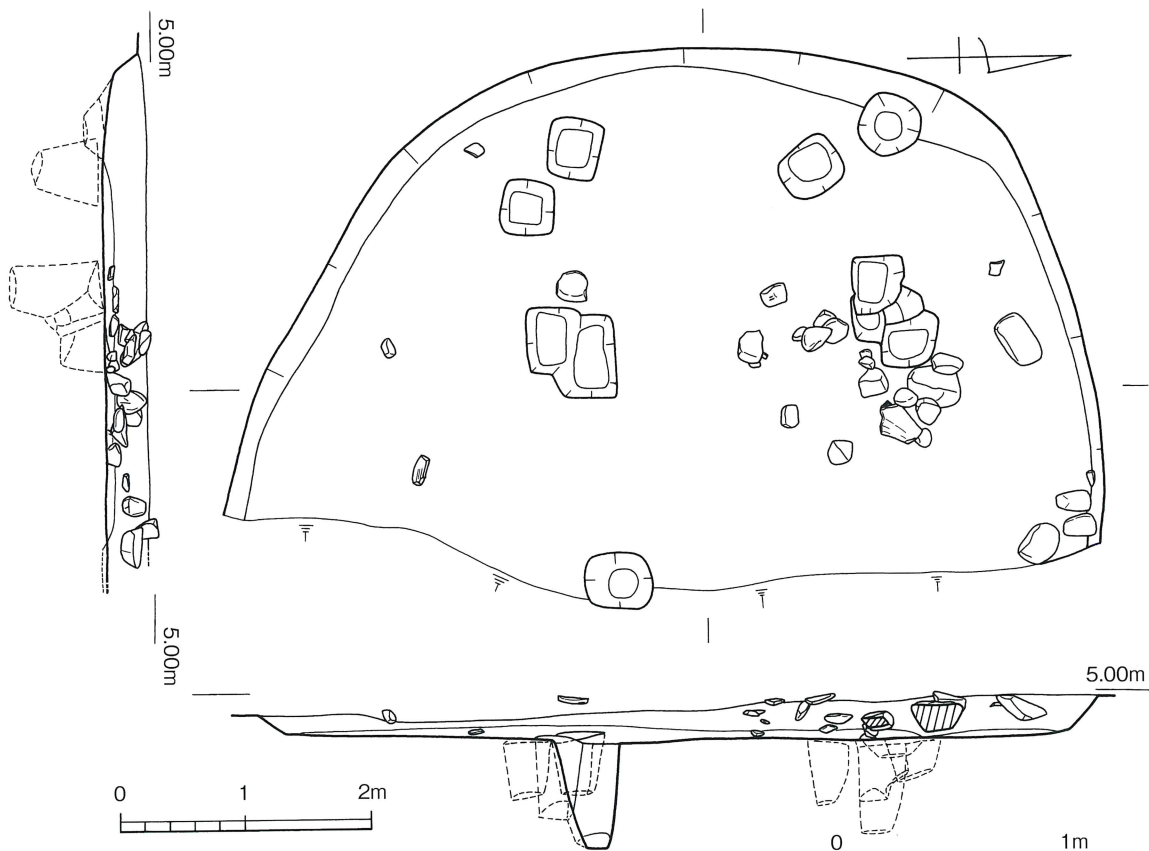
備前焼 第121図7・8は出土遺物であるが、7は鉄製品で、断面が方形で、釘の可能性もあるが、全体が緩く湾曲している。8は備前焼の大甕の底部で、径は41.6cmを測る。器面は撫で仕上げで、内面に自然釉が認められる。時期は、この大甕から16世紀後葉と考える。

**SK143**

SK143はK-77で検出された土坑である。井戸であるSE126と大部分重なるため、確認できる遺構の規模は、東西に細長く幅30cm、長さ1.7mである。本来は大きな掘り込みの土坑であったと推測できる。このため、遺物の出土は少ない。

東播系 第121図9・10・11に図示したものはその主要な遺物である。9は東播系の須恵質土器の鉢で、内面は磨滅している。10は在地系土師質土器の皿で、口径8.4cm、底径6.8cm、器高1.2cmである。砂粒は少なく、赤色粒が多い。11は長さ4.3cm、重さ3.2gの紡錘形の土錘である。

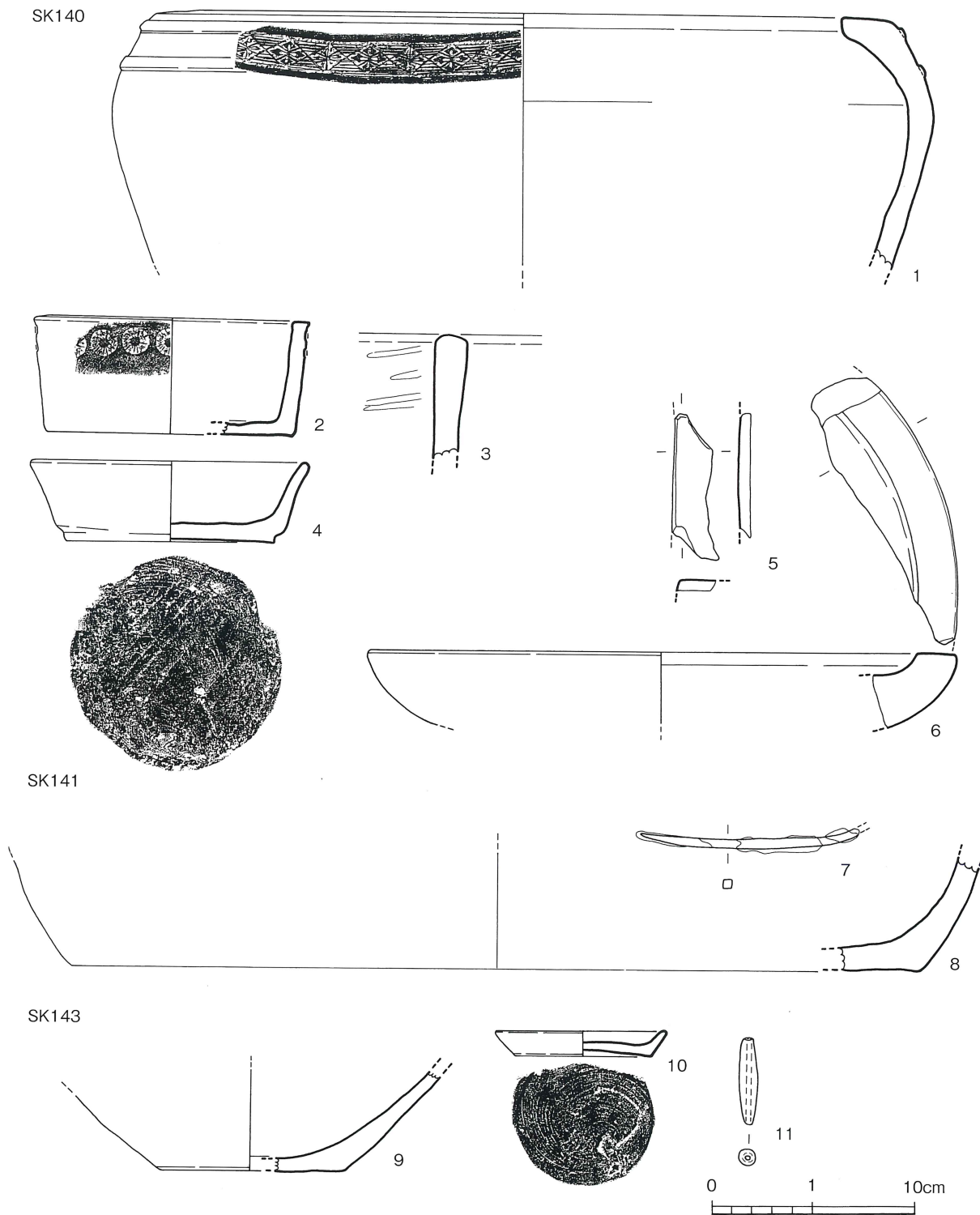
遺構の時期は14世紀代と考える。



第120図 SK140実測図 (1/30)

SK144・SK172

SK144はL-78で検出された遺構である。第122図に図示した。この遺構は調査区の東南端に広がる浅い窪みであるSK172の一部の可能性もある。SK144としたもの検出されたはこの内東南隅で検出された集石を中心とした遺構である。遺物は、この遺構を中心に多量に出土したが、SK172の遺物と分離不能である。このため、これらの遺物を同じ図面上で報告する。



第121図 SK140・141・143出土遺物実測図 (1/3)

景德鎮窯系 出土した主要な遺物は第123図・第124図3～5・第125図に図示した。第123図1は景德鎮窯系の青花皿である。口径12.8cm、高台径7.7cm、器高2.8cmの完形品である。見込みに人物像が描かれ、底面には宣徳年製の銘がある。2は口径14.8cmの備前焼の壺で、灰赤色をしている。3は瓦質土器の播鉢の底部で、見込み部に波状の播り目がある。4は口径27.7cmの備前焼の播鉢で、口縁端部内面は凹線状に窪み、暗赤褐色をしている。5は口縁部外面に鏢状の突帯が巡る土鍋である。内面は横方向、外面は縦方向の刷毛目で調整している。

京都系土師質土器 6～13は京都系土師質土器の皿である。口径は8cm前後、器高は2cm前後で、豊後府内で出土する京都系土師器五法量の中で、最小のグループである。7・13以外には口縁部の一部に煤が付着しており、灯明皿として使用されている。14・15は在地系土師質土器である。14は皿で、口径7.4cm、底径5.6cm、器高1cmである。15は坏で、口径12.7cm、底径7.7cm、器高2.3cmである。16は杓子状の鉄器で、全長12.2cm、口径8.7cm、器高2.5cmである。17は銅製品で、輪の付いた把手である。18は長さ14.3cmの鉄釘と考えられるが、断面は長方形で、頭部近くの断面は1cm×1.5cmを測る。

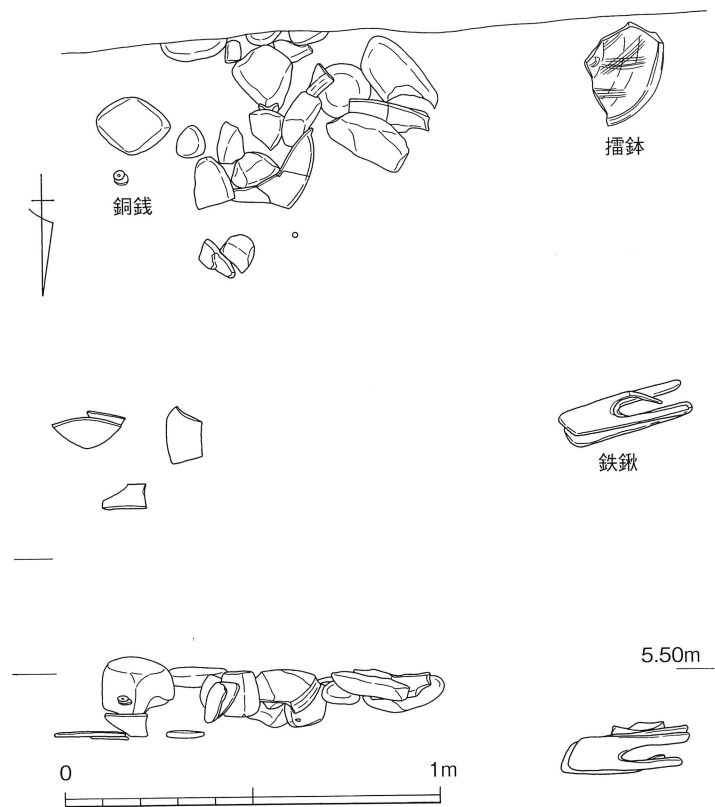
太鼓形分銅 第124図3・4は備前焼の播鉢である。口縁部外面には凹線が二条巡り、先端部内面は凹線状に窪む。播り目は見込み部に十字に、口縁部内面には放射状と斜めに入れられている。5は甕の底部と思われる。6は直径0.9cm、厚さ0.2cm、重さ0.6gの太鼓形の分銅である。片面に豊後府内出土の分銅「三」の文様陽刻にししば見られる「三」の文様が陽刻されている。この文様は磨滅しているが、大友家の定紋と伝えられている。7は錆により付着した銅銭3枚である。熱を受けている可能性もある。

鋤・鍬 第125図は一括埋設された鋤・鍬先である。1は3・4・5の3点が2の鉄具で括られた状態を図示している。その鉄具2は幅1cm、長さ約40cmの鉄製の帯を曲げたものである。3・4・5の鋤・鍬先3点は先端部の形態が、3は丸みを持ち、5は角ばり、4はその中間の形態であるものの装着部はU字形になる。3の長さは約35cm、刃先の最大幅約13cmである。4は長さ約34cm、刃先の最大幅は約12cmである。5は装着分の一部を欠くが、長さ約35cm、刃先の最大幅は約10cmである。

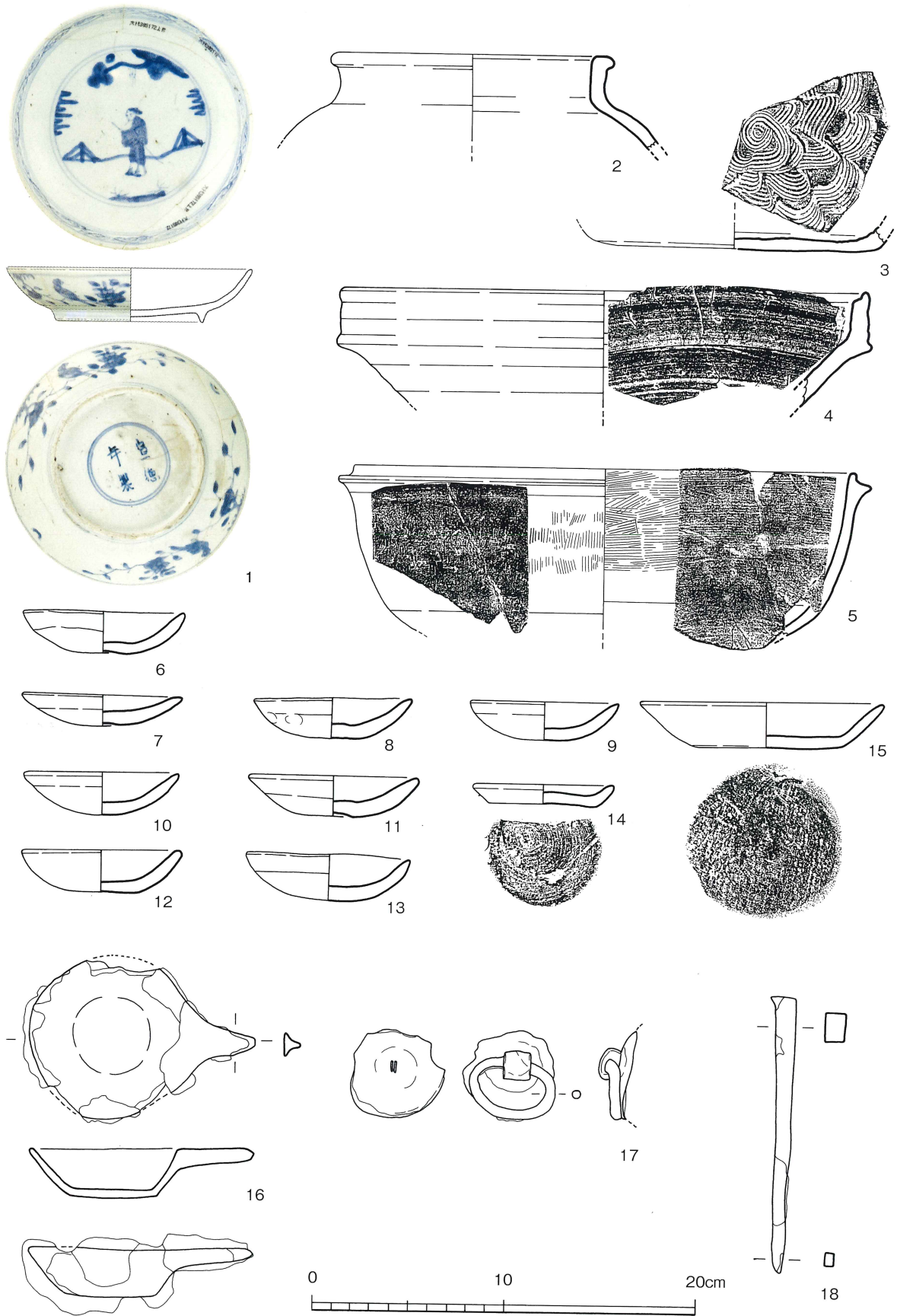
先にも述べたが、SK144はSK172の一部の可能性が強い。出土遺物から見ると、京都系土師器や備前焼の播鉢から16世紀後葉と考えられ、その時期にこの部分を整備した整地層の可能性が強い。そうした中で出土した第125図の鉄製の鋤・鍬先は、鉄帯で束ねられており、一括して埋設したと言える。SK008の一括性の強い鉄器と同様な背景で、埋設されたと推測できる。

#### SK145

SK145はL-76で検出された土抗で第126図に図示した。確認された遺構の規模



第122図 SK144実測図 (1/20) SK172の拡大

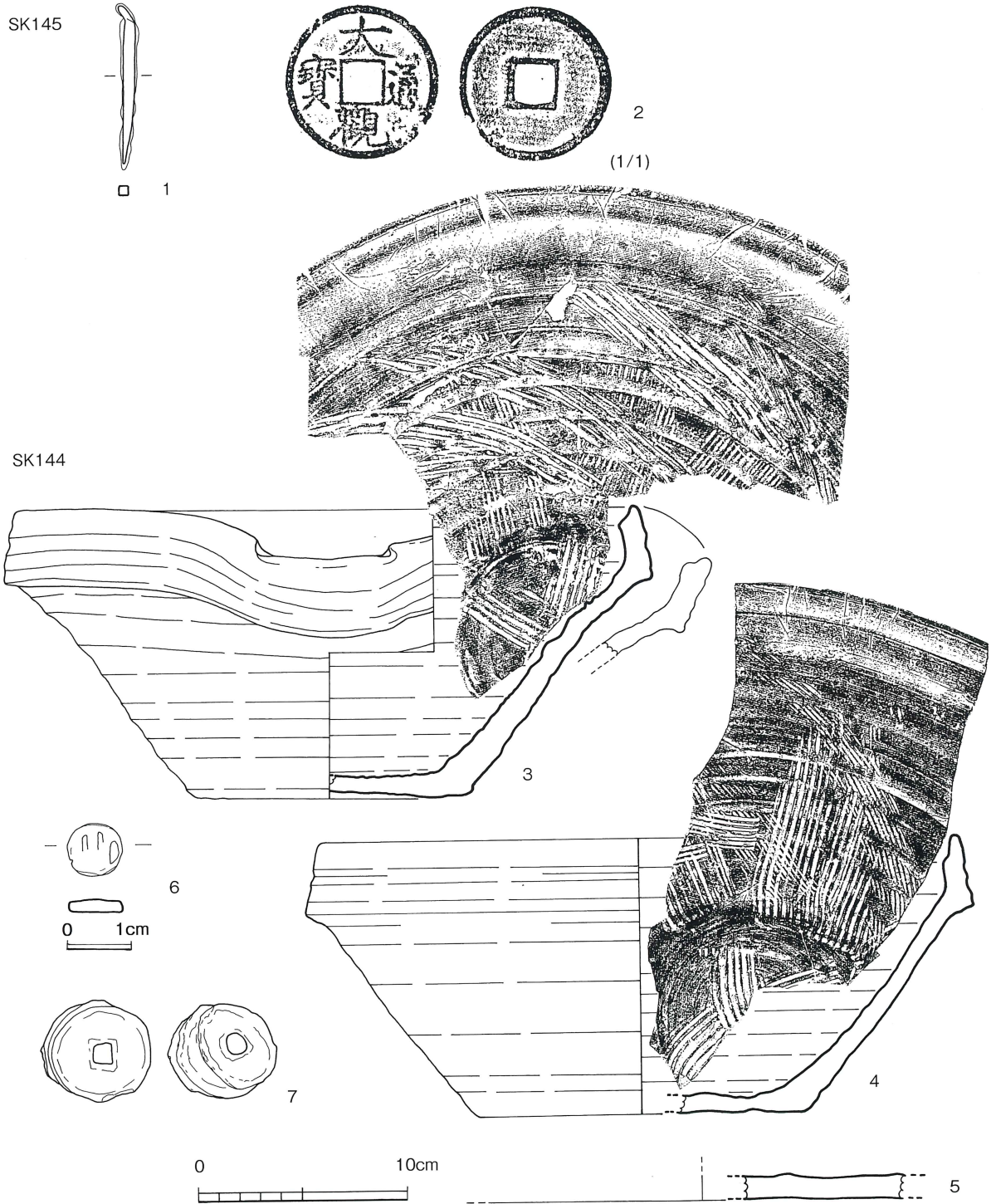


第123図 SK144出土遺物実測図 (1/3)

は、直径約1.2mの円形をしており、検出面から深さ約40cmで平坦な床面に達する。床面の規模も直径約80cmの円形をしている。

銅銭  
鉄釘

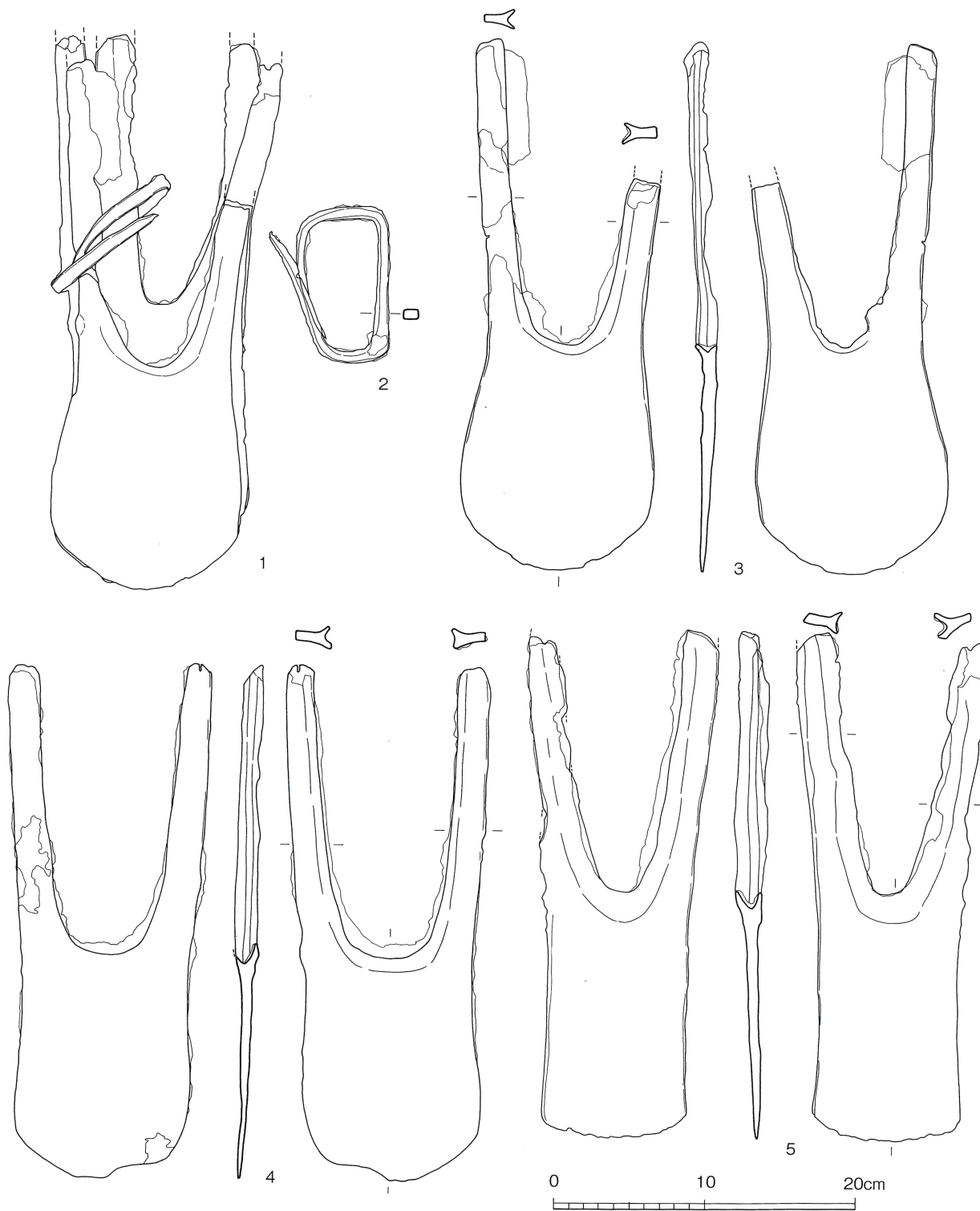
遺構内からの出土遺物は少なく、わずかな土師質土器と第124図1・2に図示した鉄釘と銅銭が出土した。1の鉄釘は錆びに包まれているが、ほぼ完存している。長さ7.6cmで、断面は0.5cmの方形である。2の銅銭は、北宋の1107年に初鑄された「大観通寶」で、保存状況は良好である。径2.4cmで、重さは2.7gである。遺構の時期は不明である。



第124図 SK144・145出土遺物実測図 (1/3) 2・6は (1/1)

SK146

SK146もL-76で検出された土抗である。遺構の規模は南北約3m、東西約2.2mで楕円形をしている。検出面からの深さは約20cmで、床面は平坦である。遺構内からは、第127図に図示したように、拳大を中心とした礫が多量に検出され、この遺構を埋め立てる際に投棄された状態であった。しかし、遺物の出土は少なく、土師質土器などもわずかであった。



第125図 SK144出土鉄製品実測図 (1/4)

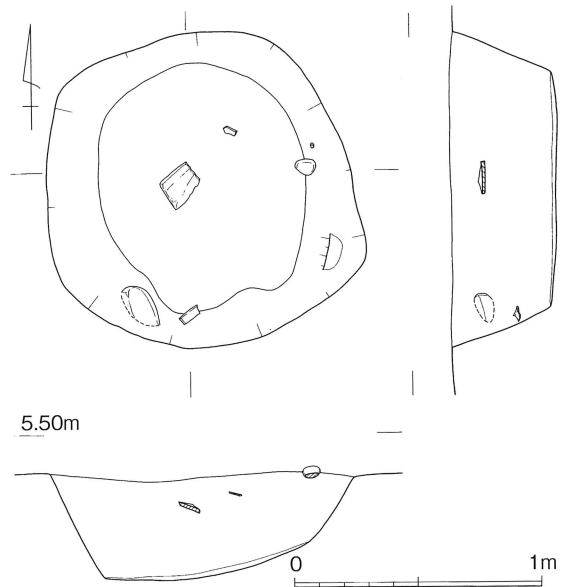
景德鎮窯系  
備前焼  
水屋甕

そうした中、第128・129図に図示したのは主要な出土遺物である。第128図1は景德鎮窯系の青花の碗の口縁部である。2・3は備前焼の製品で、2は口縁部が短く立ち上がり、肩が張る口径15.6cmの水屋甕である。灰赤色をしている。3は口縁部を折り返し玉縁状に整形した大甕である。赤褐色をしている。4は土錘であるが、一部を欠いている。残されたものは長さ4.2m、重さ4.8gである。

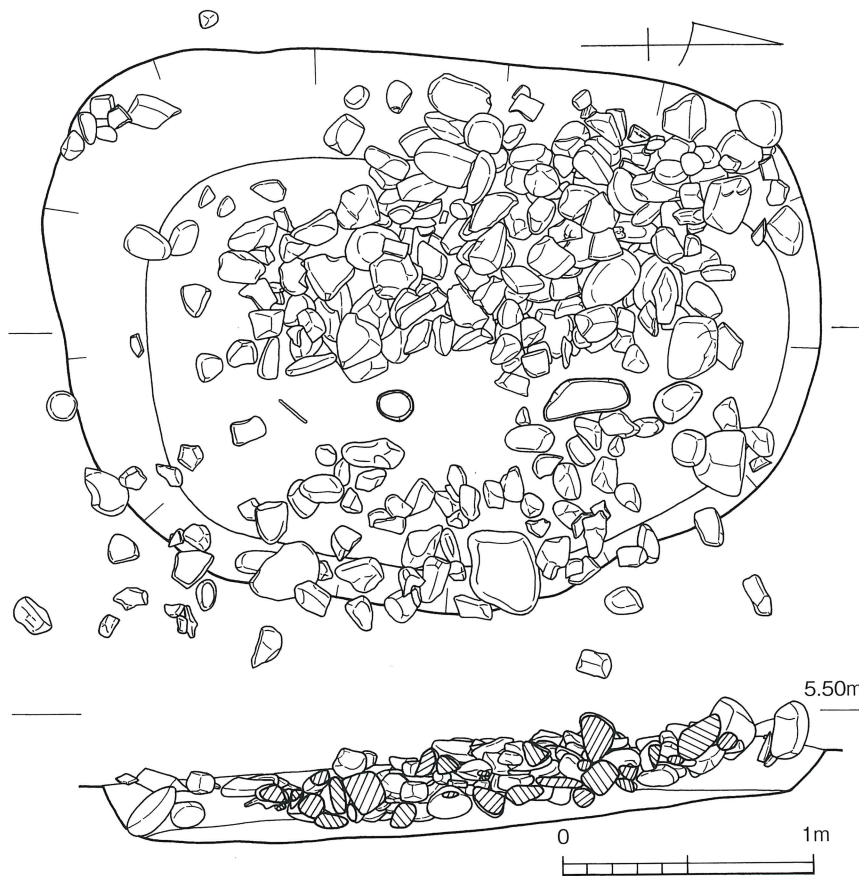
挽き白

第129図に図示した1は安山岩製の挽き白の上白で、直径30cm、厚さ9.6cmである。2は青銅製品で、長さは12.9cm、断面は約0.2cmと薄い。用途不明の遺物である。

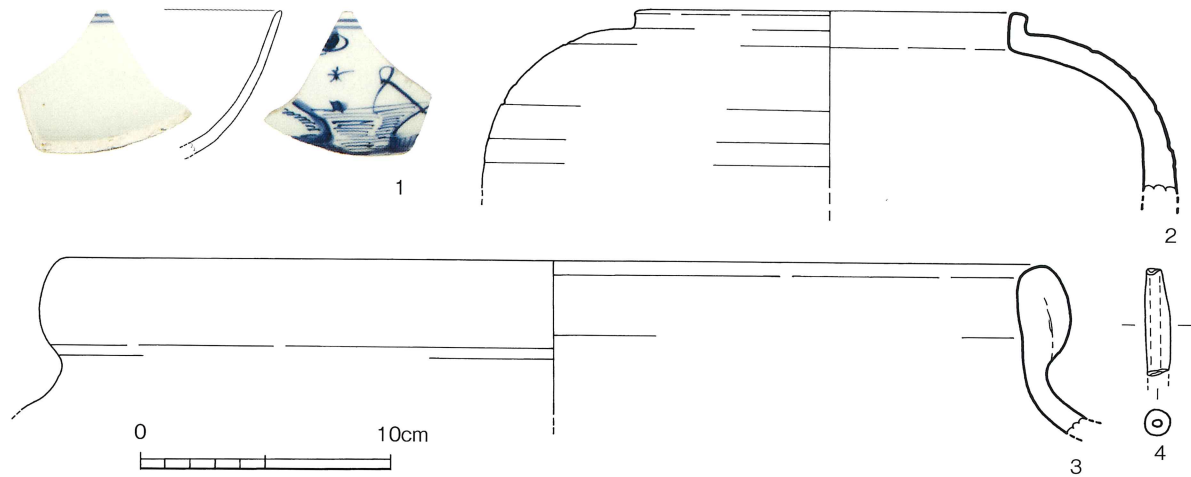
遺構の時期は、景德鎮窯系の青花碗や備前焼の水屋甕が出土していることから、16世紀後葉と考える。



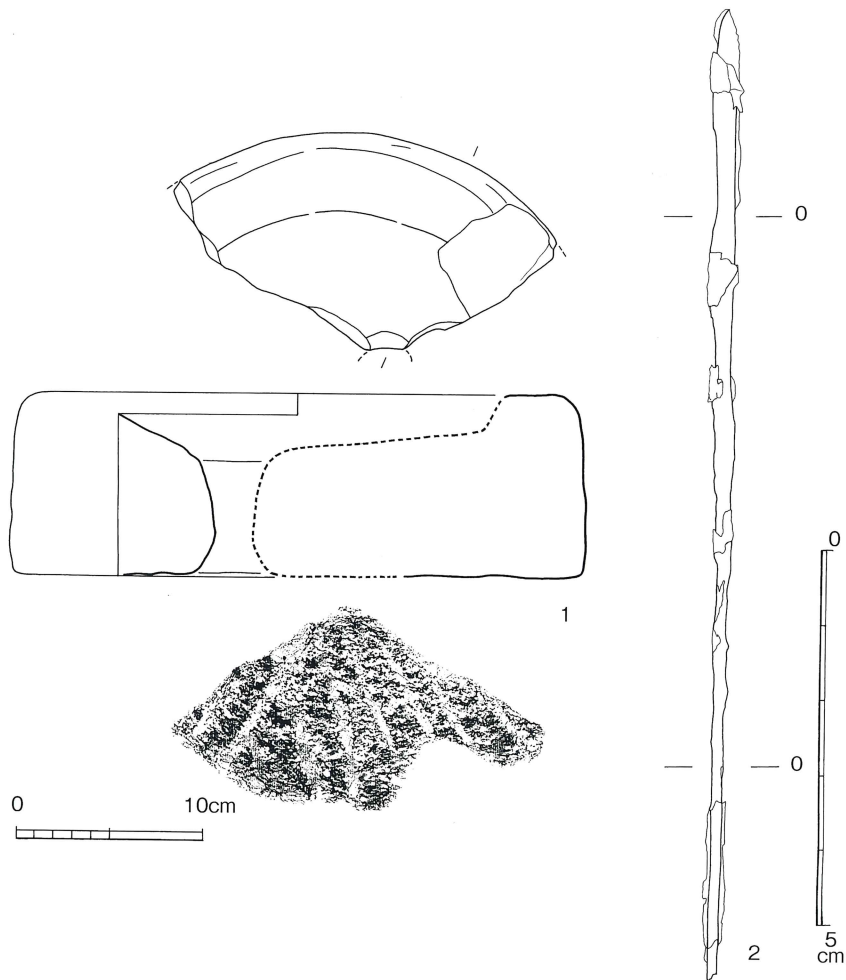
第126図 SK145実測図 (1/30)



第127図 SK146実測図 (1/30)



第128図 SK146出土遺物実測図① (1/3)



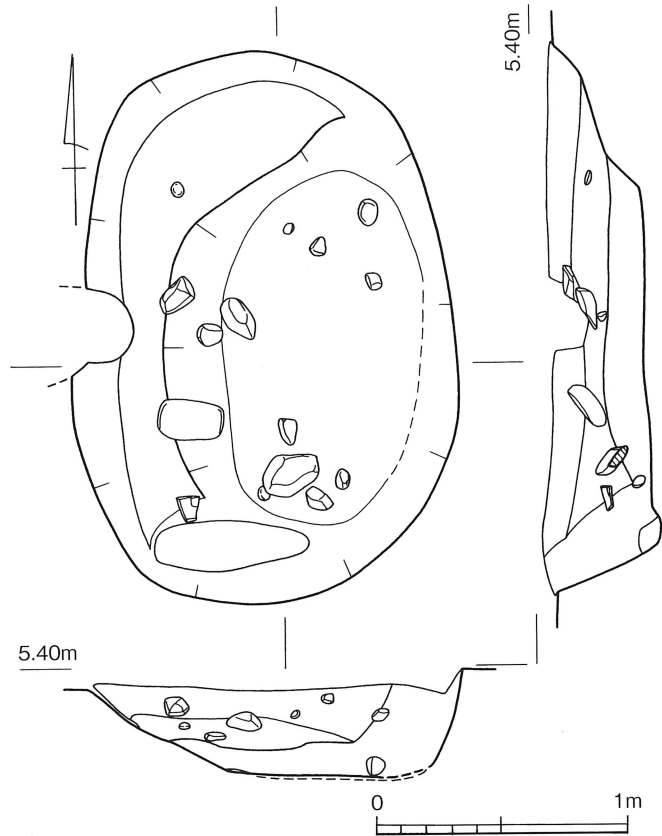
第129図 SK146出土遺物実測図② (1/4)



SK150

SK150はK-75・76で検出された土抗である。第130図として図示したが、遺構の規模は南北約2.2m、東西約1.5mで小判形をしている。遺構の内部は西側が深さ10~15cmの位置で段が付く。床面は検出面から約35cmで、南北1.4m、東西80cmの大きさである。

遺構内からは拳大の礫が出土するものの、遺物は土師質土器の小破片のみで、図化するようなものは見られなかった。時期は土師質土器に京都系土師器が含まれることから16世紀後葉と考える。

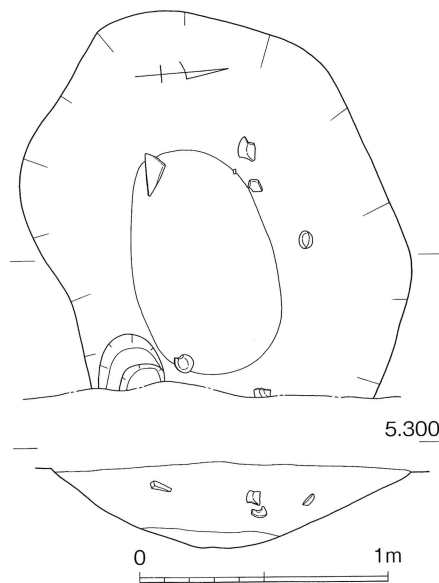


第130図 SK150実測図 (1/3)

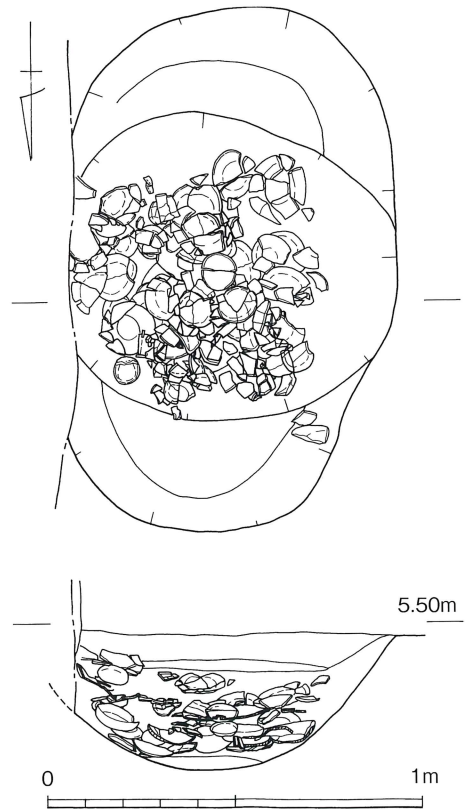
SK154

SK154はL-77で検出された土抗である。遺構の規模は、第131図に図示したように、南北1.5m、東西も1.5mあるが、東側は調査区外に延びている。遺構の深さは床面から約35cmで、南北50cm、東西90cmと細長い。このため、遺構の壁は緩く傾斜している。

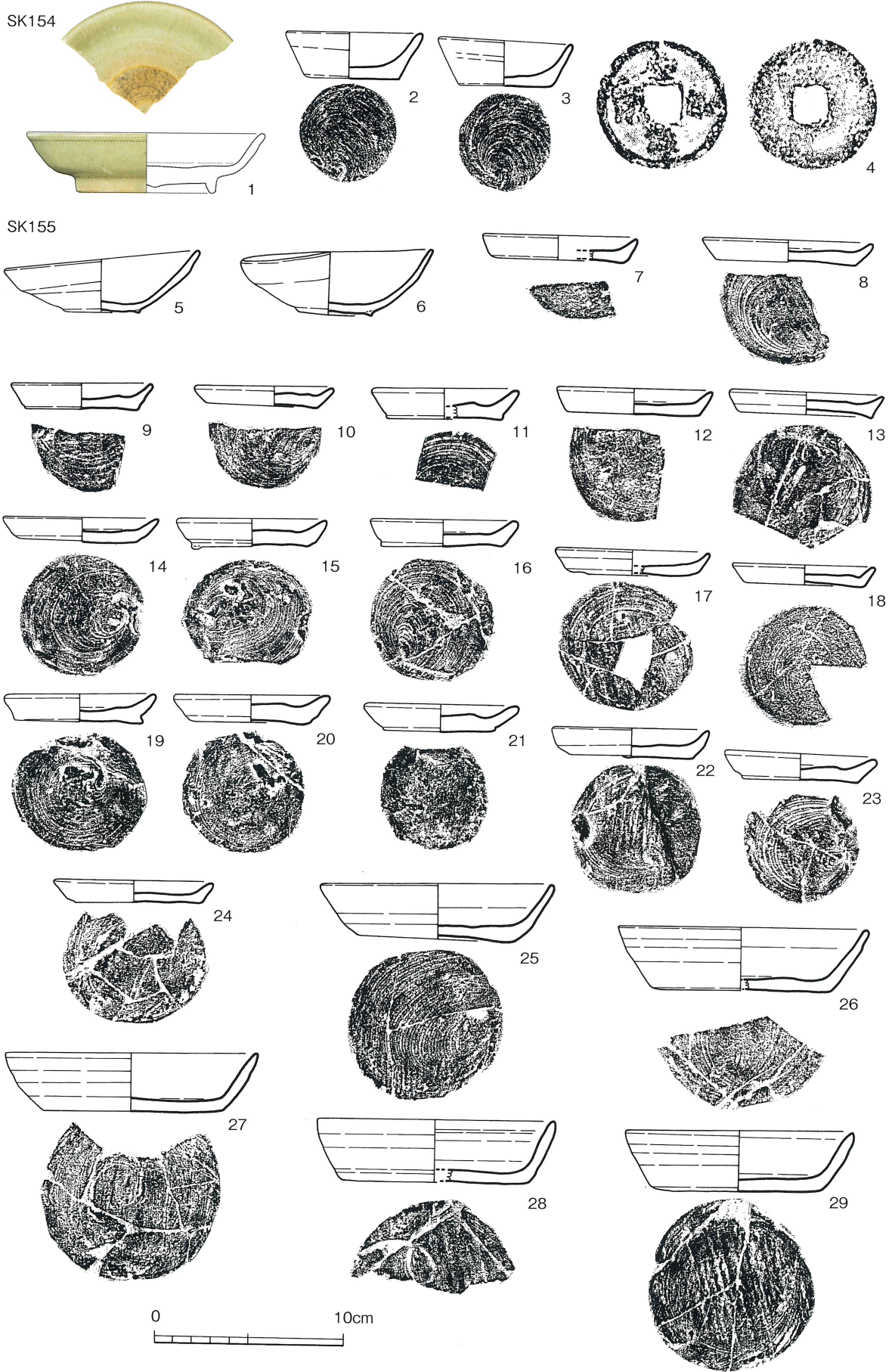
遺構内からの主要な出土遺物は第133図1~4に図示しているが、1は龍泉窯系の青磁皿で、口径12.2cm、高台径6.9cm、器高3.1cmで、見込み部は蛇の目釉剥ぎになっ



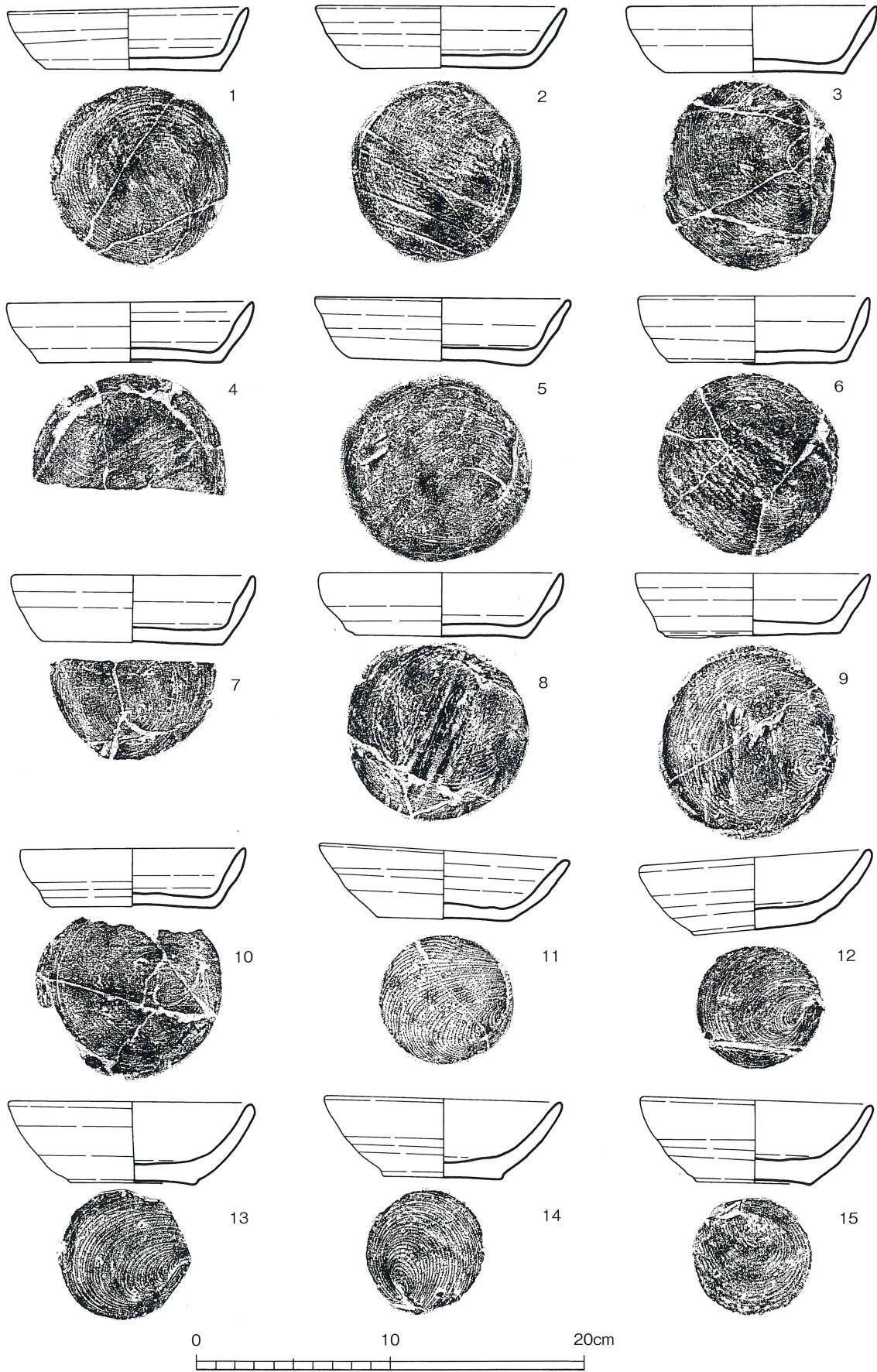
第131図 SK154実測図 (1/30)



第132図 SK155実測図 (1/20)



第133図 SK154・155出土遺物実測図 (1/3) 銅銭 (1/1)



第134図 SK155出土遺物実測図① (1/3)

ている。2・3は在地系土師質土器の小型の坏で、口径は7.2cm前後、底径は4.6cm前後、器高は2.4cmである。4は銅銭で、直径2.3cm、重さ1.8gあるが、銘は潰れており、判読できない。

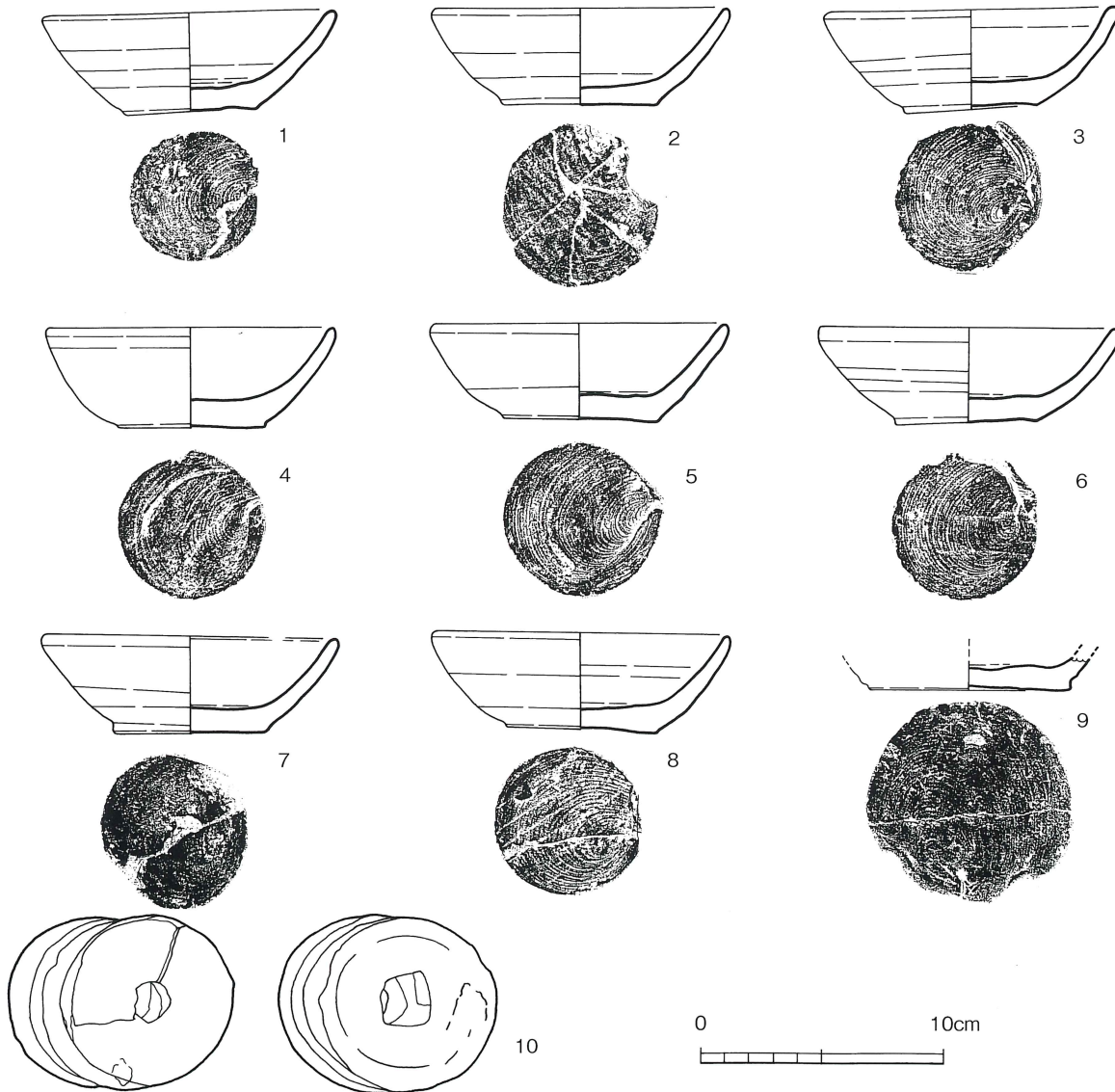
遺構の時期は、14世紀代と考える。

SK155

第132図に図示したSK155はL-77で検出された土抗で、SK154の南側に当たる。遺構の規模は、南北1.4m、東西90cmで、東側はわずかに調査区外となる。この遺構の中心部にはさらに直径約80cm、深さ35cmの掘り込みがあり、ここから多量の土師質土器が出土した。その出土状況は、目的を達した後一括廃棄された状態で、ほとんどが復元可能であった。

第133図5～25・第134・135図はそのほとんどの出土遺物を図化したものである。第133図5・6は吉備系土師器 吉備系土師器で、口径は10.2cmで退化した断面三角形で径4cmの高台が付く。器高は斜めになるため、2.5～3.5cmである。6～23は在地系土師質土器の皿で、完形品も多いが、破片も目立つ。口径は7.4～9cmまでであるが、平均すると8.1cmである。底径も6～7.3cmまでであるが、平均は6.4cm、器高の平均は1.3cmである。

第133図24～28、第134図1～10は在地系土師質土器の坏である。口径は11.7～13.3cmまでであるが、



第135図 SK155出土遺物実測図② (1/3) 銅銭 (1/1)

平均口径は12.5cmである。底径は8.3~9.8cmまでであるが、平均は9.1cmで、器高は平均3.2cmである。  
 坯の口縁部は第133図24~26のように器壁が均一なものもあるが、第134図1~10のように、中位の器壁が厚くなり、断面が紡錘形になるものが目立つ。

第134図11~15・第135図1~8は、在地系土師質土器であるが、口径の平均は12.3cm、平均底径は6.2cm、平均器高は4.0cmで、坯に比較すると底径が小さく器高が高い碗形をしている。

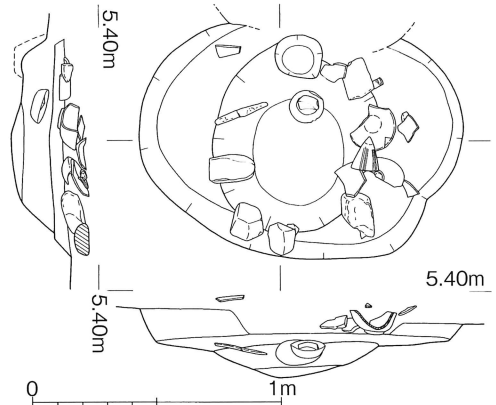
9は底径が8.2cmであり、坯の底部であろう。10は銅銭が5枚鑄で固まった資料で、さし銭状態である。

吉備系土師器

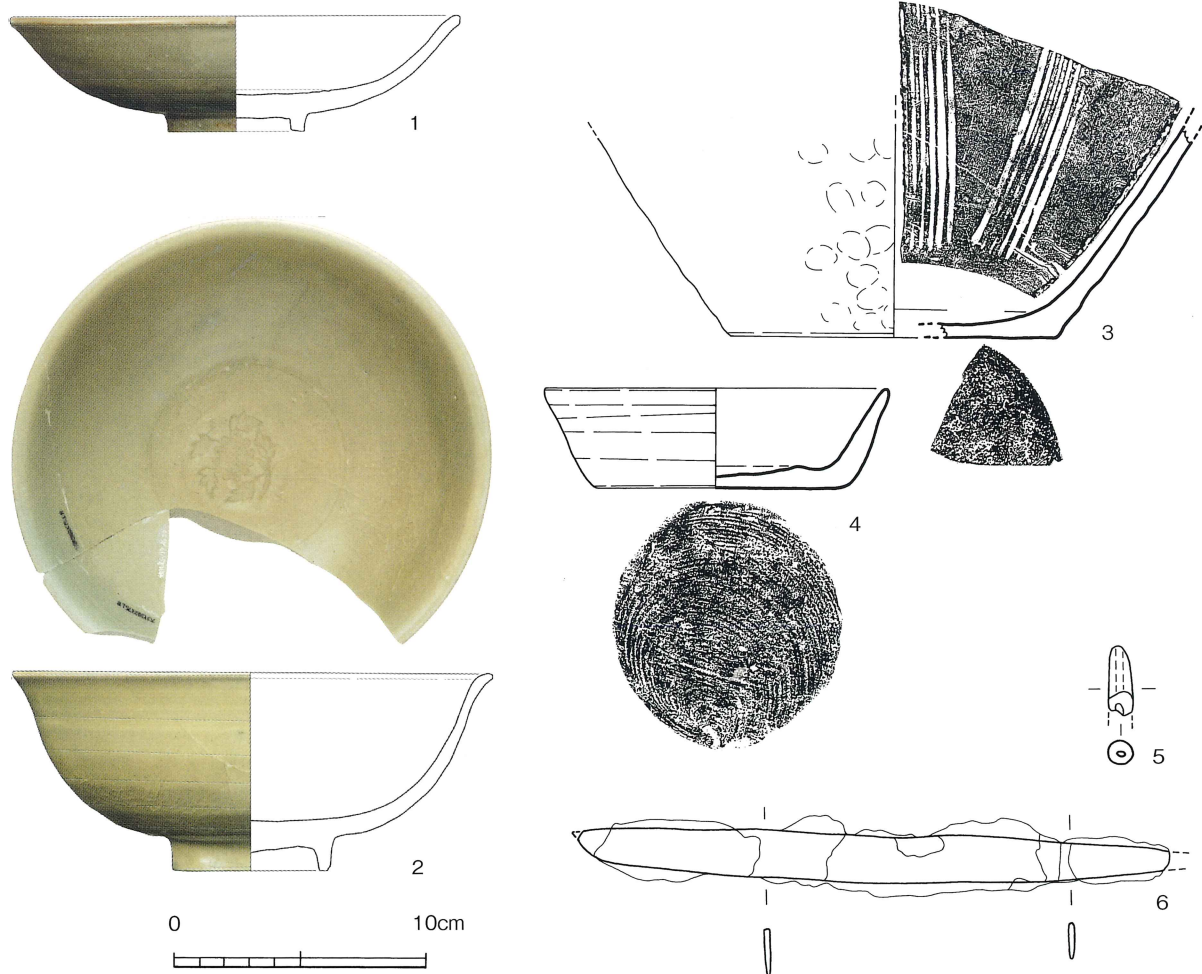
SK155の資料は、吉備系土師器の編年から14世紀初頭から前葉と考えられる良好な一括資料である。その構成を見ると、一括資料は約50点が出土しており、器種も皿・坏・碗の三種類が認められる。その比率は、皿が39%、坏が33%、碗が28%でこれに外来系の吉備系土師器が伴う。また、坯の口縁部の断面が紡錘形になるものが一定量含まれることも注目される。

皿・坏・碗

以上のような器種の組成、皿・坏・碗の法量的特徴、坯の口縁部の形態的特徴等は、この地域の土師質土器編年を考える上で、大きな手がかりになる



第136図 SK158実測図 (1/30)



第137図 SK158出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

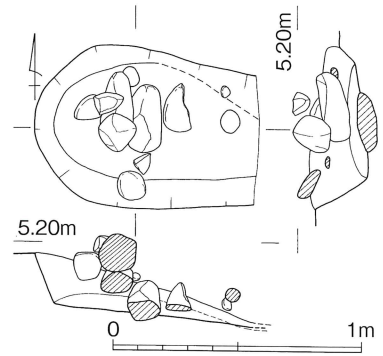
と言える。

SK158

第136図に図示したK158はL-75で検出された土抗で、遺構の規模は東西1.3m、南北90cmの楕円形で、遺構内部は二段堀になっており、中央部に直径70cmの円形の土坑があり、一段深くなっている。検出面からの深さは約30cmである。

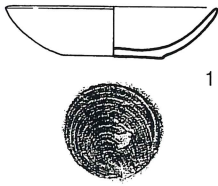
龍泉窯系

主要な出土遺物は第137図に図示しているが、1・2は龍泉窯系の青磁で、1の皿は口径17.6cm、高台径5.4cm、器高4.6cmで、見込み部は露胎となっている。2は碗で口径19cm、高台径6.1cm、見込み部は露胎となっている。

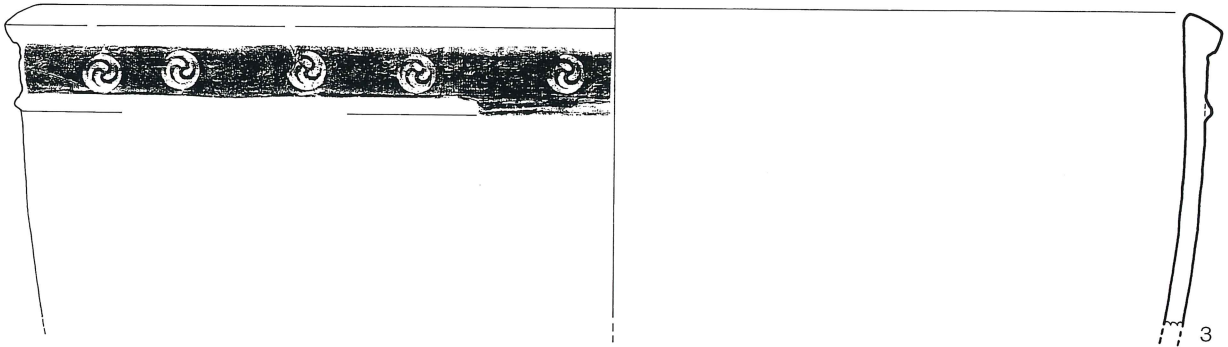
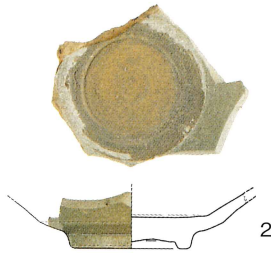


第138図 SK171実測図 (1/30)

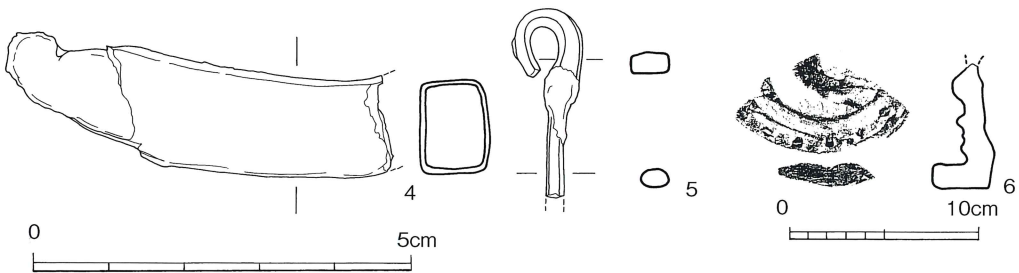
SK164



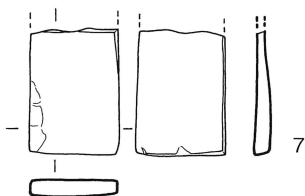
SK169



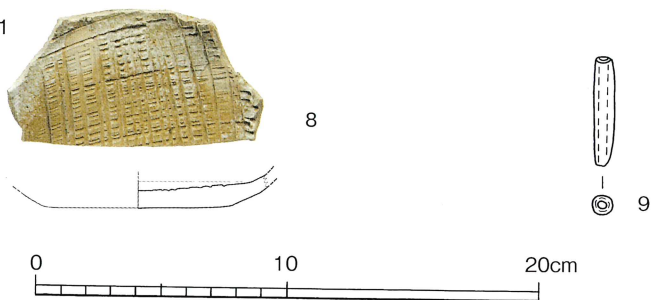
S169



SK170



SK171



第139図 SK164・169・170・171出土遺物実測図 (1/3) 4・5 (1/1) 6 (1/4)

瓦質土器 器高8cmである。3は瓦質土器の播鉢の底部で、径は12.8cmである。外面には指圧痕が残る。4は在地系の土師質土器である。口径は13.7cm、底径は10cm、器高は3.9cmで、口縁端部は外反する。5は刀子

半部を欠く土錘である。6は茎の端部を欠くが、長さ23.6cm、身幅は1.9cmの刀子である。

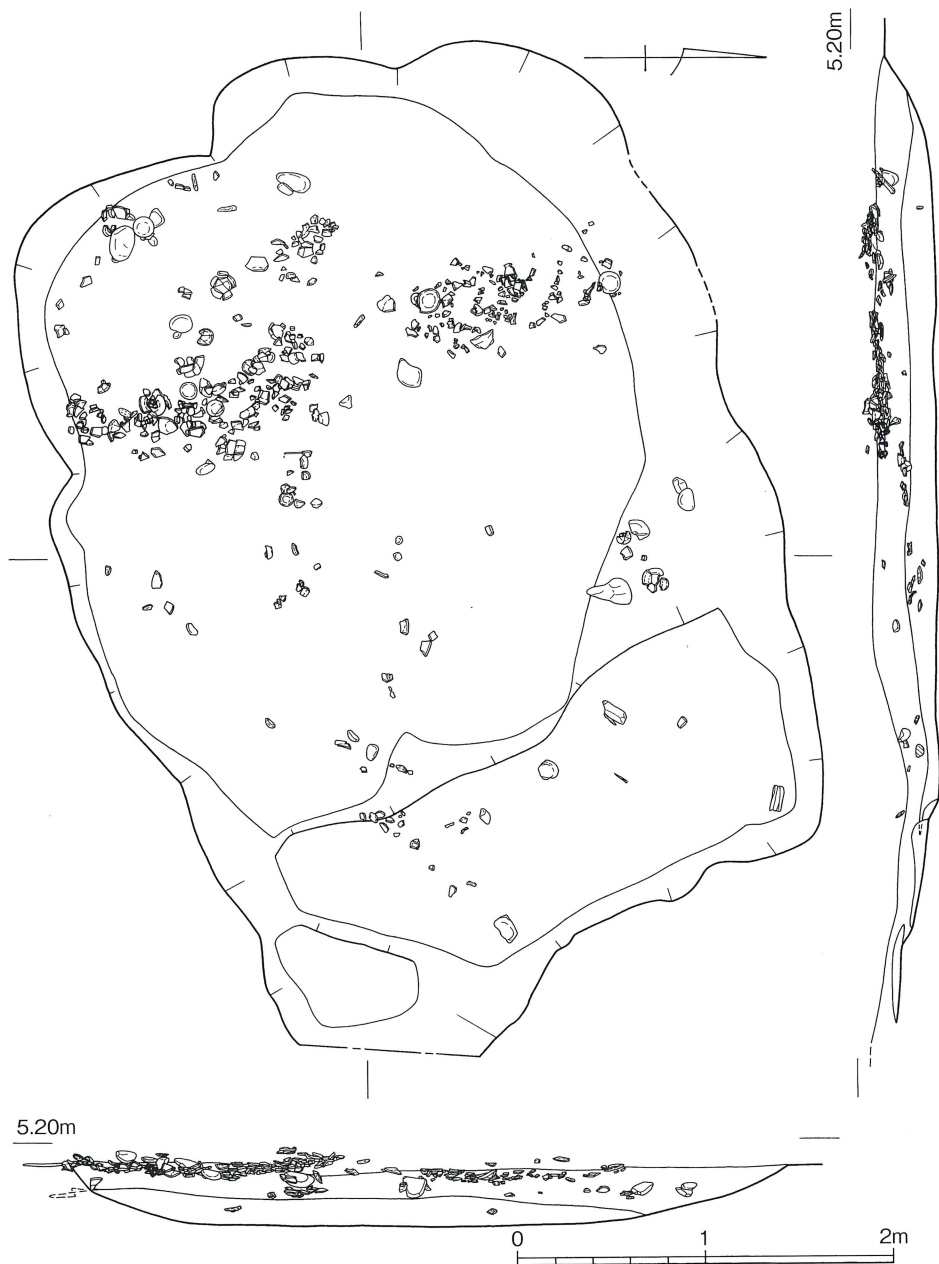
14世紀の遺構である。

**SK164**  
SK164はK-75の東北隅で検出された土抗である。規模は長軸約1.1m、短軸約80cmの楕円形をした土坑である。深さは検出面から約10cmである。出土遺物は第139図1に図示した在地系土師質土器の皿が出土している。口径は8.4cm、糸切底の底径は3.8cmで、器高は2cmである。口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されている。

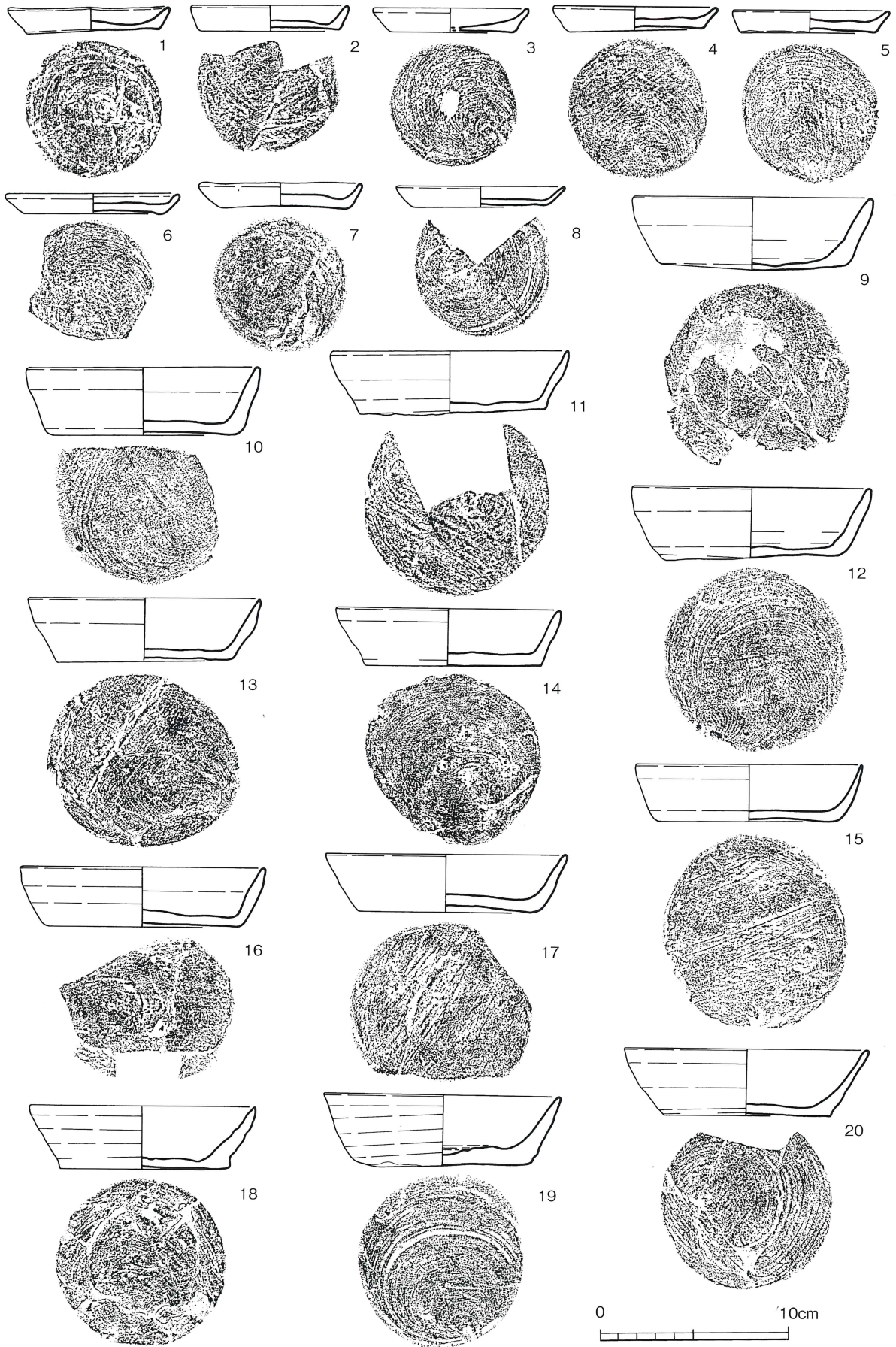
灯明皿

**SK169**

SK169はL-76の東壁沿いで検出された土抗で、西側はSK146と重なっている。このため、確認さ

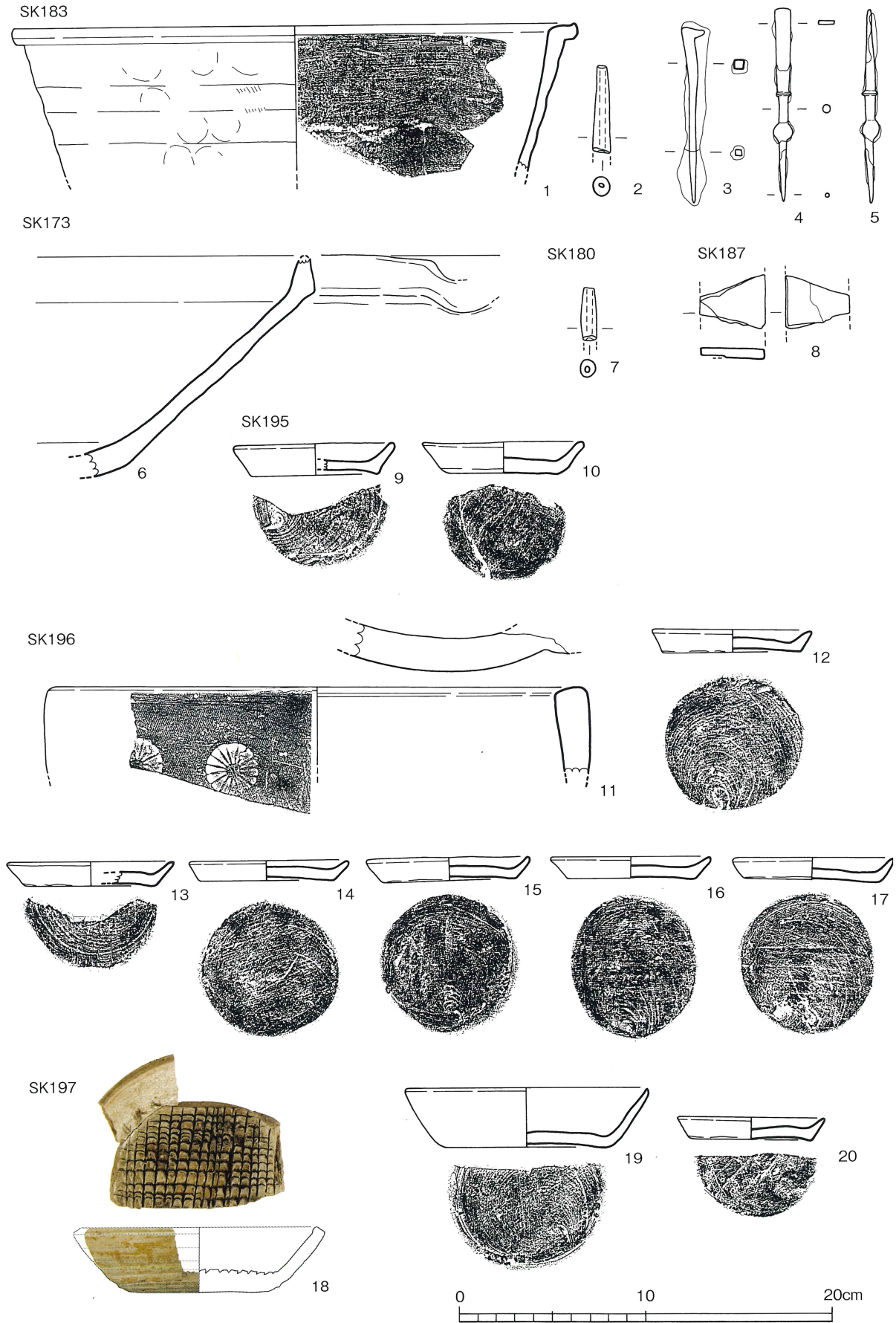


第140図 SK183実測図 (1/40)



第141図 SK183出土遺物実測図 (1/3)





第142図 SK183・173・180・187・195・196・197出土遺物実測図 (1/3)

第2節 遺構と遺物

れた遺構の規模は南北3.2mで、幅80cmである。出土遺物は第139図2～6に図示している。2は朝鮮王朝産の碗の底部である。底径は4.4cmである。3は瓦質土器の火鉢で、肥厚した口縁部外面に巴紋のスタンプが押捺されている。4・5は青銅製品で、4は中空になっている。5は断面が長方形や楕円形になり、先端が曲がる。6は巴文のある軒丸瓦である。

SK170

SK170はK-75で検出された遺構で、幅50cm、長さ1.2mの東西に細長い土坑で、西端はSK002と重なる。遺構の深さは浅く、約10cm程度であり、遺物の出土は少ない。第139図7に図示したのは出土した砥石であるが、使い込まれており、薄くなっている。

SK171

SK171はL-76で検出された遺構で、幅70cm、長さ約5mの規模で南北に細長く溝状に延びる遺構である。遺物としては第139図8に図示した瀬戸美濃のおろし皿と9の土錘が出土している。8は底径7.5cmの糸切底で、おろし面はヘラ状工具で格子状に刻まれている。2の土錘は長さ4.6cmで、重さは2.6gである。

SK173

SK173はL-76で検出された遺構で、SK169に掘り込まれている。遺構の規模は、南北約60cmで、東西は90cmを確認したが、調査区の東側に延びている。遺構内からは人頭大の礫が出土している。遺物は第142図6に図示した、東播系の須恵質土器の片口の鉢が出土している。

SK180

SK180はL-77で検出された遺構で、南北1.3m、東西80cmの小土坑である。深さも10cmに満たず、出土した遺物も少ない。第142図7に図示したのは半分欠けた土錘である。

SK183

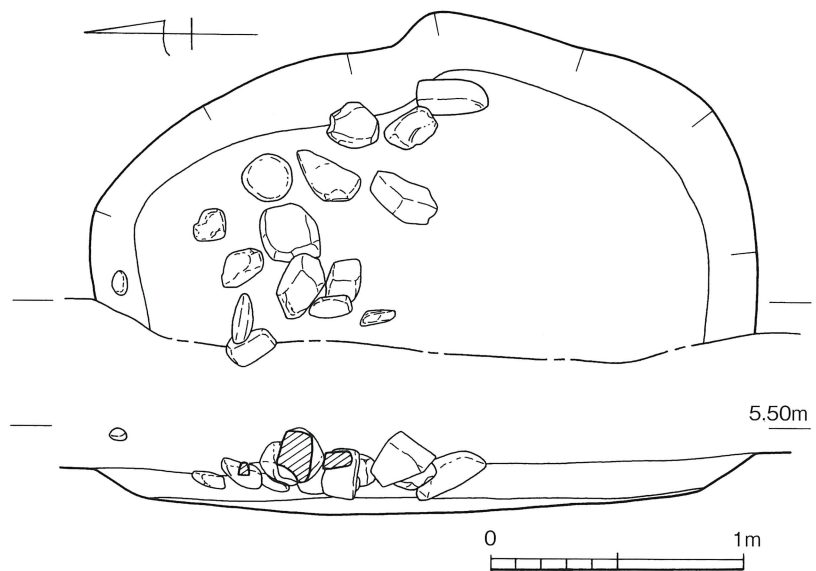
SK183はL-75から76にかけて検出された遺構である。第140図に図示したが、東西5m、南北3.5mの不整形な方形をしており、深さは最深部で約20cmである。出土した遺物は在地系土師質土器が中心で、第141図・第142図1～5に図示した。

第141図は在地系土師質土器で、1～8は皿であるが、法量の平均は口径が8.6cm、底径は7cm、器高は1.2cmである。9～20は坏で、法量の平均は、口径が12.5cm、底径が9.4cm、器高は3.4cmである。全体的にSK155よりわずかに大型化しており、口縁部が紡錘形になるものが少なく、碗形が含まれない。第142図1は口縁部が外反する土鍋である。口径は30cmで、外面に粘土積みと指圧痕が残る。2は半分欠けた土錘である。3は長さ9.3cmの鉄釘で、4・5は同じ遺物の鉄鏃で、5は側面図である。

SK183の時期は、14世紀中葉と考える。

SK184

SK184はL-75で検出された遺構である。規模は第143図のよう



第143図 SK184実測図 (1/30)

に南北2.7m、東西1.3mであるが、西側を他の遺構で削られている。検出面からの深さは、最深部が20cmで、床面は平坦である。遺構内からは北側を中心に拳大から人頭大の礫が出土している。遺物は、第161図4の銅銭が出土しているが、銘は鏝のため判読不能である。

銅銭

SK187

SK187はL-78で検出された遺構である。遺構の規模は、長軸が90cm、短軸が50cmの楕円形をした小土坑で、深さも10cm程度である。このため、出土遺物も少なく、目立つものは第142図8に図示した砥石が出土したのみである。

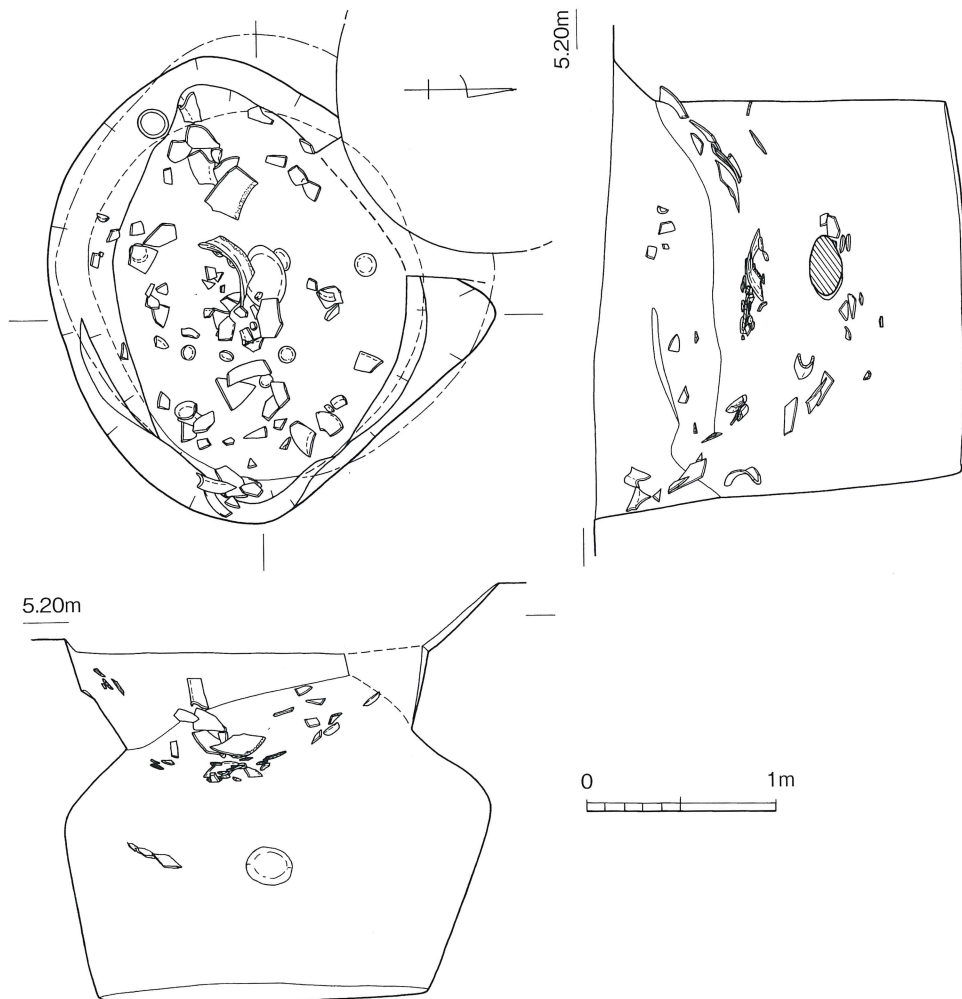
SK193

第144図に図示したSK193はK-77で検出された遺構である。遺構の規模は、上面が南北2m、東西2.3mの楕円形をしているが、深さ約2mで達する平坦な床面は南北1.8m、東西2mである。南北の壁はオーバーハングし、断面はフラスコ型になる。遺構内からは第144図のように流れ込んだ状態で第145・146図に図示した遺物が出土した。

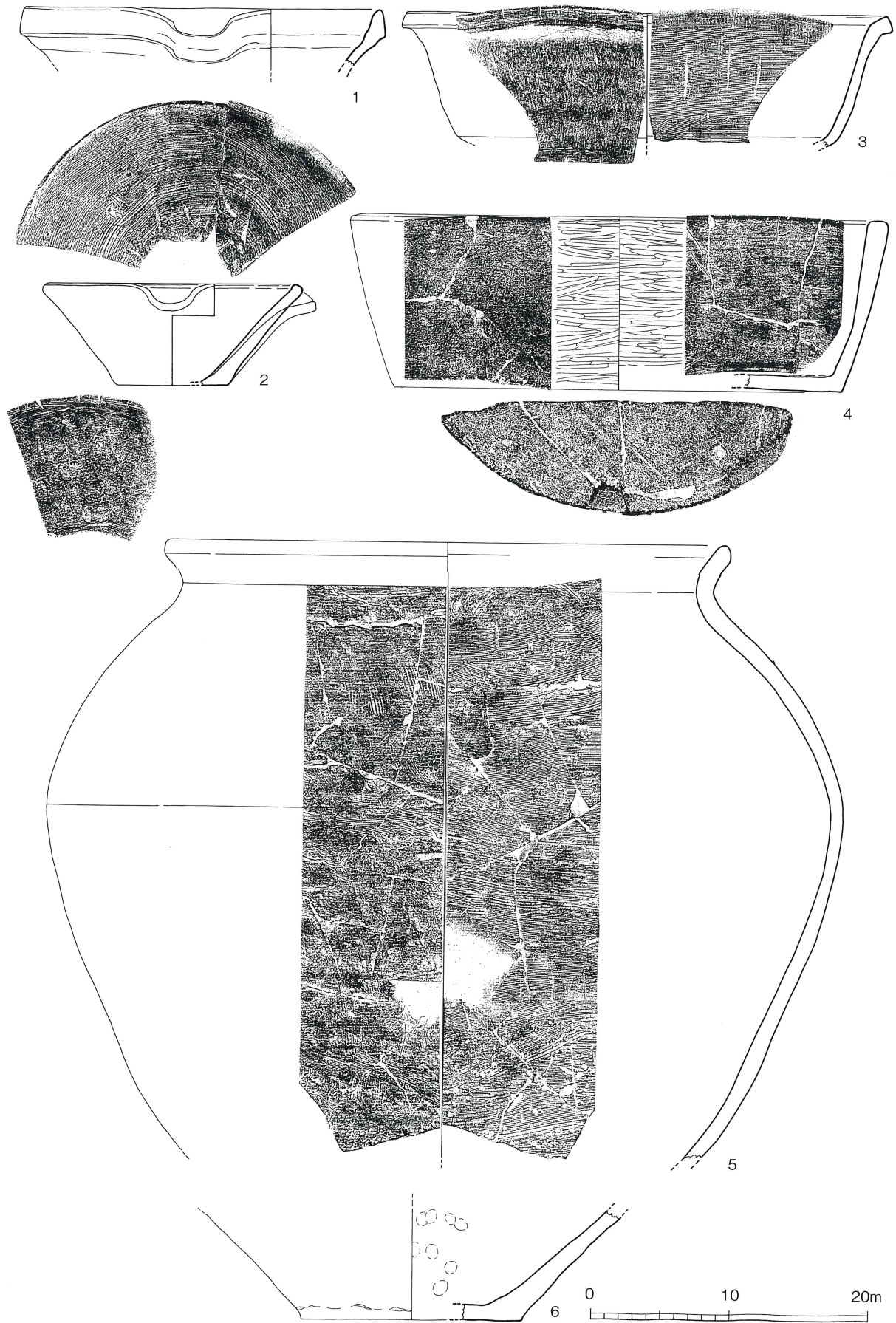
第145・146図1は東播系の須恵質土器の片口鉢で、口径は25.7cmでSX207出土の破片と接合する。2は灰色をした瓦質土器の片口の鉢で、口径18.6cm、底径7.8cm、器高7.3cmである。内面は横方向の刷毛目で調整している。3は口径34.2cmの土鍋で、焼成良好で瓦質である。4は内外面飽磨きされた瓦質土器の鉢である。口径は36.6cm、底径32cm、器高12.3cmである。5・6は同一個体と推測される瓦質土器の大甕で、口径は40.2cm、胴部最大径は57.4cmで、胴部内面は横方向の刷毛目、外面は縦方

土鍋

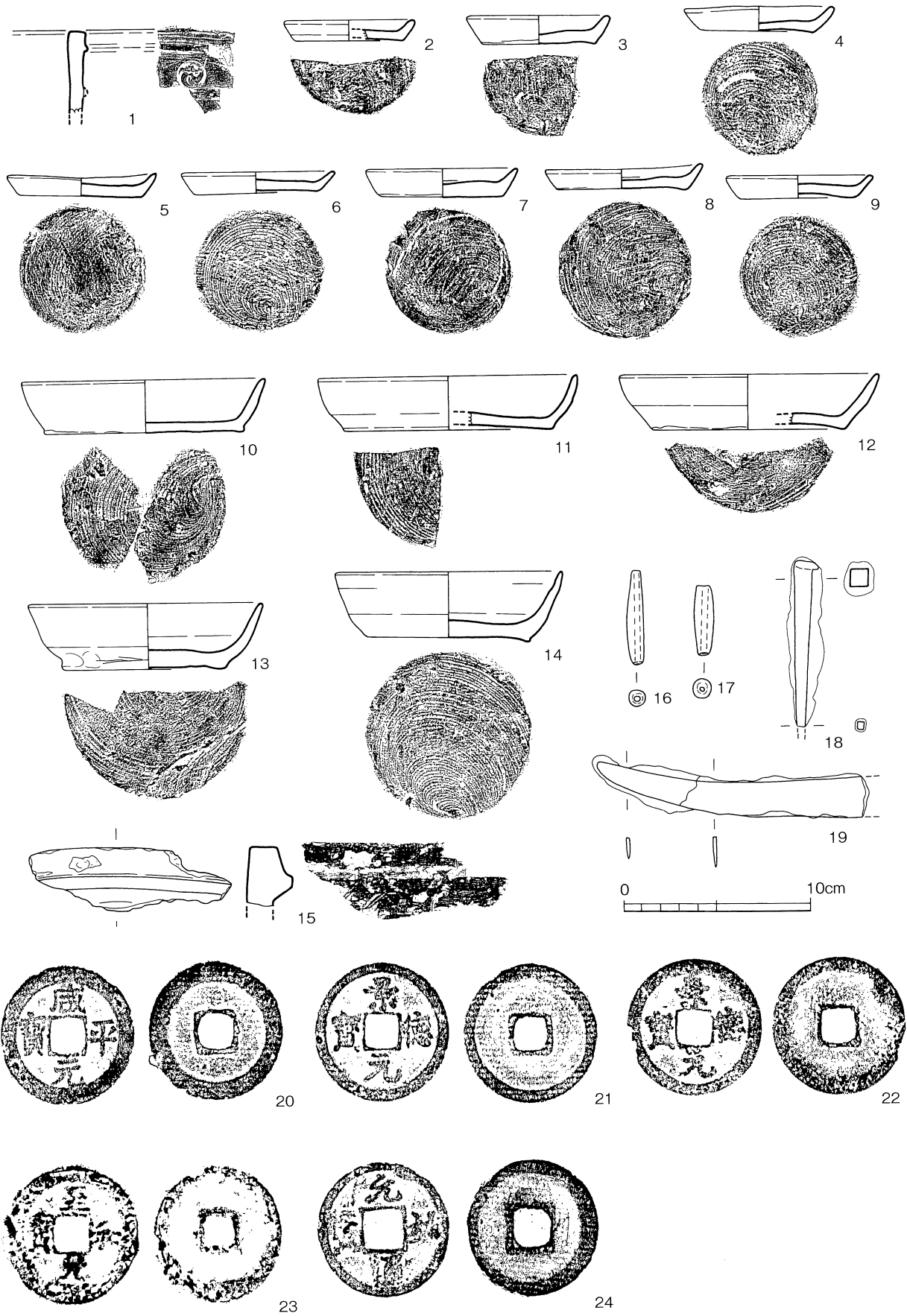
瓦質土器



第144図 SK193実測図 (1/40)



第145図 SK193出土遺物実測図① (1/4)



第146図 SK193出土遺物実測図② (1/3) 銅銭 (1/1)

第2節 遺構と遺物

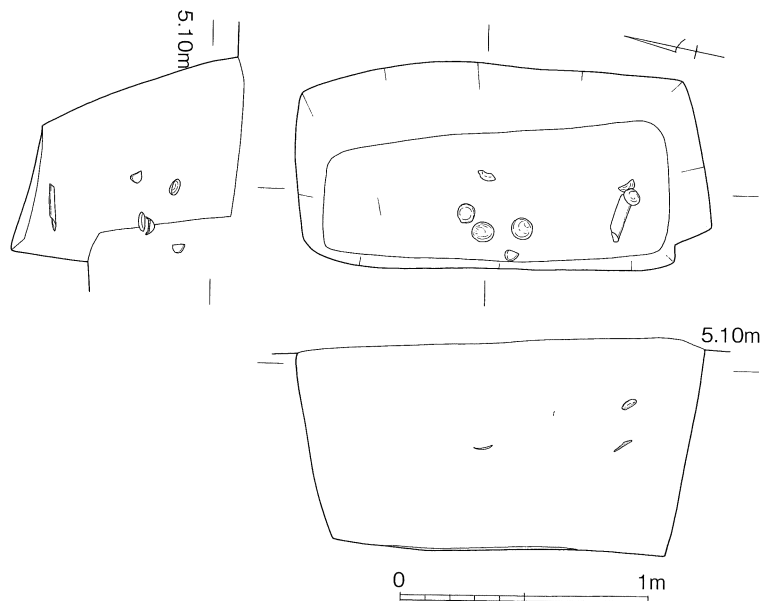
向の刷毛目の後、撫で仕上げである。底径は16.6cmで内面には指圧痕が残る。器高は55cmが想定される。

第146図1は口縁部外面に巴文のスタンプのある瓦質土器の火鉢である。2～14が在地系土師質土器で、2～9は皿である。平均法量は、口径7.9cm、底径6.4cm、器高1.2cmである。10～14は坏である。平均法量は、口径13cm、底径9.9cm、器高3.1cmである。15は鏝が付く滑石製の石鍋である。16・17は土錘で、16は5cm

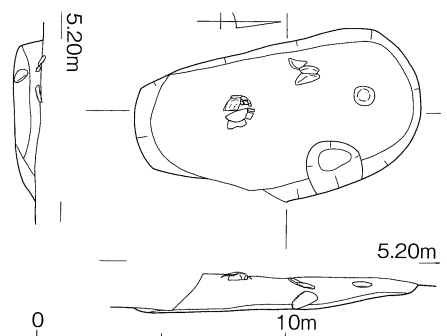
で4.1g、17は3.7cmで5gである。18は鉄釘で、先端を欠くが長さ8.6cmである。19は茎部を欠く刀子で、身幅は2cmである。

銅銭 20～24は銅銭で、20の「咸平元寶」は998年初鑄の北宋銭である。21・22の「景德元寶」は1004年初鑄の北宋銭である。23の「至和元寶」は1054年初鑄の北宋銭である。24は「元祐通寶」は1086年初鑄の北宋銭である。

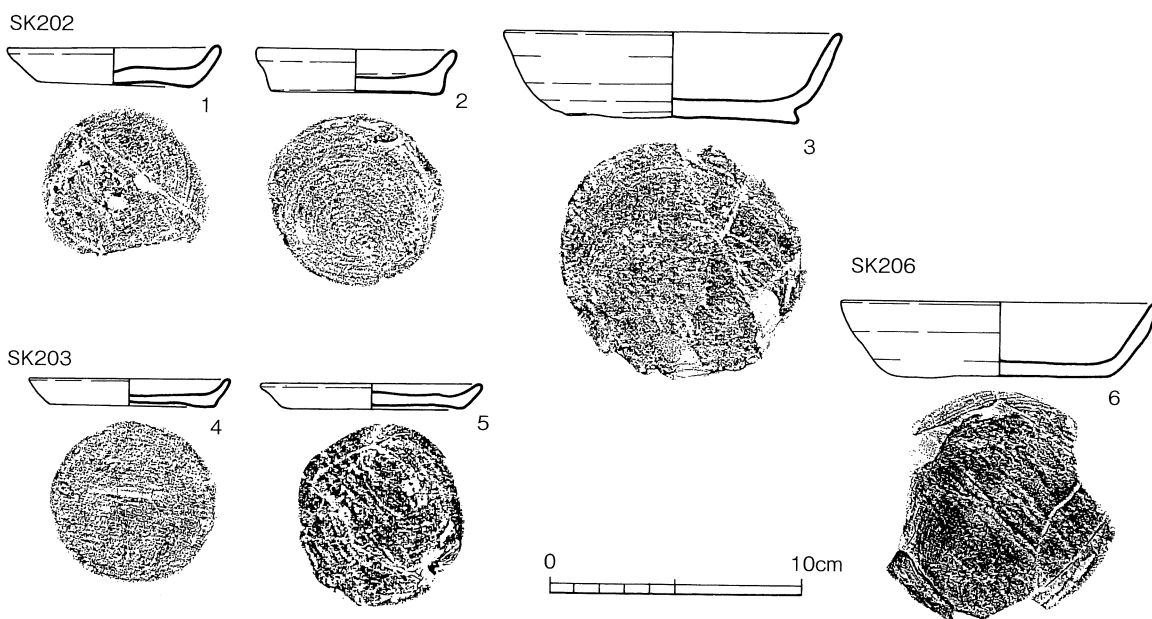
SK193の時期は、在地系土師質土器の形態から14世紀中葉と考える。



第147図 SK196実測図 (1/30)



第148図 SK202実測図 (1/30)



第149図 SK202・203・206出土遺物実測図 (1/3)

SK195

SK193はK-76で、SD156に掘り込まれて検出された遺構である。確認された規模は長軸約70cm、短軸約40cmであるが、切り合いのため不明確である。遺構内からは第142図9・10に図示した遺物が出土している。9は口径8.1cm、底径6.9cm、10は口径8.7cm、底径5.9cmで、2点とも器高1.6cmである。時期は14世紀代である。

SK196

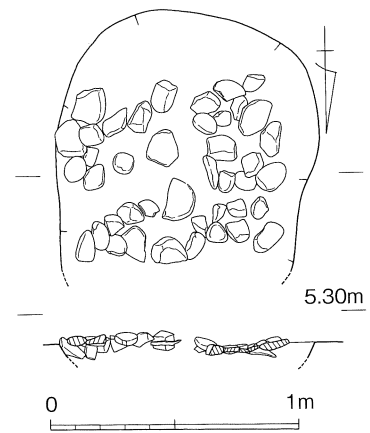
SK196はK-76で検出された遺構である。第147図に図示した遺構の規模は南北約1.7m、東西80cmの長方形で、深さは約80cmである。出土した遺物は第142図11~17に図示した。11は外面に菊花文のスタンプがある瓦質土器の奈良火鉢である。12~17は在地系土師質土器の皿で、平均法量は口径8.7cm、底径7.2cm、器高1.1cmである。土坑墓とも考えられる14世紀代の遺構である。

SK197

SK197はK-76で検出された遺構で、規模は長軸約1m、短軸約70cmで、深さは約20cmである。出土遺物は第142図18~20に図示した。18は口径12.9cm、底径7.4cm、器高3.5cmの瀬戸美濃産のおろし皿である。19・20は在地系土師質土器で、19の坏は口径13.1cm、底径9.1cm、器高3.1cmで、20の皿は、口径7.9cm、底径6.6cm、器高1.1cmである。14世紀後半と考える。

SK202

SK202はK-78で検出された遺構で、第148図に図示した。遺構の規模は、南北約1.2m、東西70cmの小判形をしており、深さは最大13cmである。遺構内からは、第142図1~3に図示した在地系土師質土器が出土した。1・2は皿で、1は口径8.5cm、底径6.2cmで、2は口径8cm、底径6.9cmで、2点とも器高は1.5cmである。3は坏で、口径13.4cm、底径9.2cm、器高3.4cmである。



第150図 SK204実測図 (1/30)

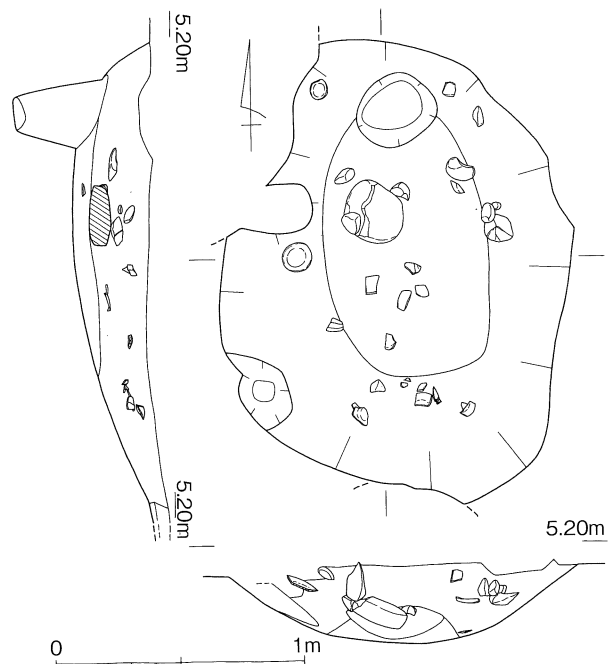
遺構の形態や、遺物の出土状況から、14世紀代の土坑墓の可能性が高い。

SK203

SK203はL-75・76で検出された遺構である。16世紀後葉のSK150と西側が重なるため、遺構の全体は不明である。主要な出土遺物は第149図4・5に図示した14世紀代の在地系土師質土器の皿がある。4は口径8cm、底径6.7cm、器高1.1cmで、5は口径8.8cm、底径7.2cm、器高1cmである。

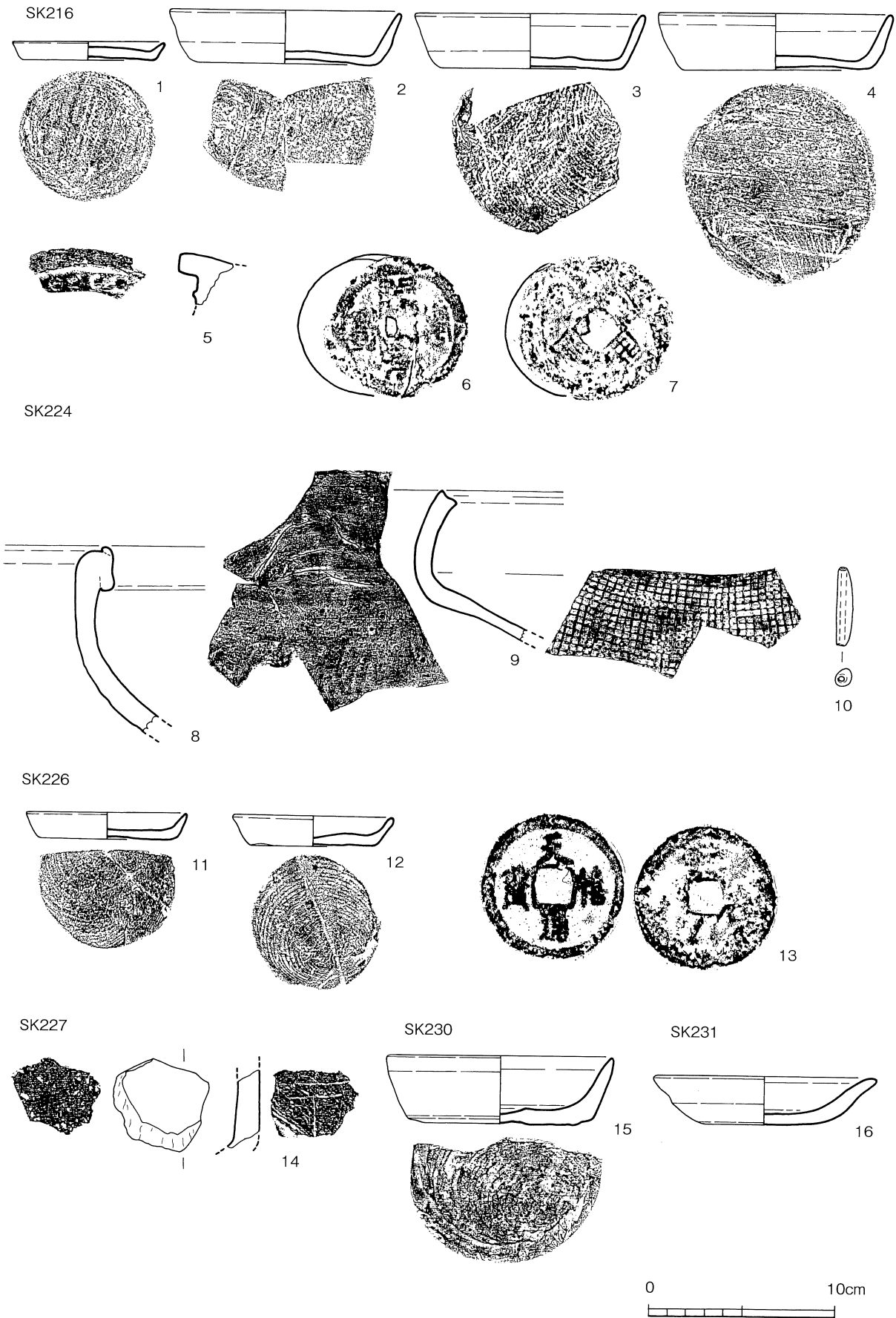
SK204

SK204はL-75・76で検出された遺構である。遺構は第150図に図示したが、規模は、東西約1m、南北1m以上あり、上面で敷き詰められたように、拳大の礫が出土した。遺物はほとんどせず、在地系土師質土器の小片が見られる。



第151図 SK216実測図 (1/30)

第2節 遺構と遺物



第152図 SK216・224・226・227・230・231出土遺物実測図 (1/3) 銅銭 (1/1)



SK206

SK206はL-75で検出された遺構で、南側はSK205に切られる。このため、遺構の規模は東西約50cmであるが、南北は50cm以上が想定できる。遺構内からは第149図6に図示した口径12.5cm、底径8.8cm、器高2.9cmを測る14世紀代の在り系土師質土器の坏が出土している。

SK216

軒丸瓦

第151図に図示したSK216はK・L-75で検出された遺構である。遺構の規模は南北1.8m、東西1.4mで、皿状に窪み、深さは約30cmである。遺構内からは第152図1~7の遺物が出土している。1~4は在り系土師質土器であるが、1は口径8.2cm、底径7cm、器高1cmの皿である。2~4は坏であるが、法量の平均は口径12.5cm、底径8.9cm、器高2.9cmである。5は軒丸瓦で珠文がある。6・7は鏝で付着した銅銭で、6は北宋の1068年初鑄の「熙寧元寶」であるが、7は判読不能である。

14世紀代の遺構である。

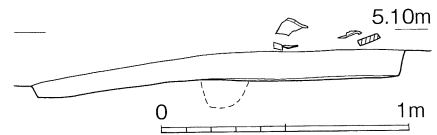
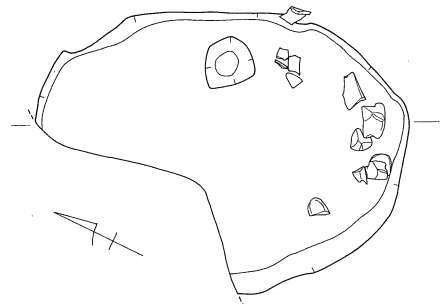
SK220

常滑焼

金貼り  
銅銭

第154図に図示したSK220はK-75で検出された遺構である。確認された遺構の規模は、SK002の下面で確認されたため、深さは約10cmと浅く、南北1.4mであるが、東西は不明である。出土遺物は、第155図に図示したが、1は瓦質土器の甕である。2~4は常滑焼の甕の口縁部から胴部の資料で、同一個体である。3の肩部には叩き痕があり、内面には指圧痕が残る。5は中空部を持つ青銅製品で、金貼りしている。6の銅銭は篆書体の「天聖元寶」で北宋の1023年初鑄である。

検出位置や常滑焼の甕から14世紀代の遺構と考える。



第153図 SK224実測図 (1/30)

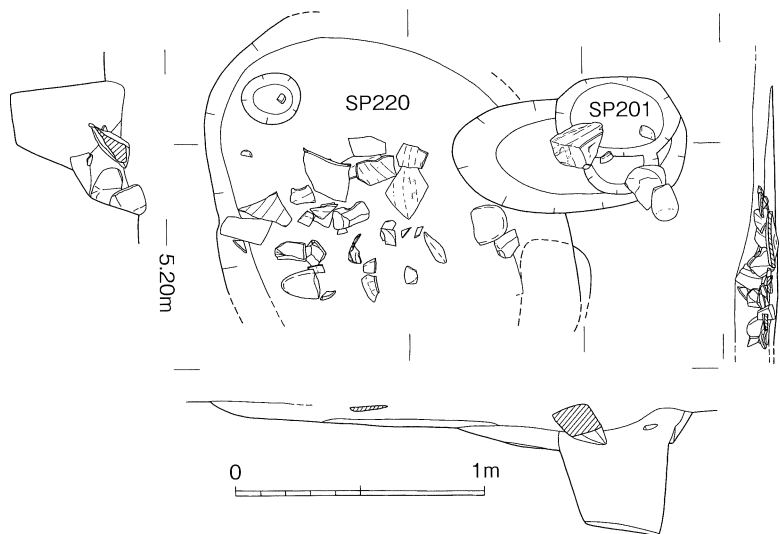
SK224

亀山窯系  
格子目叩き

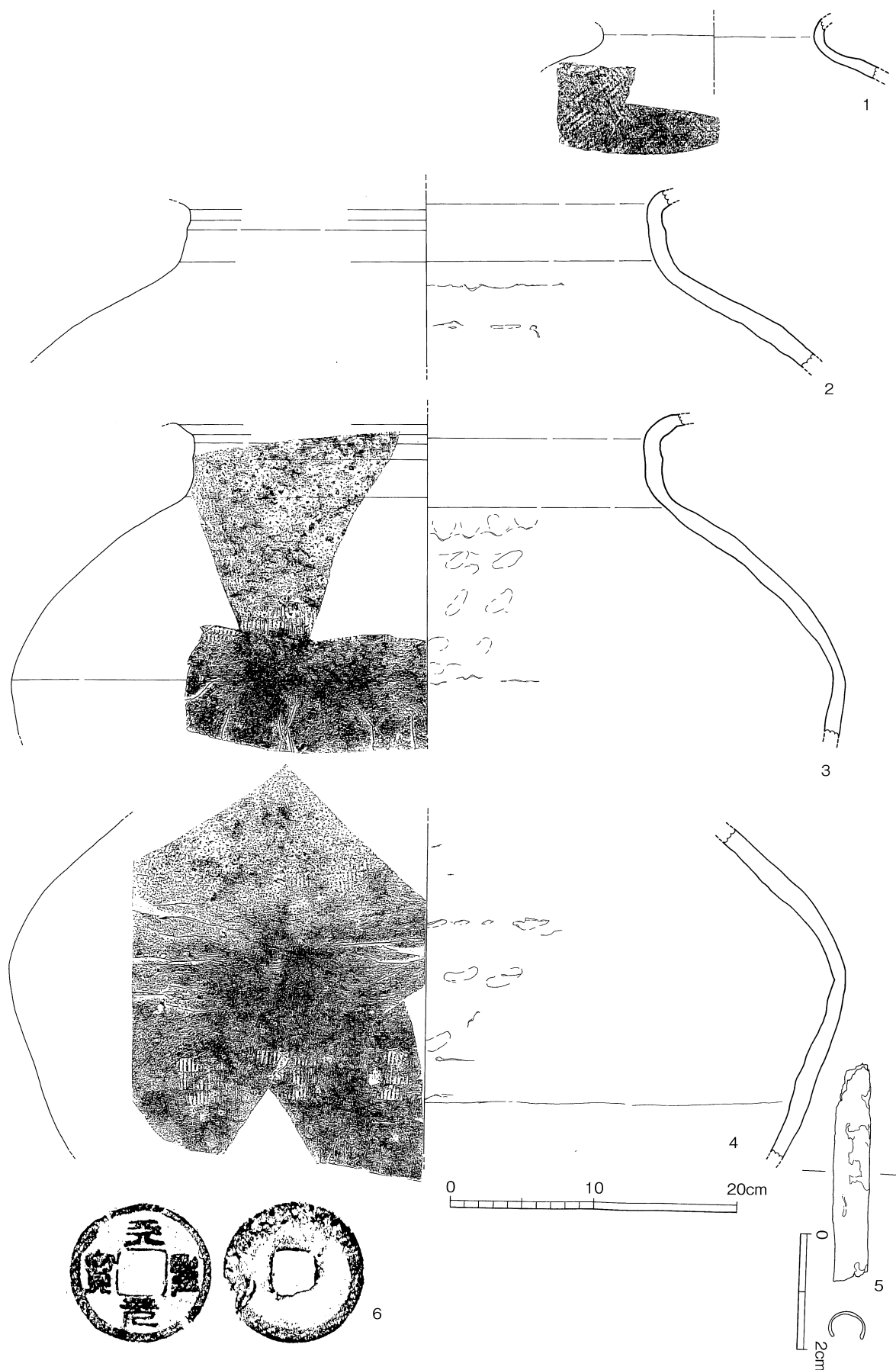
SK224はK-75で検出された遺構で、第153図に図示した。遺構の規模は、南北1.5m、東西1.1mで、深さは約10cmである。床面は北に傾斜する。遺構内からは出土した第152図8~10の8は常滑焼の甕で、外面には自然釉がかかる。SK220出土の常滑焼の口縁部の可能性が強い。9は亀山窯系の須恵質土器の甕である。外面に格子目叩きが観察できる。10は長さ4.2g、重さ4.1gの土錘である。14世紀代の遺構である。

SK226

SK226はK-75のSK002の下面で検出された遺構である。第152図11~13が出土遺物であるが、11・12は在り系土師質土器の皿で、11は口径8.6cm、底径7.2cm、器高1.4cmで、12は



第154図 SK220・SP221実測図 (1/30)



第155図 SK220出土遺物実測図 (1/4) 銅銭・銅製品 (1/1)

口径8.7cm、底径6.8cm、器高1.6cmである。13は北宋1017年初鑄の「天禧通寶」である。

SK227

SK227もK-75のSK002の下面で検出された遺構である。規模は直径約70cmの円形に近いが、不明瞭である。出土遺物は第152図14の滑石製の石鍋がある。

SK230

SK230はK-76でSD156と切り合い検出された遺構である。規模は東西1.3mであるが、南北は不明である。遺物は第152図15の口径12.2cm、底径10cm、器高3.6cmの在地系土師質土器の坏が出土している。

SK231

第156図に図示したSK231はK-76でSK230の南で検出された遺構で、小さく浅いが規模不明である。出土遺物は第152図16の口径12.2cm、器高2.6cmの京都系土師器が出土しており、16世紀後葉と考える。

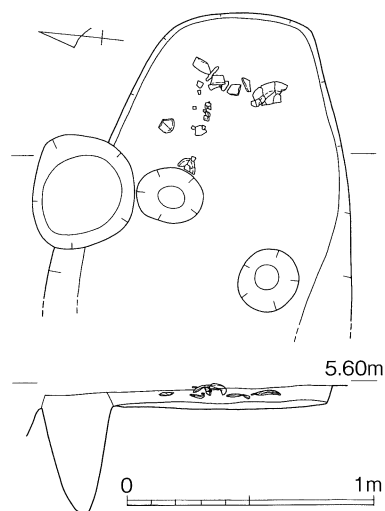
SK233

SK233はL-75で検出された遺構で2基以上が重なっている。遺構の規模は半分近くが調査区外に延びるため、不明であるが、深さは最深部で50cmある。出土遺物は第158図1~7に図示したが、1~3は在地系土師質土器で、1の皿は口径8.6cm、底径7.3cm、器高1.4cmである。2・3は坏で、2は口径13.2cm、底径10.2cm、器高2.7cm、3は口径12.8cm、底径10cm、器高2.8cmである。1・2の底には、回転糸切りの後板状圧痕が付いている。

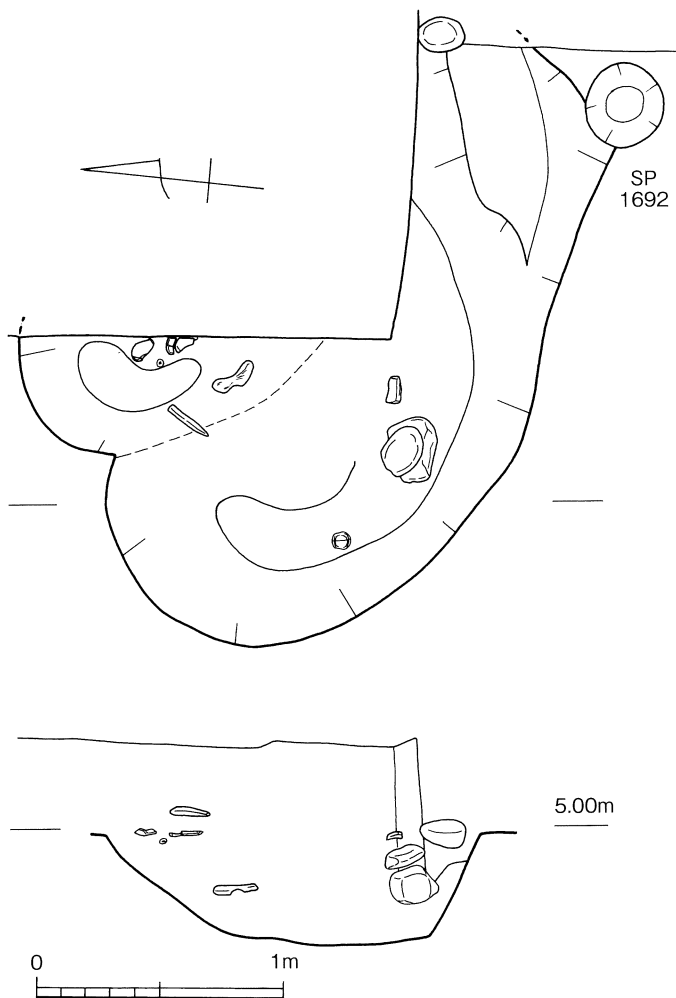
4は鉄釘で、断面は長方形である。  
5も断面が長方形で、長さは17.3cm以上あり、鑿状である。

6・7は北宋銭で、6は995年初鑄の「至道元寶」で直径2.4cm、重さ3.2gある。7は1054初鑄の「至和通寶」で直径2.4cm、重さ2.5gである。

口縁部の断面が紡錘形になり、SK155の遺物と類似することから



第157図 SK234実測図 (1/30)

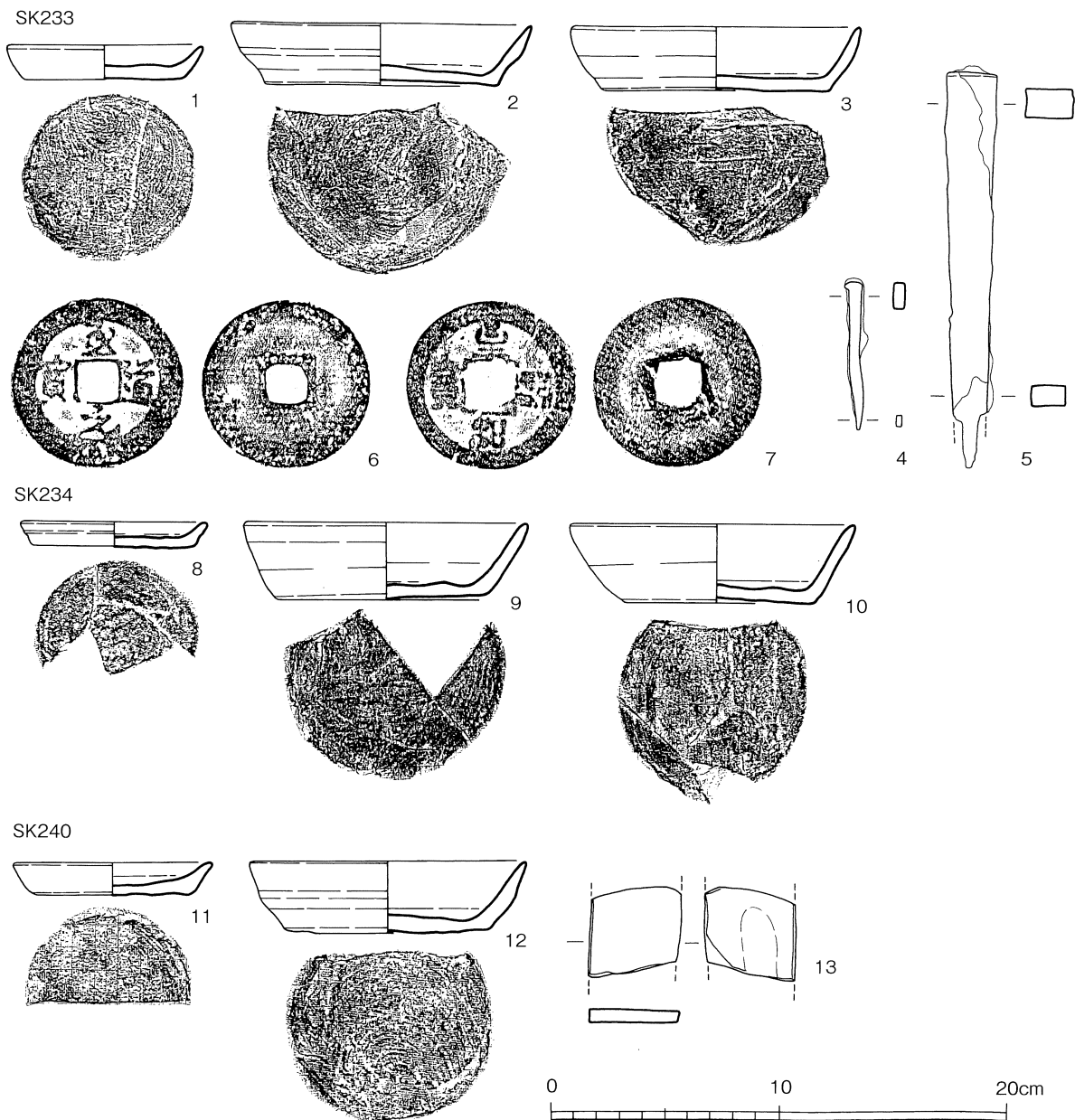


第156図 SK233実測図 (1/30)

遺構と考える。

SK234

SK234はK-75で検出された遺構で、第157図に図示したが、西側半分は他の遺構に削られ不明である。遺構内からは第158図8~10に図示した在地系土師質土器が3点出土している。いずれも復元品であるが、8の皿は口径8.5cm、底径7.1cm、器高1.1cmで、胎土に砂粒が少ない。9・10は坏であるが、9は口径12.5cm、底径9.5cm、器高3.3cmで、10は口径12.5cm、底径8.5cm、器高3.5cmである。以上の3点には回転糸切りの後に板状圧痕が残る。SK233よりも器高が高く、口縁部断面はSK233のように中位が厚くならず、底部からほぼ均一の器壁の厚さで延びる。14世紀中葉と考える。



第158図 SK233・234・240出土遺物実測図 (1/3) 銅銭 (1/1)

SK240

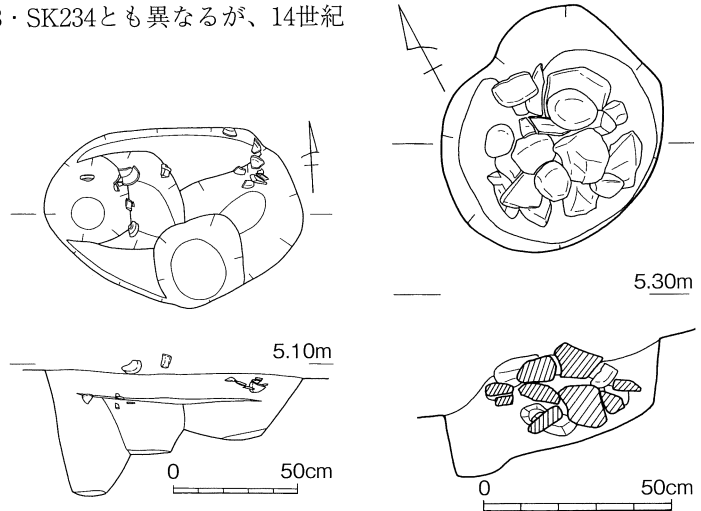
SK240はK・L-76で検出された遺構で、SK207の北側にわずかに残されていた。遺構の規模はSD156とも重なるため不明瞭であるが、第158図11~13に図示した遺物が出土している。

11・12は在地系土師質土器であるが、11の皿は口径8.8cm、底径7.3cm、器高1.4cmで、糸切りの底部には板状圧痕が残る。12の坏は口径12.2cm、底径9cm、器高3.1cmで、口縁部は底部近くの器壁が厚く、口縁端部に向けて尖るように延びる。器面の内外面の一部には煤が付着しており、灯明皿として使用されている。13は長さが不明であるが、幅3.8cm、厚さは0.6cmの仕上げ砥石で、両面が使われている。

出土した杯の口縁部形態はSK233・SK234とも異なるが、14世紀中葉と考える。

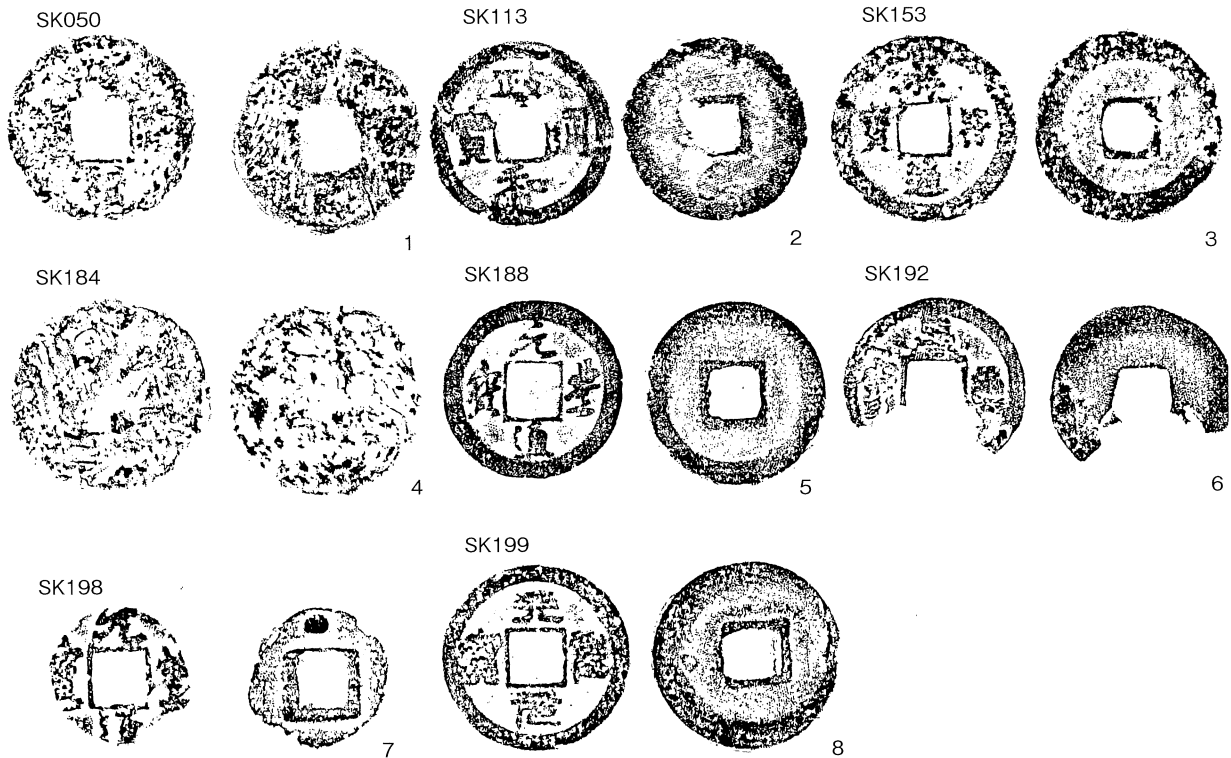
SK244

SK-244はK-74で検出された土坑である。第159図に図示した遺構の規模は東西1m、南北70cmの楕円形をしている。内部には径30cm、深さ50cmのSP1731と径40cm、深さ25cmのSP1732、径30cm、深さ30cmのSP1733が掘り込まれている。床面は不明であるが、北側に検出面から深さ10cmの位置に平坦面があり、これが床面と想定できる。しかし、この3つの柱状遺構の順序とSK-244の前後関係は



第159図 SK244実測図 (1/30)

第160図 SK248実測図 (1/20)



第161図 土坑出土銅銭実測図実大 (1/1)

第2節 遺構と遺物

は不明である。

遺物は、在地系土師質土器が遺構の上面を中心に出土している。しかし、柱穴状遺構との関係が不明であるため、どの遺構に伴うか不明である。

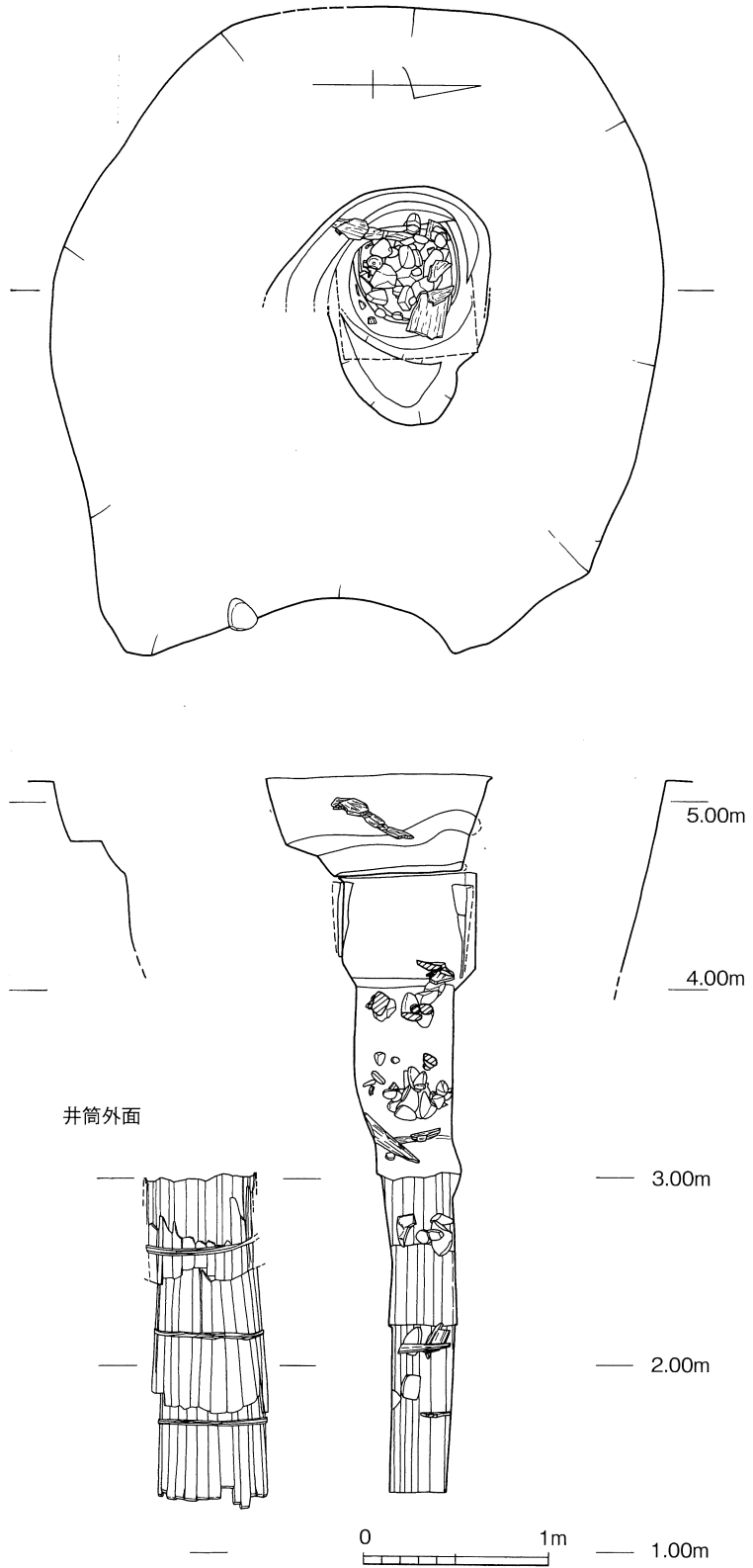
SK248

第160図に図示したSK248はL-77で検出された遺構である。SK209に掘り込まれた遺構の規模は、直径約60cm、で、上面は西側にある近代の掘り込みのため西に向かって傾斜している。床面も西に向かって傾斜しており、深さは東側が20cm、西隅が40cmである。

遺構内からは埋められる際に詰められたと想定される拳大の礫が積み重なった状態で検出された。遺物は、ほとんど出土しなかった。しかし、わずかに出土した京都系土師器の細片が含まれることから16世紀後葉と考える。

各土坑出土銅銭

以上の主要な土坑とそこから出土遺物を報告したが、これ以外に、報告すべき遺物として第161図に図示した銅銭がある。ここでは、すでに報告した1・4以外を個々には報告しないが、別項の遺物一覧表に記載する。



第162図 SE013実測図 (1/40)

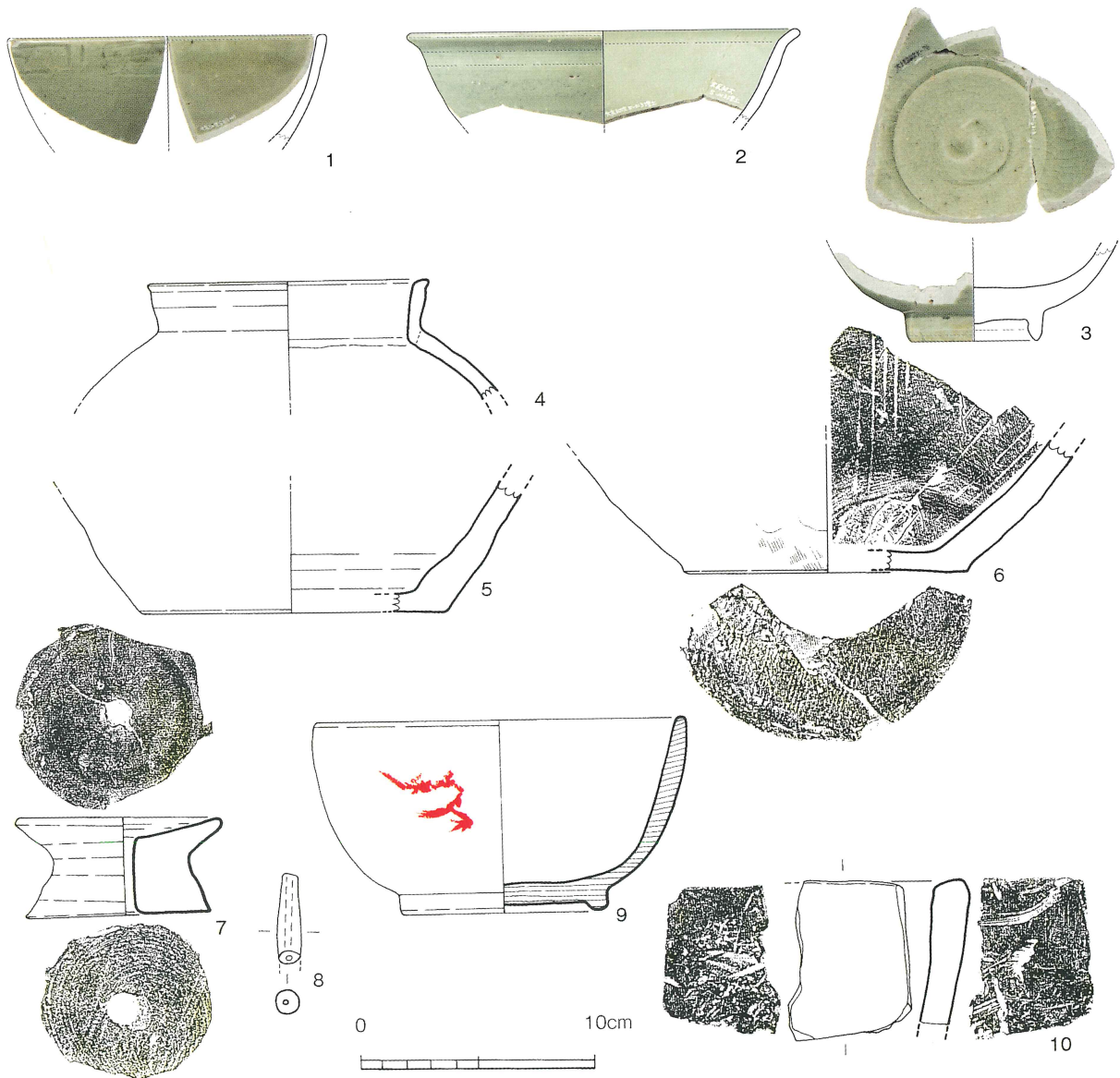
3. 井戸

府内町跡第30次調査では、3基の井戸が確認されている。これ以外にも、土坑で報告した中にも井戸 SK-059・075・109・123のように井戸の可能性の強い形態と深さを持つ遺構もある。しかし、ここでは、掘り込みの中央部で井戸枠と考えられる結桶やその痕跡が確認された確実なものを井戸として報告する。

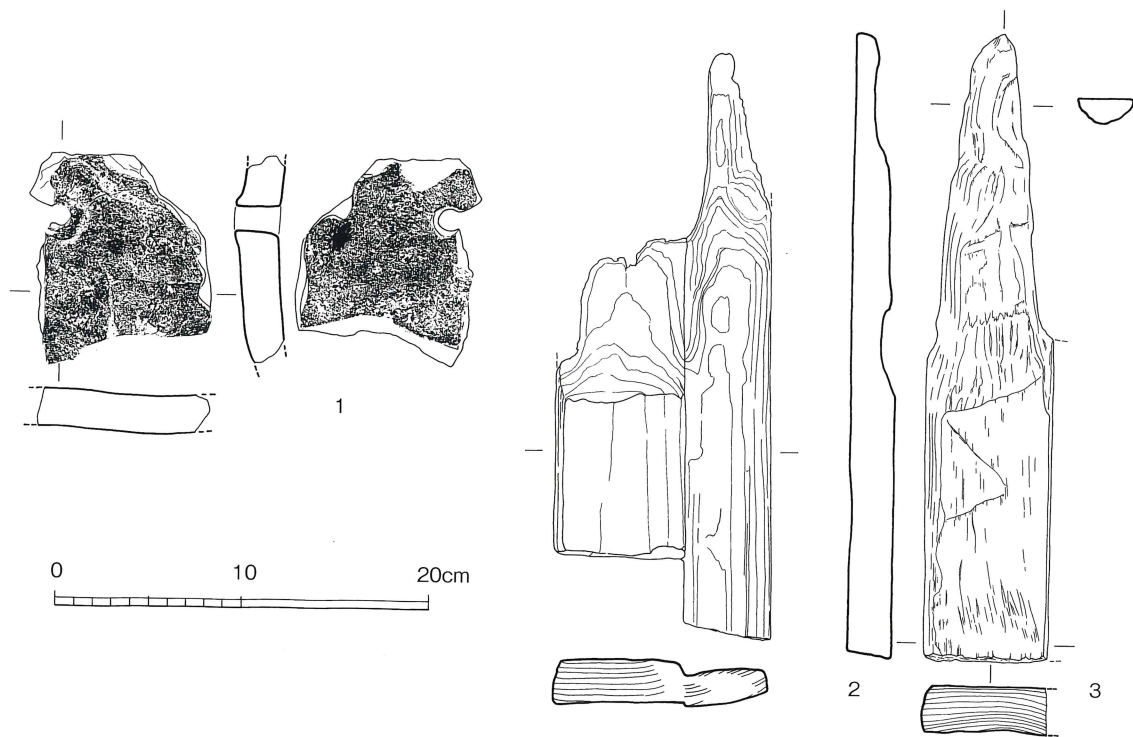
SE013

SE013はK-76で検出された遺構で、16世紀後葉のSK-007に東側を切られる。遺構は、第162図に図示した井戸で、井筒の掘り方は径3.3mの円形で、その中央で井戸枠がある。井戸枠は検出面から約50cm下位で一辺約70cm、約長さ60cmの縦板張り方形枠の痕跡を確認した。これより下位は結桶積み井戸枠で、深さ4mまで掘り下げた結果標高3mから1.3mにかけて、三段に重ねられた結桶を検出した。桶は竹巻きで、直径は約60cmである。

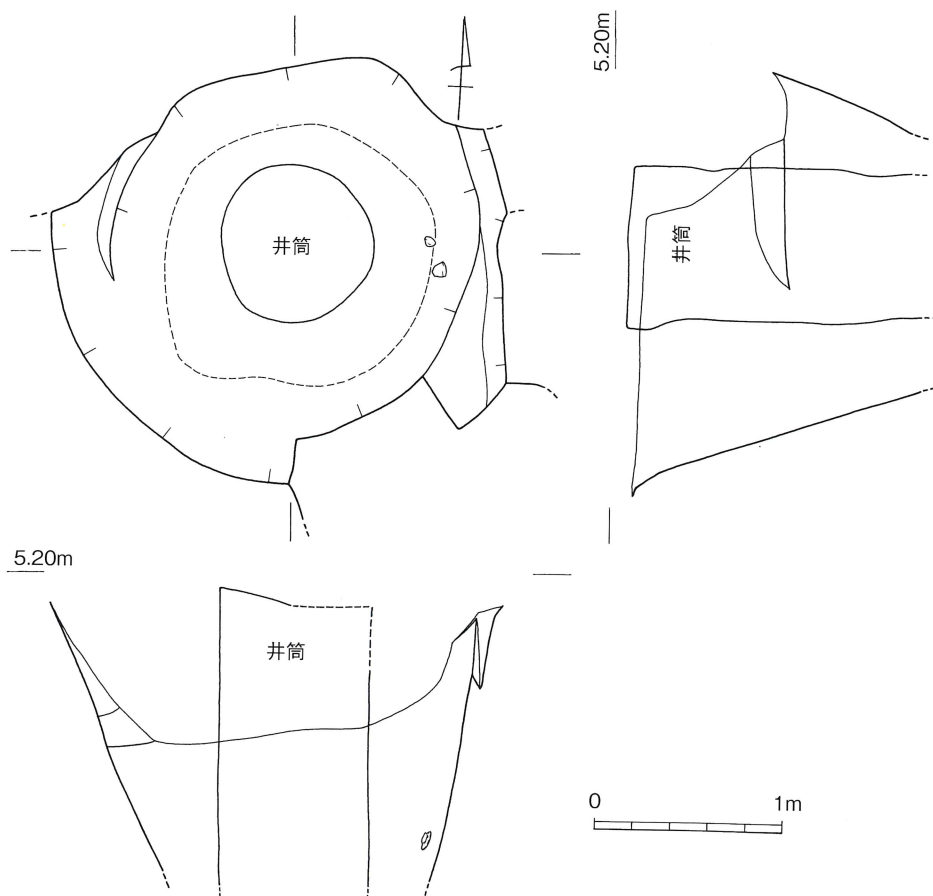
井戸枠内からは埋め立てる際に投棄されたと考えられる遺物が出土しており、第163・164図に図示した。第163図1~3は龍泉窯系の青磁碗で、1は口径15.6cmで、口縁部が外反する。2は13.5cmで口



第163図 SE013出土遺物実測図① (1/3)



第164図 SE013出土遺物実測図② (1/4)



第165図 SE126実測図 (1/40)



瓦質土器 縁部に雷文がある。3は高台径5.5cmの底部である。4は瓦質土器の壺で、口径は12cmである。器面  
東播系 はヘラ磨きで丁寧に仕上げられており、外面には煤が付着している。5は東播系須恵質土器の鉢の  
燭台 底部で、底径は13cmである。6は瓦質土器の播鉢の底部で、底径は12.3cmである。7は燭台と考えら  
れる土器である。上面径8.6cm、底径8cm、器高4.3cmで、中央部に焼成前の穿孔がある。形態は16世  
紀後葉の同類の燭台に比較すると器高が低い。8は一部を欠く土錘である。9は口径16cm、底径9.1  
滑石製石鍋 器、器高8.2cmの漆碗で、黒漆の上に赤漆で文様が描かれている。図断面の細線は年輪の方向であ  
る。10は滑石製の石鍋で、二次加工されている。

平瓦 第164図1は釘穴のある平瓦で、2は中央で段が付くように加工された厚さ2cmの板状の木片で、3  
も厚さ2cmに加工された板状の木片である。2・3とも板目に木取りされている。

SE013は、第163図7の燭台が16世紀代の可能性があるものの、他の遺物は14世紀代である。中世  
大友府内町跡の井戸は、概ね14世紀代が方形縦板横棧型の井戸枠で、16世紀代は結桶積みである。  
SE013は、上位が方形縦板で、下位が結桶積みであり、数少ない14世紀代の結桶積みの可能性が高い。  
SE126

SE126はK-77・78で検出された遺構である。第165図に図示したように、井筒の掘り込みは検出  
結桶積 面で直径2.4mあり、東壁面はほぼ垂直であるが、それに比較し、西壁面は急傾斜面となっている。  
井筒は中央部で検出されたが、腐食のため結桶積後がスタンプとして残っていた。スタンプは、直  
径約80cmで、検出面から深さ1.8mの位置まで確認された。遺構は深さ約2mまで掘り下げたが、狭  
小となり、危険なため中断した。

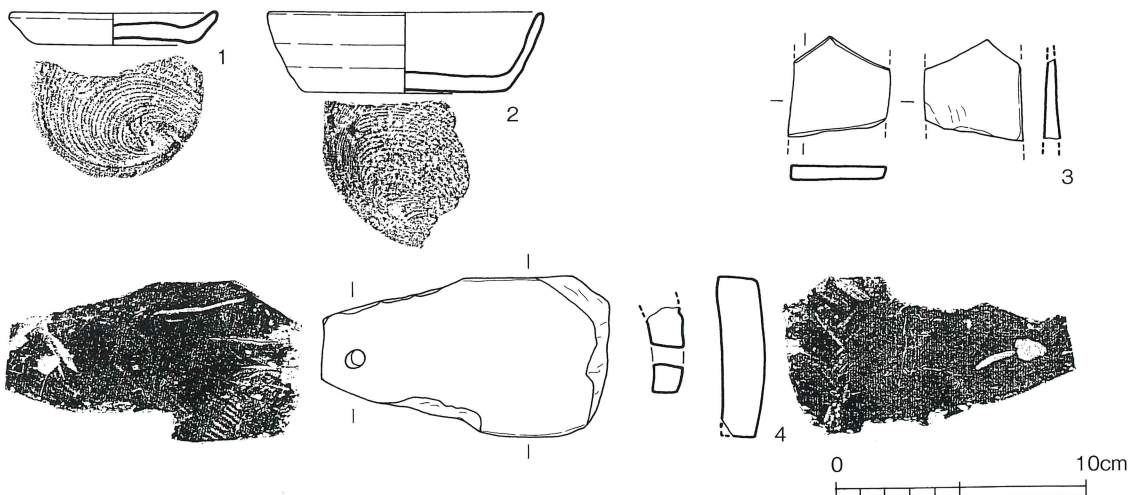
遺構内からは、第166図に図示した遺物が出土している。1・2は在地系土師質土器であるが、皿  
金雲母 である1は口径8.3cm、底径6.2cm、器高1.2cmである。胎土に金雲母が混入している。2は口径11cm、  
底径8.2cm、器高3.1cmである。

3・4は石製品で、3は幅4cmの砥石である。両面とも使い込まれ、薄くなっており厚さ0.3~0.7cmで  
滑石製石鍋 ある。両端を欠きいる。4は滑石製の石鍋の破片で、再加工で周辺が研磨され、器面に穿孔がある。  
重量は206gあり、温石として使用されたと推測できる。

SE126の時期は、在地系土師質土器の形態からSE013と同じく14世紀代と考えられる。井筒の構  
造も同じく結桶積みで、中世大友府内町跡の井戸では類例の少ない14世紀代のものである。

#### SE142

SE142はK-77で検出された遺構で、第167図に図示している。東側から16世紀後葉の土坑である  
SK010が掘り込まれているが、確認された遺構の規模は、直径約2mの井筒の掘り込みがある。検  
出面から約1.5を掘り下げた結果、壁はほぼ垂直に掘り込まれていることが確認されたが、それ以



第166図 SE126出土遺物実測図 (1/3)

結桶積み

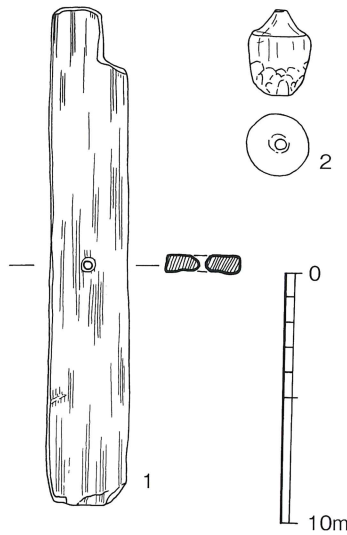
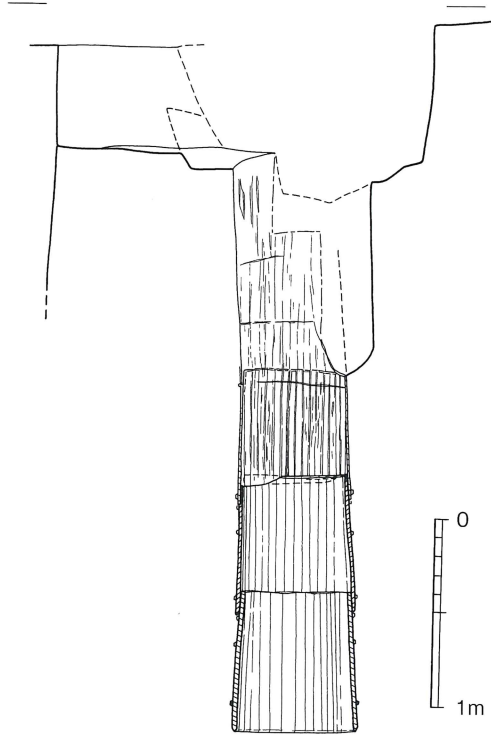
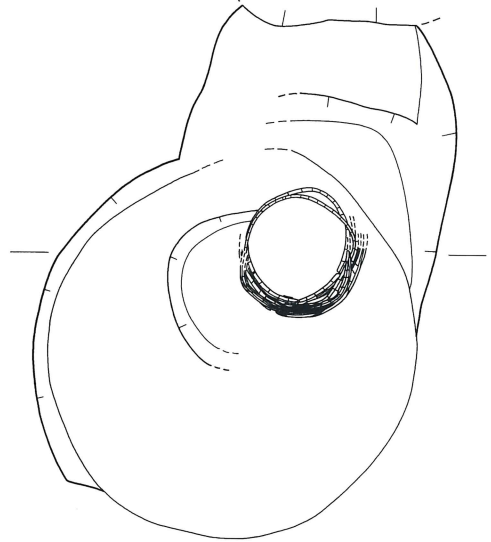
上の掘削は崩落の危険性があるため中止した。

井筒は、直径約2mの掘り込みの中心から南東方向にズレて設置されている。調査は井筒内部の埋土の除去を行いながら、進めた。その結果、遺構検出面から3.8mまで掘さ下をおこなったが、狭小で危険なためそこで中止した。検出された遺構は、少なくとも五段の結桶積みで、下位になるほど遺存状況は良好であった。桶は口径65cm、底径60cm、高さ75cmで、口の部分を下にし、積み重ねられている。

井戸は塵芥を詰めながら人為的に埋められた痕跡がないため、土器・陶器の出土はわずかであった。出土遺物は第168・169・170図に図示したが、木器・金属器である。第168図1は幅3.2cm、厚さ0.4cmの板であるが、中央部に径0.1cmの穴が穿かれている。断面の細線は年輪の方向で、正目に近い木取りをしている。2は直径2.5cm、長さ3.5cmの、一方が尖るような突起部を持ち、反対側は径0.5cm、深さ0.6cmの木器である。

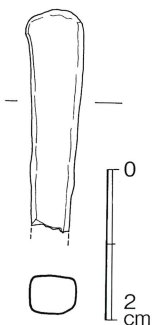
第169図は青銅製品で、中空になっており、刀子の柄の可能性がある。第170図は銅銭である。1は1078年に初鑄の「元豊通寶」の銘のある宋銭である。直径2.3cmで、重さは2.6gである。2はほぼ半分が欠けており、さらに錆が進行しているため、判読不能である。

遺構の時期は、決定できる良好な資料がしておらず明確にすることはできない。しかし、状況としては、上位を16世紀後葉の土坑が切っていることや周辺に14世紀代の結桶の井筒の井戸が検出されていることから、16世紀以前の可能性を持つ。

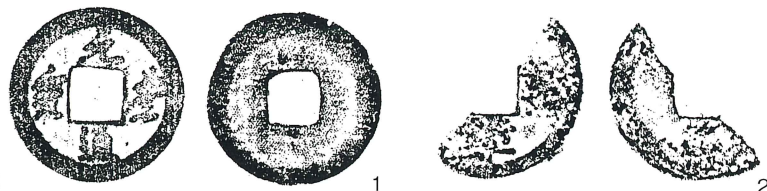


第168図 SE142出土木製品  
実測図 (1/3)

第167図 SE142実測 (1/40)



第169図  
SE142出土  
青銅製品実  
測図 (1/1)



第170図 SE142出土銅銭実測図 (1/1)

#### 4. 石積遺構

調査区の北端のJ・K・L-74と東壁近くのL-76で河原石を主体とする石を積み上げた遺構が検出された。遺構の目的は不明であるが、これを不明遺構として報告する。

##### SX012

SX012はJ・K・L-74の全体に広がり、さらに東西方向の調査区外に延びる大きな遺構である。それは第171図に図示しているが、南北方向の石積みと石段で構成され、さらに第172図の土層断面図を見ると、遺構の北側に街路状の堆積が観察できる。

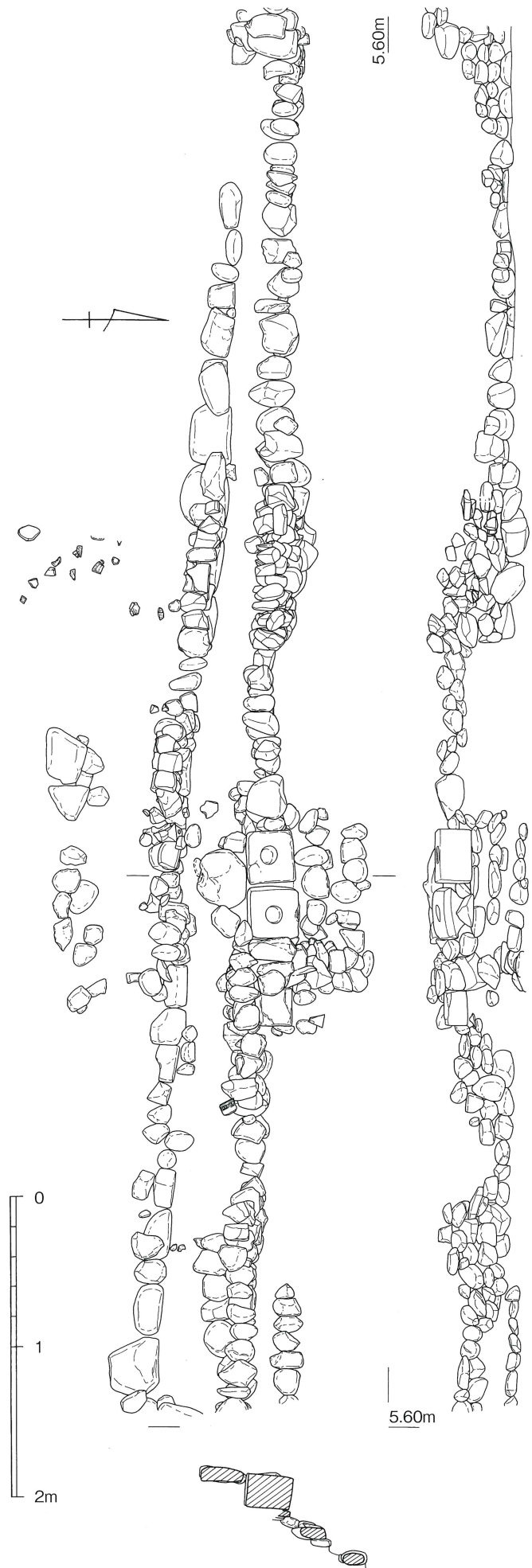
石積は人頭大の河原石を中心に使用されており、平行する二列が検出された。第172図の土層図を参考にすると、南側の石積みが最初に築かれ、その後、それを覆うように埋め立て、北側に拡張して再度、石積みを築いている。これらの石積みは面を北に揃え、石を積重ねており、遺存状態の良い部分は高さ60cmが残されている。

さらに、新しい石積みには、北側から上れるように高さ60cm、三段の石段が北に50cm張り出して構築されている。石段の最上面は石塔の地輪が2個並べて据えられており、その南には平坦な河原石が面を揃えて配置されている。

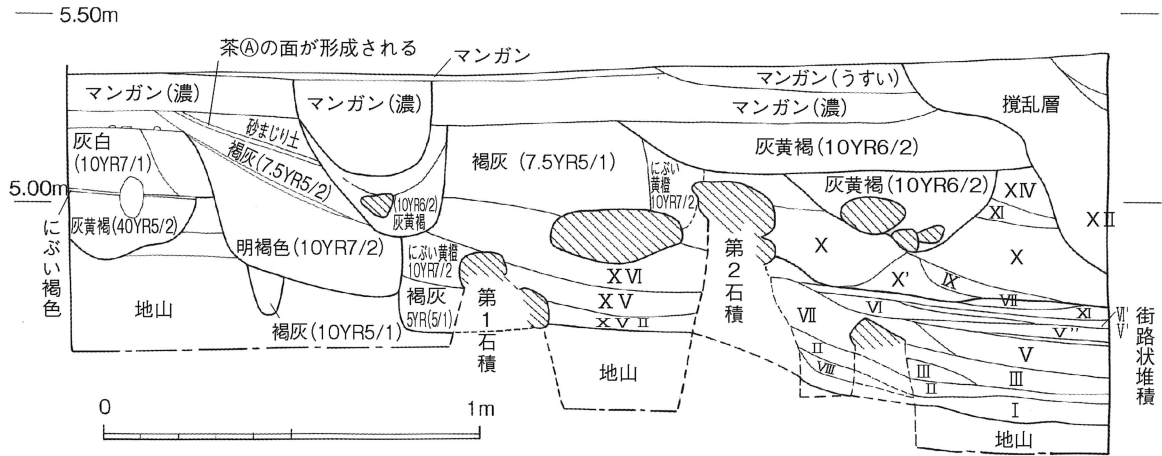
この石段の北側はI～XⅢ層まで分層したが、I～Ⅷ層までは版築状に堆積した土砂が観察できる。中世大友府内町跡で観察されるこのような土層は、第1・2南北街路があり、この部分も同様と考える。ただ、ここより北側はコンクリートの下水溝が埋設されており、失われている。

第173～175図に図示した遺物は、

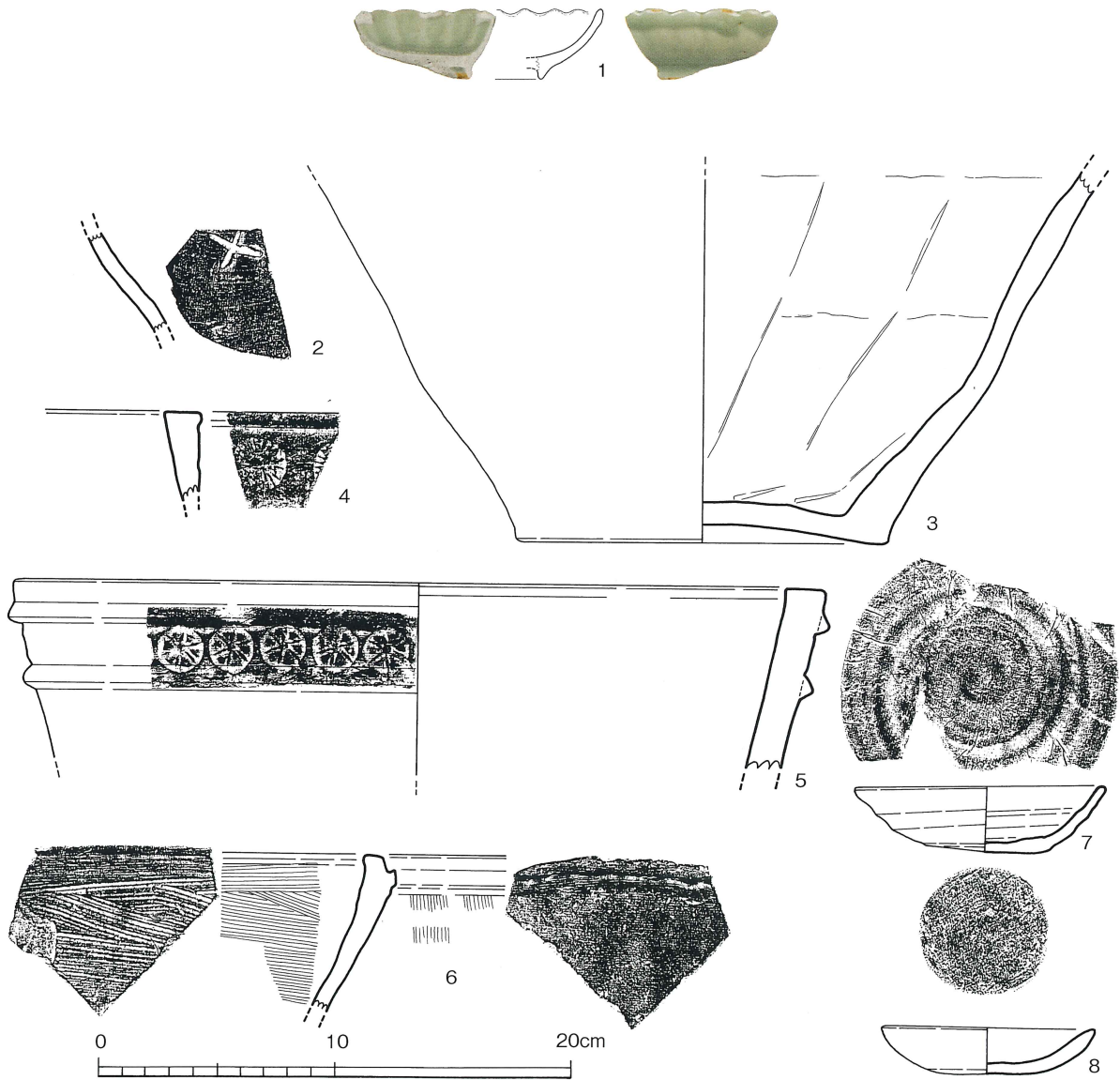
石積み  
石段



第171図 SX012石組遺構実測図 (1/40)



第172図 SX012中央部土層断面実測図



第173図 SX012出土遺物実測図① (1/3)

龍泉窯系  
常滑焼  
瓦質土器  
京都系土師器

この石積み、石段を検出中に出土したものである。第173図1は龍泉窯系の青磁皿である。2はヘラ記号のある須恵器である。3の底部は底径15.8cmの常滑焼の甕で自然釉がかかっている。4・5は瓦質土器の鉢で、外面に菊花文のスタンプがある。6は土鍋である。7は口径11.7cmのロクロ目のある土師質土器で、8は口径9.2cmの京都系土師器である。第174図は22.1×22.2の塼である。第175図1は1009年初鑄の「祥符通寶」、2は1086年初鑄の「元祐通寶」で北宋銭である。

出土遺物は14世紀～16世紀代までであるが、全体的な状況から遺構の時期は、16世紀後葉と考える。

SX207

SX207はL-76で検出された遺構で、第176図に図示した。石積みの規模は長さ3.5mで東西に延び、人頭大の河原石を主体とした石を北側に面を合わせて積み上げている。遺存状態の良好な場所では、高さ約50cmが残されている。石積みの下部からは、直径3.5m、深さ1.6mの播鉢状の土坑が検出された。石積みはこの土坑の中心部を東西に横断するように構築されている。

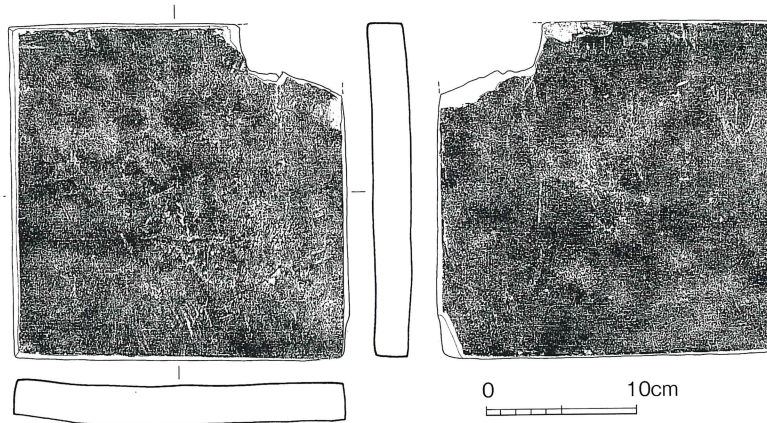
龍泉窯系  
梅花貼付  
茶入れ

出土遺物は、石積み周辺と土坑から主要なものを図化し第177・178・179・180図に図示した。第177図1～5・7は龍泉窯系の青磁である。1の碗は口径15cm、底径5.2cm、器高6.6cmである。2の底径5.5cmの底部は焼成不良で、発色が灰白色である。3は底径5cmの皿で、重ね焼の跡が残る。4は径6.8cmの碁笥底状の底部である。5は底径10.6cmの大皿の底部である。6は白磁の皿で口径12cm、底径6.8cm、器高2.2cmである。7は口径30.6cmで口縁部が内湾し、外面に梅花貼付のある大皿である。

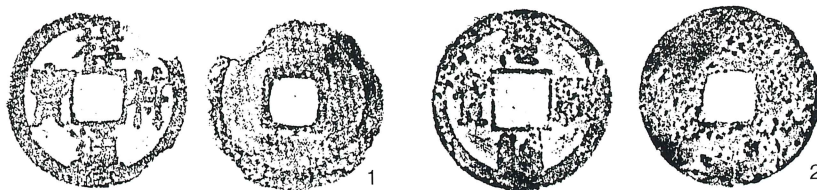
8は常滑焼の甕で、10は褐釉陶器の茶入れである。口径3cm、左回転の糸切り底は径2.6cmで、器高は約5cmが想定できる。9・11～13は備前焼で、9は口径20.6cmの鉢、11は甕、12は口径25.2cm、底径11cm、器高11.1cm、13は口径29.5cm、底径12cm、器高12.7cmの播鉢である。14～16は瓦質土器の播鉢で、14の底径は15.5cmである。

瓦質土器  
焼締陶器  
京都系土師器

第178図1は底径13.6の瓦質土器の播鉢で、見込み部には螺旋状の挿り目が入れている。2は口径10.2cmの瓦質土器の碗である。3は底径7.6cmの焼締陶器の底部である。4・5はロクロ目の付く土師質土器の皿で、口径は4が8.6cm、5は13cmである。6～10は京都系土師器の皿で、口径は、6が



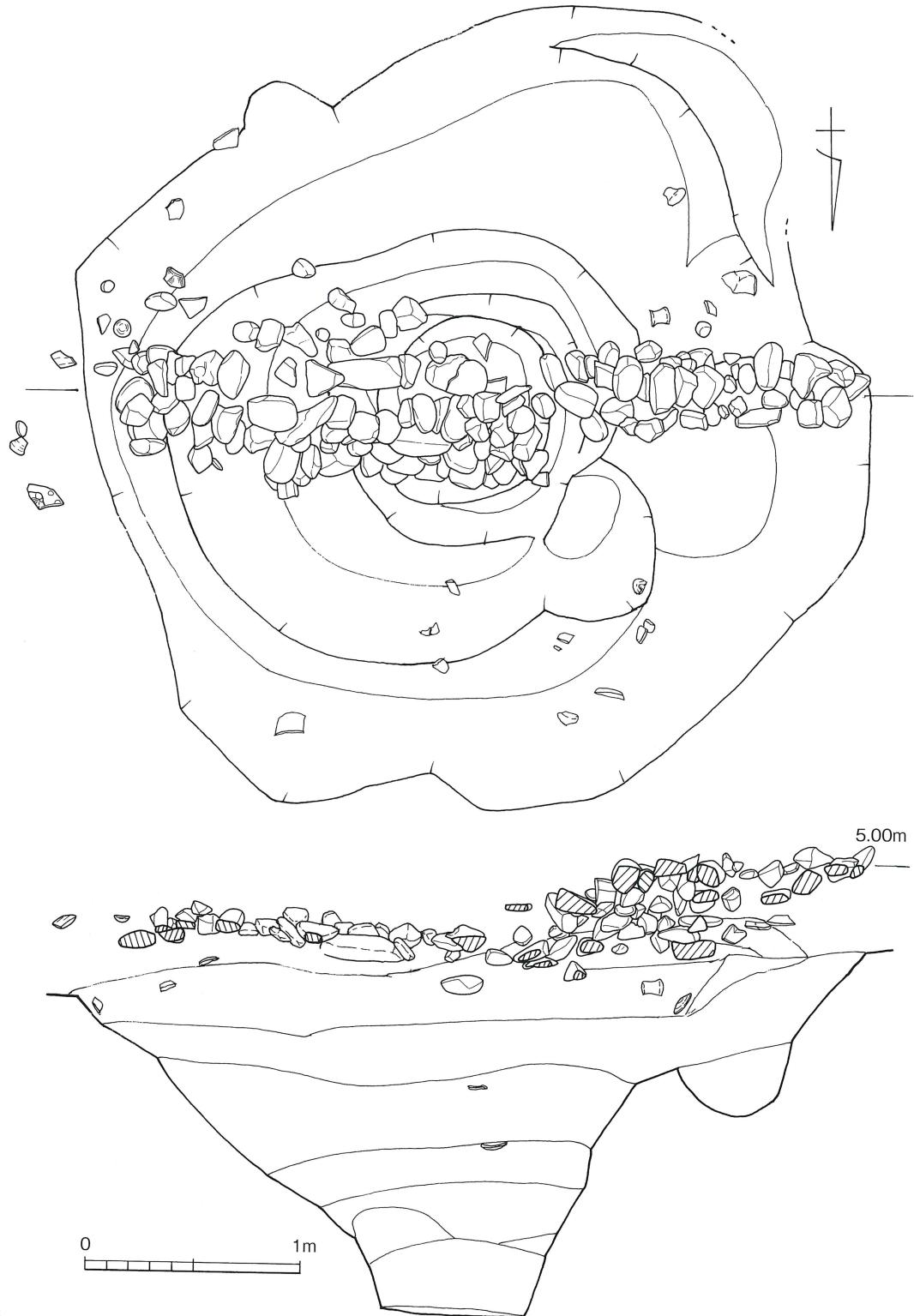
第174図 SX012出土塼実測図② (1/5)



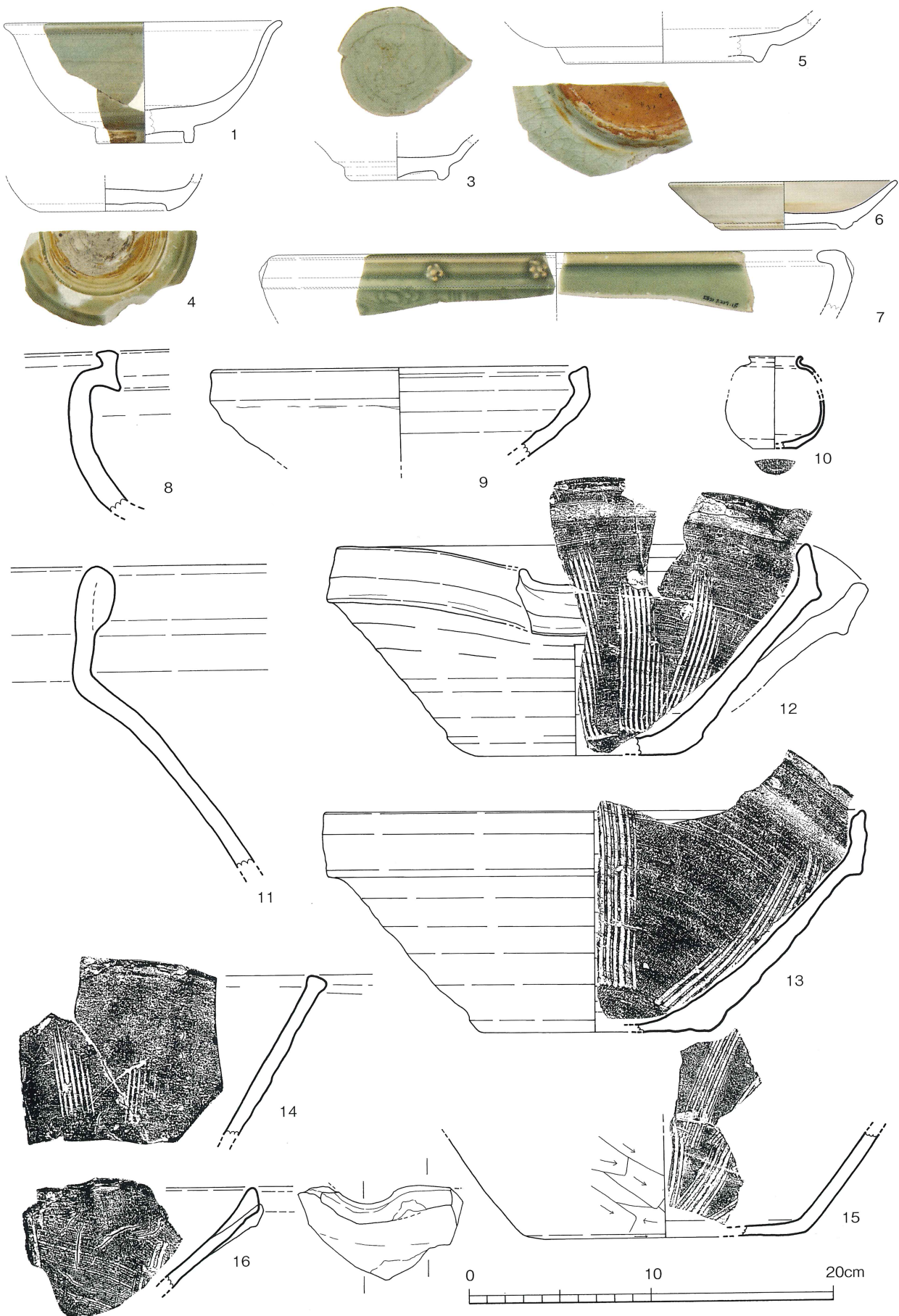
第175図 SX012出土銅銭実測図 (1/1)

第2節 遺構と遺物

灯明皿  
8.9cm、7が8.1cm、8が10.4cm、9が12.7cm、10は14.2cmである。京都系土師器の五法量のうち、最大の16cmを除く四つが見られ、6・7・9には煤が付着しており、灯明皿として使用されている。11～13は燭台で12は11・13に比較すると器高が低い。14は弥生土器の甕の底部である。15は断面方形の鉄棒で両端を欠くものの、15cm以上ある。



第176図 SX207実測図 (1/30)



第177図 SX207出土遺物実測図① (1/3)

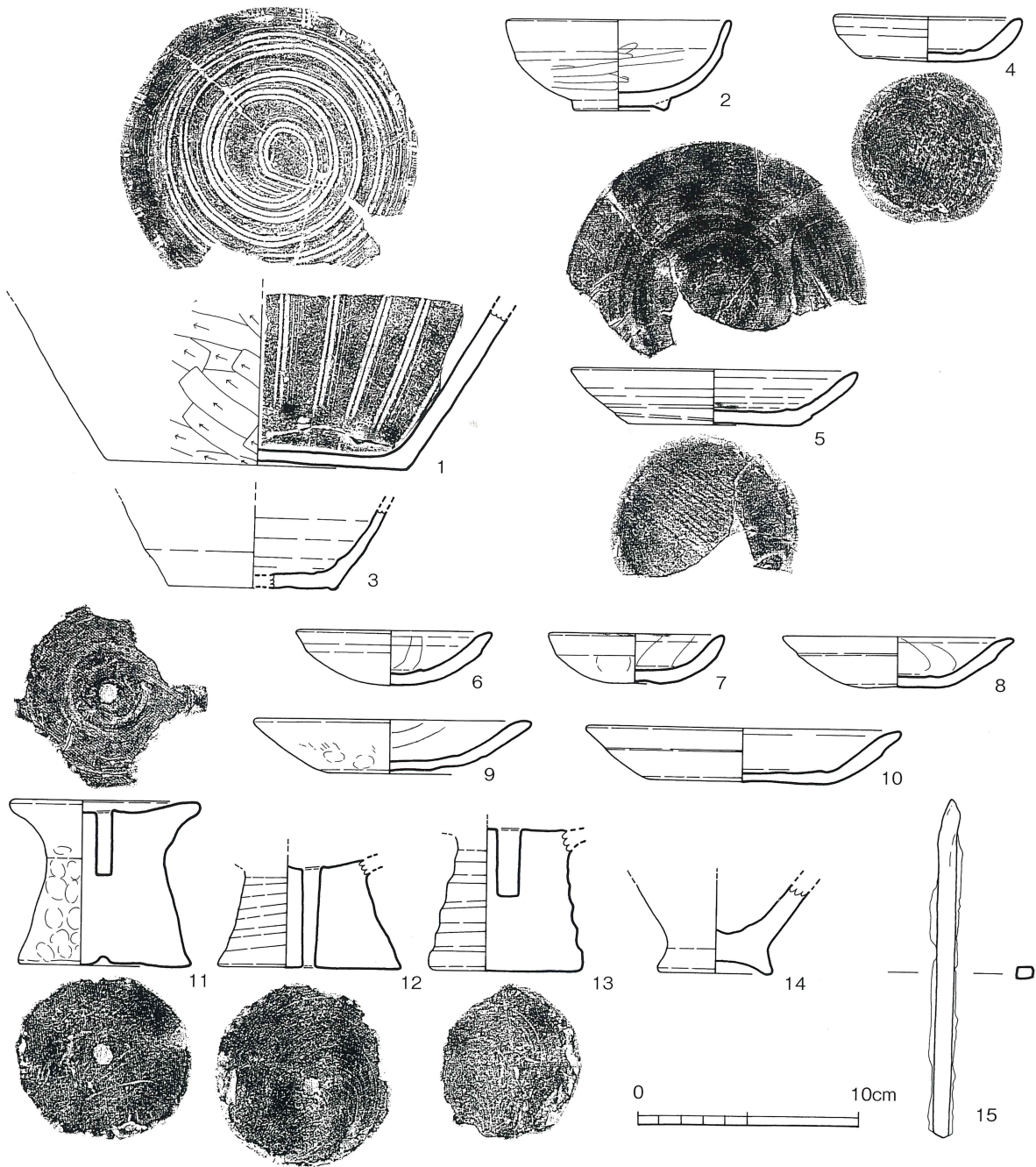
第2節 遺構と遺物

唐草文  
軒平瓦  
鬼瓦  
銅銭

第179図1は備前焼の大甕の口縁部である。2は唐草文のある軒平瓦であるが、焼成時に瓦頭にヒビが入る。3は鬼瓦である。4・5は珠文と巴文で構成される軒丸瓦である。6は砂岩製の挽き臼である。7は安山岩製の挽き臼の上臼である。8は凝灰岩製の石製品である。

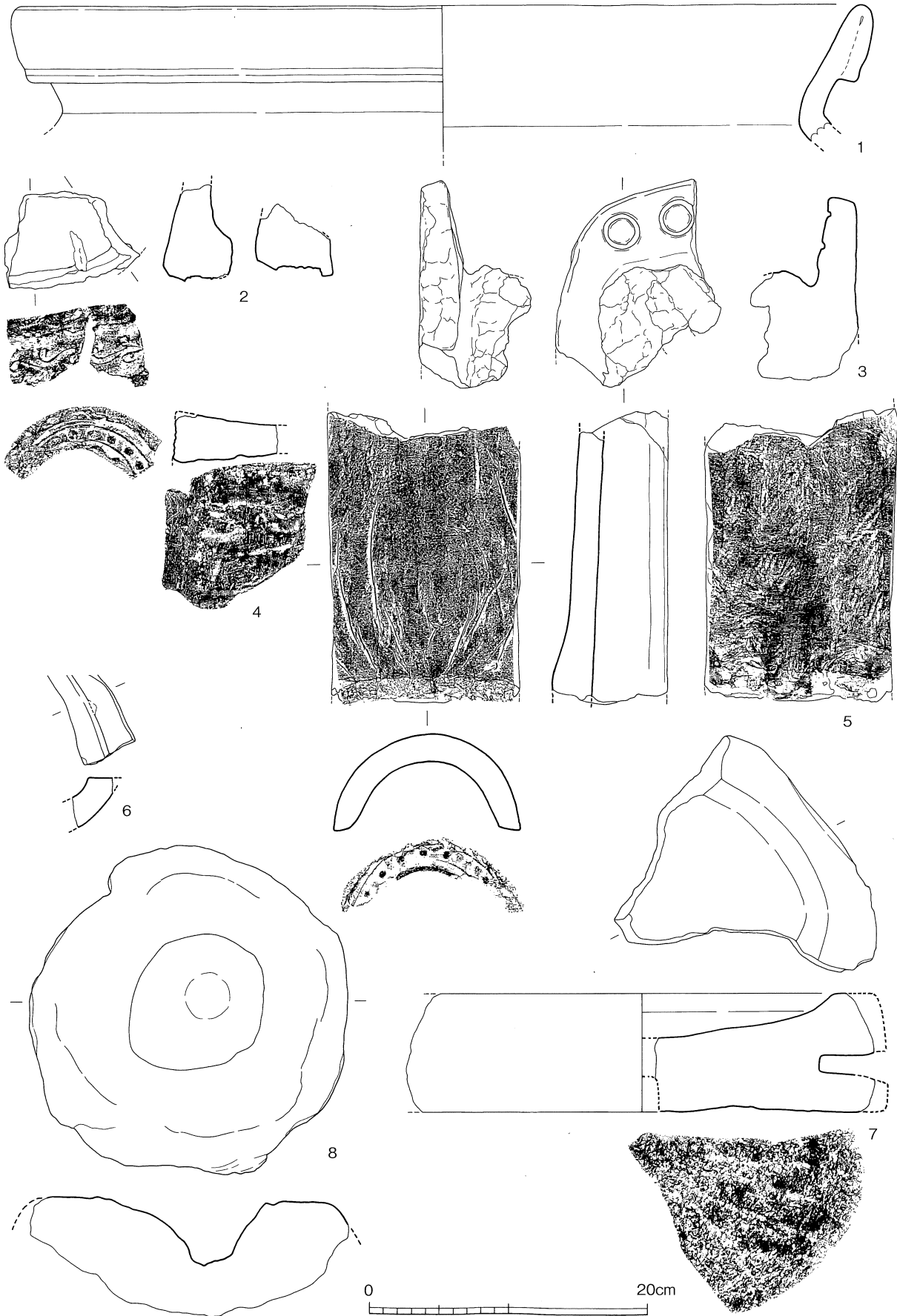
第180図は銅銭で、1は1086年初鑄の「元祐通寶」で北宋銭、2は1241年初鑄の「淳祐元寶」で南宋銭である。3・4は判読不能である。

遺構の時期は、土坑部分も含め、京都系土師器が出土しているため16世紀後葉と考える。



第178図 SX207出土遺物実測図② (1/3)





第179図 SX207出土遺物実測図③ (1/4)

5. 柱穴状遺構

調査区からは、700ヶ所以上の柱穴状遺構が検出されている。第181図にはその一部を図示したものである。こうした遺構は掘立柱建物などに関連するものも含まれるが、それ以外の目的で掘り込まれたものも含まれている。各遺構内からの出土遺物は多くないが、主要なものは遺構ごとに第182～186図に図示した。

SP1008 J-74で検出した遺構で、第184図1の龍泉窯系青磁碗の底部が出土している。

SP1017 K-74で検出した遺構で、第182図1の瓦質土器の擂鉢が出土している。

SP1039 K-74で検出した遺構で、第182図2の長さ4.4cm、重量4.7gの土錘が出土している。

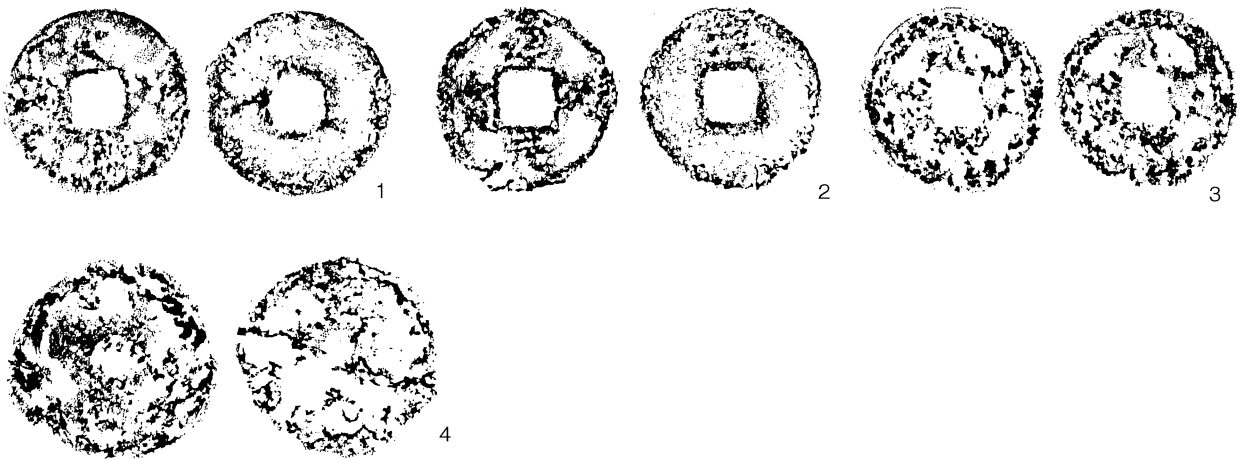
SP1065 K-76で検出した遺構で、実大表示した第182図3の金箔の青銅製金具が出土している。

SP1083 J・K-74で検出した遺構で、口径29.4cmの瓦質土器の擂鉢が出土している。

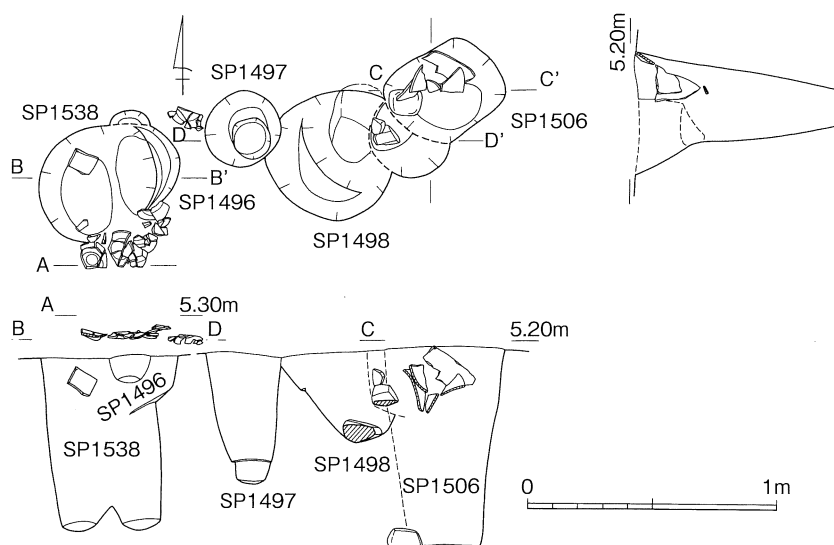
SP1091 K-74で検出した遺構で、第185図1の1310年初鑄の元銭「至大通寶」が出土している。

SP1133 K-75で検出した遺構で、第185図2の1004年初鑄の宋銭「景德元寶」が出土している。

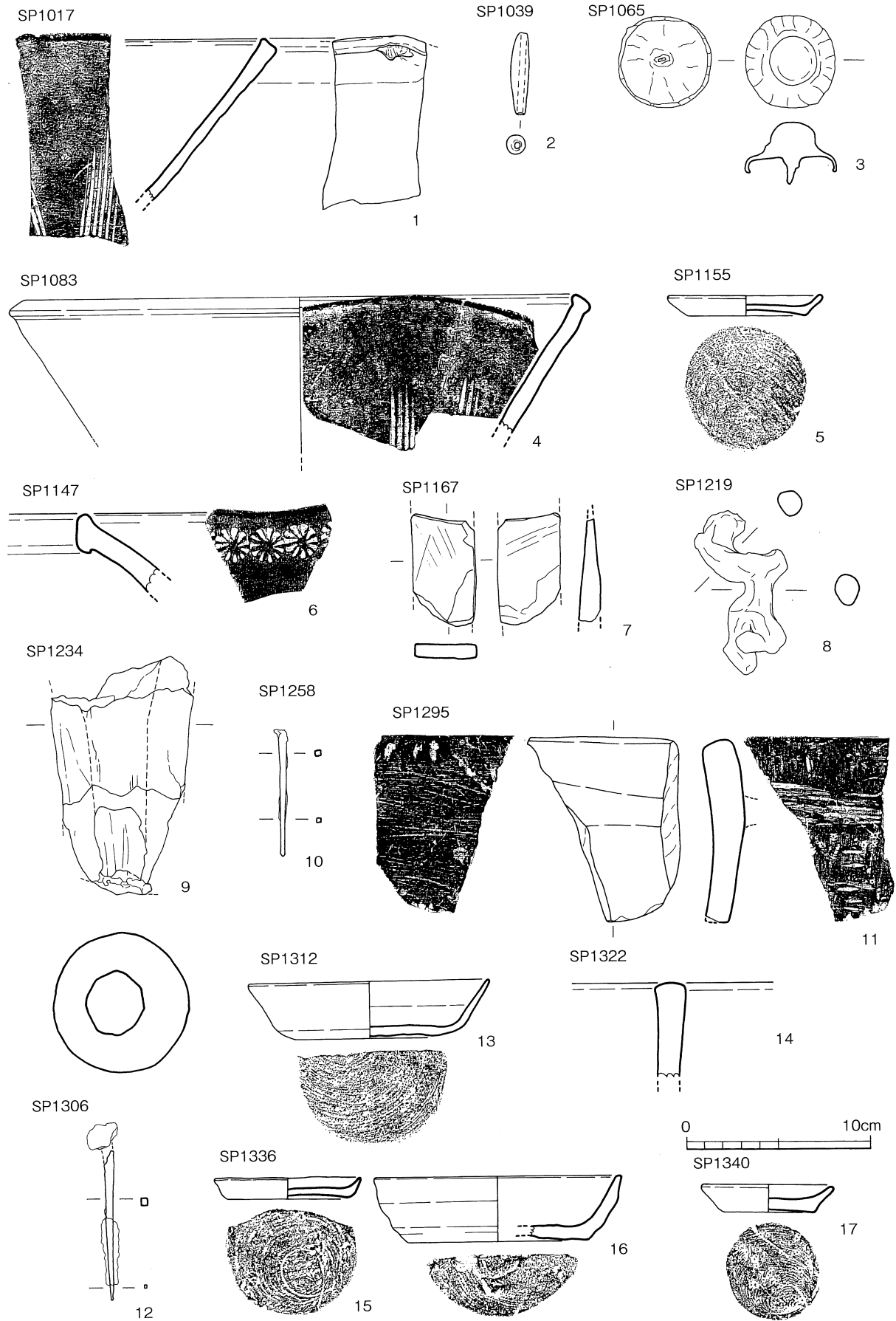
SP1135 K-75で検出した遺構で、第185図3の銅銭が出土しているが、判読不能である。



第180図 SX207出土銅銭実測図 (1/1)

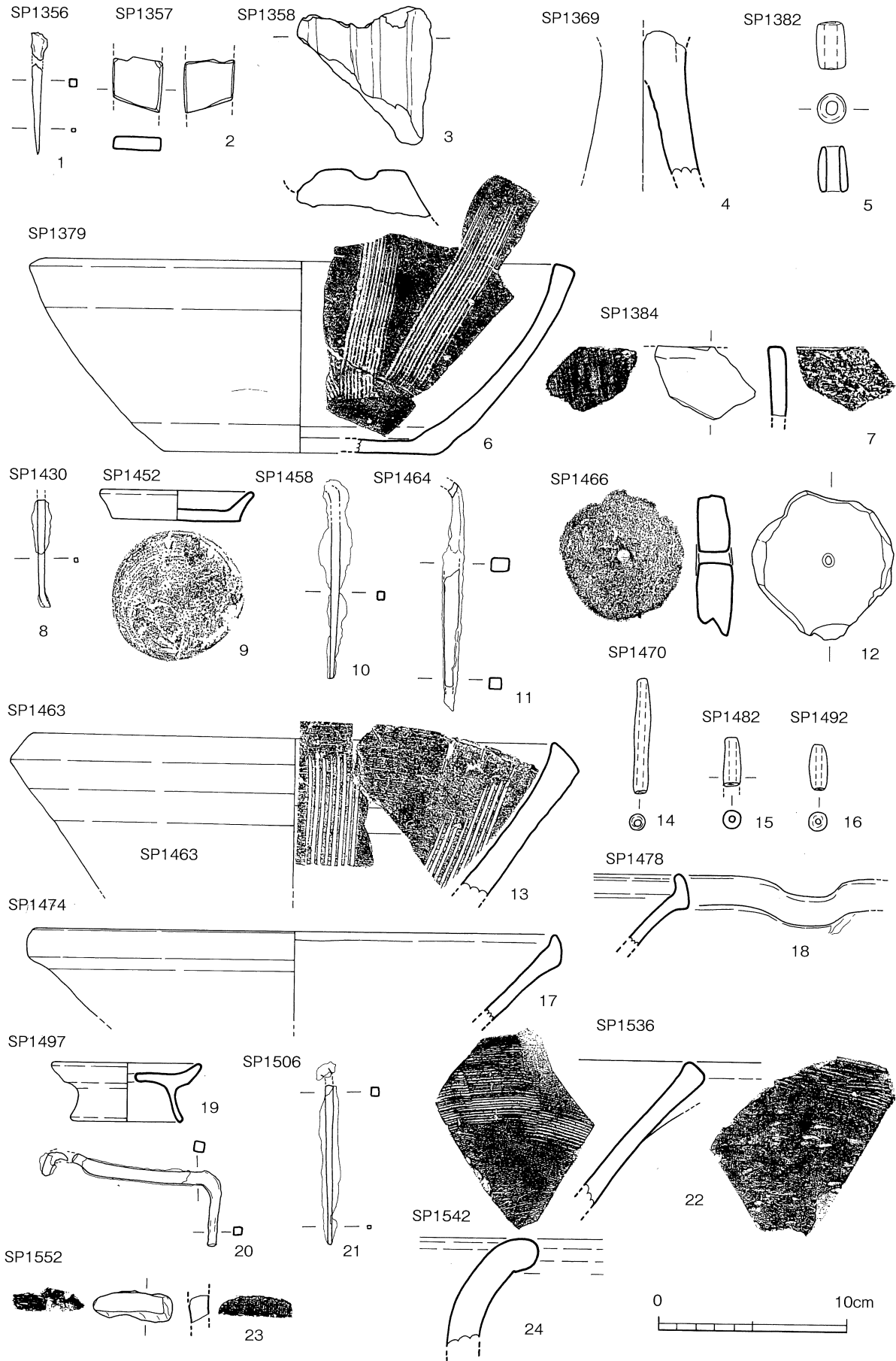


第181図 SP1538・1496・1497・1498・1506実測図 (1/30)



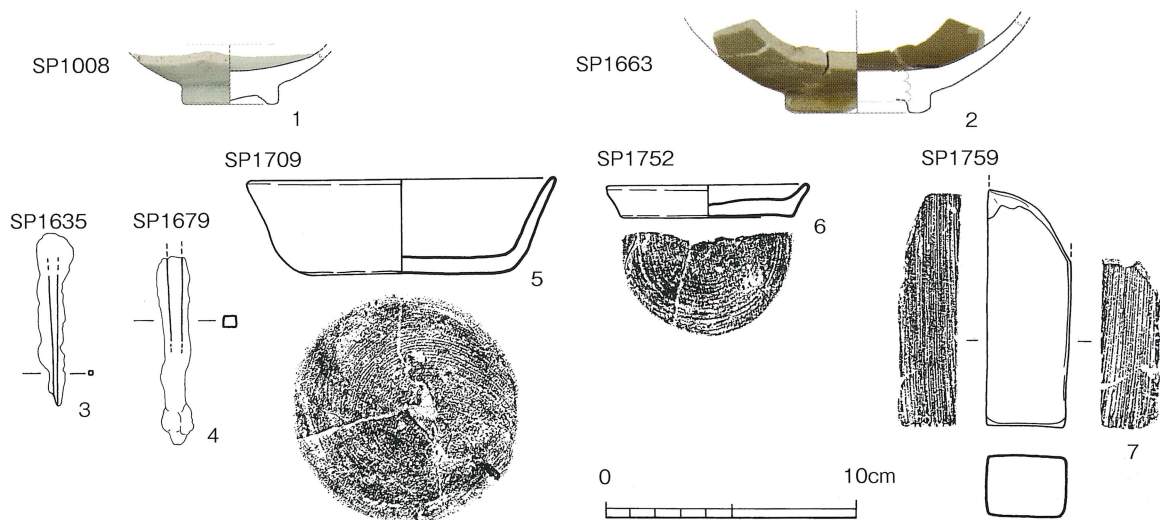
第182図 各柱穴出土遺物実測図① (1/3) 銅製品3・5 (1/1)

第2節 遺構と遺物

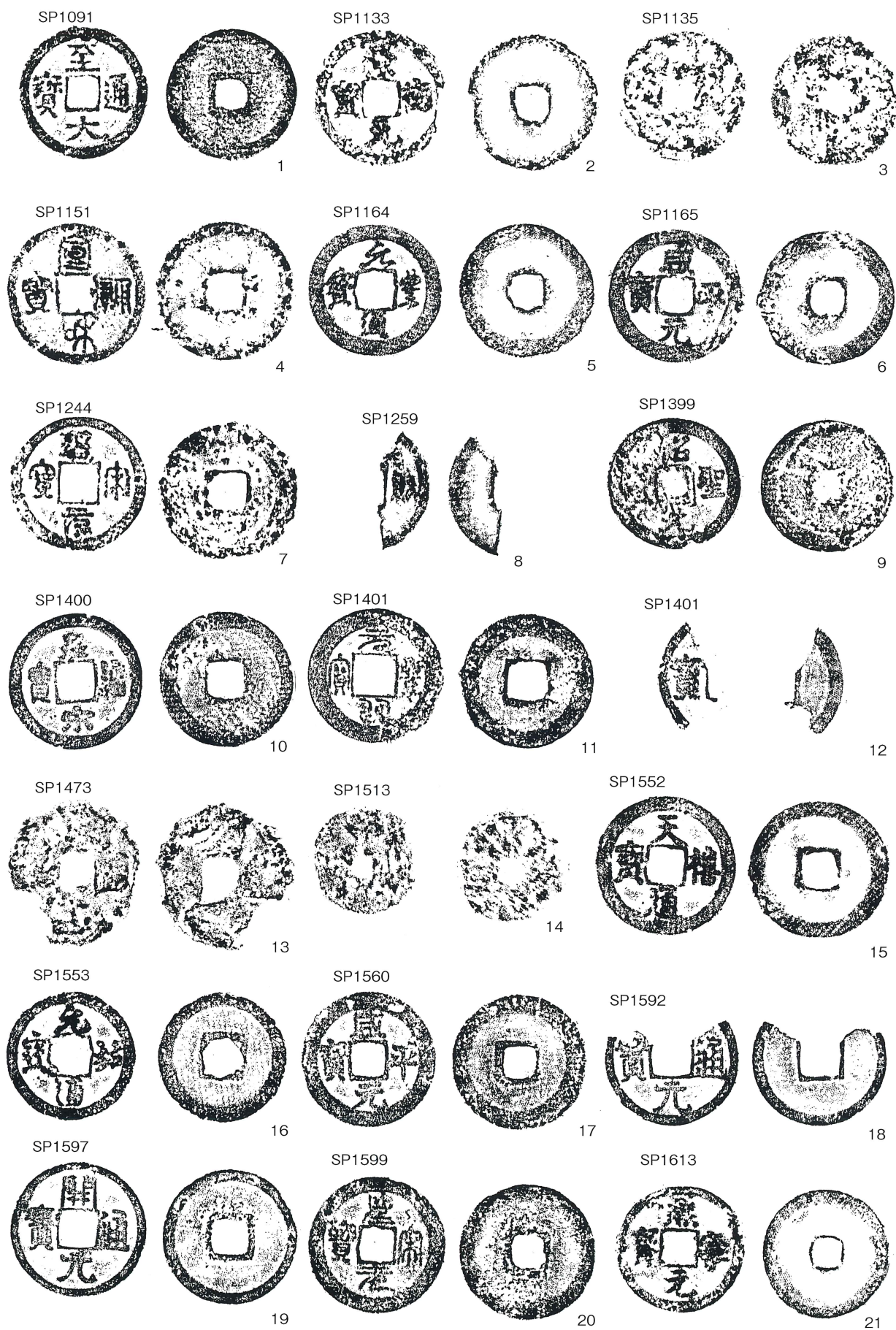


第183図 柱穴内出土遺物実測図② (1/3) 銅製品20 (1/1)

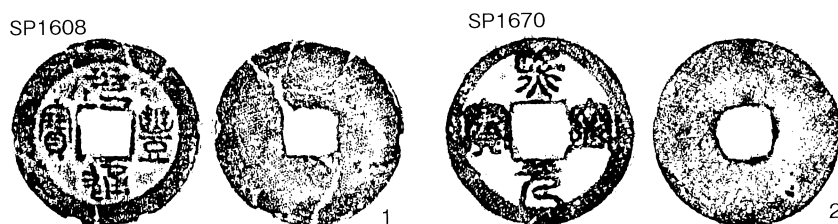
- SP1147 K-76で検出した遺構で、出土した第182図6は菊花文が付く瓦質土器である。  
 SP1151 K-74で検出した遺構で、出土した第185図4は1119年初鑄の宋銭「宣和通寶」である。  
 SP1155 K-76で検出した遺構で、出土した第182図5は在地系土師質土器の皿である。  
 SP1164 K-76で検出した遺構で、第185図5の1078年初鑄の宋銭「元豊通寶」が出土している。  
 SP1165 K-76で検出した遺構で、第185図6の998年初鑄の宋銭「咸平元寶」が出土している。  
 SP1167 K-76で検出した遺構で、第182図7の両面を使い込まれた砥石が出土している。  
 SP1219 K-75で検出した遺構で、第182図8の用途不明の不整形な青銅製品が出土している。  
 SP1234 K-75で検出した遺構で、出土した第182図9は大型のフイゴの羽口である。  
 SP1244 K-75で検出した遺構で、第185図7の1101年初鑄の宋銭「聖宋元寶」が出土している。  
 SP1258 K-75で検出した遺構で、出土した第182図10は長さ6.8cmの鉄釘である。  
 SP1259 K-75で検出した遺構で、第185図8の銅銭の破片が出土している。SP1295 K-75で検出した遺構で、第182図11の滑石製石鍋の破片が出土している。  
 SP1306 K-76で検出した遺構で、出土した第182図12は長さ8cmの鉄釘である。  
 SP1312 J-78で検出した遺構で、第182図13は口径13cmの在地系土師質土器の坏である。  
 SP1322 K-78で検出した遺構で、出土した第182図14は瓦質土器の火鉢の口縁部である。  
 SP1336 J-77で検出した遺構で、出土した第182図15・16は在地系土師質土器の皿と坏である。  
 SP1340 J-78で検出した遺構で、出土した第182図17は在地系土師質土器の皿である。  
 SP1356 K-76で検出した遺構で、出土した第183図1は長さ6.4cmの鉄釘である。  
 SP1357 K-75で検出した遺構で、第183図2の両面を使用した幅2.6cmの砥石が出土している。  
 SP1358 J-76で検出した遺構で、第183図3の表面に溝を刻む石製品が出土している。  
 SP1369 K-74で検出した遺構で、第183図4の高杯の脚が出土している。  
 SP1379 J-76で検出した遺構で、第183図5の  
 SP1382 K-76で検出した遺構で、第183図6に実大で図示したガラス玉が出土している。  
 SP1384 J-77で検出した遺構で、第183図7の滑石製石鍋の破片が出土している。  
 SP1399 K-75で検出した遺構で、第185図9の1094年初鑄の宋銭「紹聖元寶」が出土している。  
 SP1400 K-75で検出した遺構で、出土した第185図10は1038年初鑄の「皇宋元寶」である。  
 SP1401 K-75で検出した遺構で、第185図11・12の銅銭で、11は1078年初鑄の「元豊通寶」である。12は「寶」しか残らない銅銭の破片である。



第184図 各柱穴出土遺物実測図③ (1/3)



第185図 柱穴内出土銅銭実測図① (1/1)



第186図 各柱穴出土銅銭実測図② (1/1)

- SP1430 K-76で検出した遺構で、出土した第183図8は頭部を欠く長さ5.6cmの鉄釘である。
- SP1452 K-76で検出した遺構で、出土した第183図9は在地系土師質土器の皿である。
- SP1458 L-77で検出した遺構で、出土した第183図10は先端を欠く長さ10.4cmの鉄釘である。
- SP1463 L-77で検出した遺構で、第183図11の15世紀代の備前焼播鉢が出土している。
- SP1464 L-77で検出した遺構で、出土した第183図12は両端を欠く長さ11.9cmの鉄釘である。
- SP1466 L-77で検出した遺構で、出土した第183図13は糸切り底に穿孔した加工品である。
- SP1470 L-77で検出した遺構で、出土した第183図14は一部を欠く4.9gの土錘である。
- SP1473 K-77で検出した遺構で、出土した第185図13は判読不能である。
- SP1474 K-77で検出した遺構で、出土した第183図17は東播系須恵質土器の鉢である。
- SP1478 L-77で検出した遺構で、出土した第183図16は東播系須恵質土器の鉢の片口である。
- SP1482 K-77で検出した遺構で、出土した第183図17は一部を欠く2.6gの土錘である。
- SP1492 K-77で検出した遺構で、出土した第183図18は2.8gの完形品の土錘である。
- SP1497 L-77で検出した遺構で、出土した第183図19は中央部に穿孔のある在地系土師質土の皿に脚が付く。20は断面方形の鉄製品で、カスガイの可能性がある。
- SP1513 K-75で検出した遺構で、出土した第185図14は判読不能である。
- SP1506 L-77で検出した遺構で、出土した第183図21は長さ8.3cmの鉄釘である。
- SP1522 L-77で検出した遺構で、出土した第183図22は滑石製石鍋の破片である。
- SP1536 L-77で検出した遺構で、出土した第183図23 瓦質土器の片口鉢で刷毛目調整がある。
- SP1542 L-76で検出した遺構で、出土した第183図24は備前焼の壺の口縁部である。
- SP1552 K-76で検出した遺構で、出土した第185図15は1017年初鑄の「天禧通寶」である。
- SP1553 K-76で検出した遺構で、出土した第185図16は1086年初鑄の「天祐通寶」である。
- SP1560 L-75で検出した遺構で、出土した第185図17は998年初鑄の「咸平元寶」である。
- SP1592 K-75で検出した遺構で、出土した第185図18は621年初鑄の「開元通寶」である。
- SP1597 K-77で検出した遺構で、出土した第185図19は621年初鑄の「開元通寶」である。
- SP1599 L-77で検出した遺構で、出土した第185図20は1101年初鑄の「聖宋元寶」である。
- SP1608 K-76で検出した遺構で、出土した第186図1は1078年初鑄の「元豊通寶」である。
- SP1613 K-75で検出した遺構で、出土した第185図21は1068年初鑄の「熙寧元寶」である。
- SP1635 K-75で検出した遺構で、第184図2の6.8cmの鉄釘が出土している。
- SP1663 K-74で検出した遺構で、第184図3の龍泉窯系青磁碗の底部が出土している。
- SP1670 K-76で検出した遺構で、出土した第186図2は1068年初鑄の「熙寧元寶」である。
- SP1679 L-77で検出した遺構で、出土した第184図4は頭部を欠く鉄釘である。
- SP1709 L-75で検出した遺構で、第184図5の在地系土師質土器の杯が完形品で出土している。
- SP1752 K-78で検出した遺構で、第184図6の在地系土師質土器の皿が出土している。
- SP1759 K-78で検出した遺構で、第184図7の一部を欠く砥石が出土している。

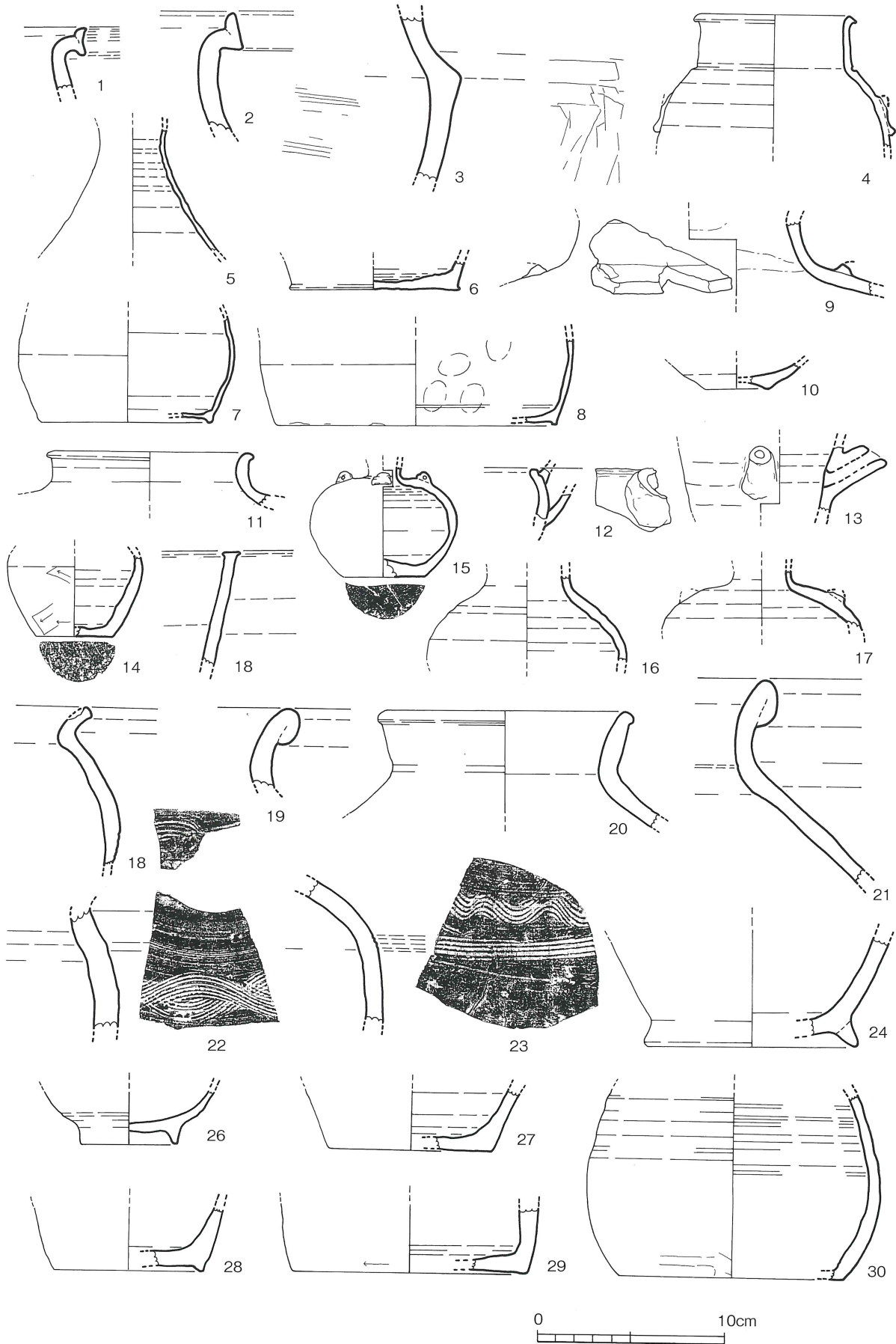
6. 包含層（整地層）

- 整地層 中世大友府内町跡第30次調査では、表土除去後、整地層である遺物包含層が現れ、これを掘削し、遺構を検出する。この作業中に多量の遺物が出土する。ここでは、こうした遺物を報告する。
- 貿易陶磁器 第187図は貿易陶磁器であるが、1は青磁の水注、2は発色の悪い龍泉窯系青磁碗、3・4は鎚連弁  
龍泉窯系 のある龍泉窯系青磁碗である。5・6・7は景德鎮窯系の青花で、5は碗、6は皿、7は長頸壺である。  
漳州窯系 8・9・10は漳州窯系の青花で、8は碗、9・10は皿である。11は龍泉窯系の劍先連弁の青磁碗である。  
白磁 12は青磁の皿である。13の白磁はベトナム産である。15・16は白磁の皿である。17は八角形の白磁  
の杯である。18は中国産の天目茶碗である。19は焼締陶器の鉢で、20は朝鮮王朝産の茶碗である。  
瀬戸美濃産天目 21・22は瀬戸美濃産天目で、21は茶碗、22は皿である。
- 備前焼 第188～190図は焼締土器と備前焼の各種である。第188図1～3は常滑焼の壁で、4は中国産の焼締  
朝鮮王朝産 陶器の壺で、10は底部である。5～8は朝鮮王朝産の船徳利で、9は耳付きの褐釉陶器の壺である。  
11～30は備前焼の各器種である。11は壺、12・13は注口部を持つ。14～17は小壺で、18は水指と考  
える。19～24は壺で、24は高台である。26は碗で、27～30の底部は、30が徳利であるが、その他は  
水指・水屋甕 壺や水指、水屋甕と考える。
- 水屋甕 第189図1～22は14～15世紀の播鉢である。4～9は水屋甕で、8は胴部の浮文である。10は徳利の  
底部で、11～13と第190図に図示した底部は、甕・壺の底部である。
- 東播系 第191～193図は須恵質土器と瓦質土器である。第191図1は、東播系須恵質土器の鉢である。2  
・3は高台付き碗である。4は外面を凹線で埋める鉢で、5は雷文・唐草文のスタンプがある鉢であ  
る。6～8は口縁部が内湾する鉢で、外面に菊花文のスタンプが付く。9・10は耳が付く瓦質土器の  
菊花文 釜である。11～16は甕と壺で、17は鉢である。18は菊花文の付く香炉である。19～26は外面に菊花  
文・巴文のスタンプのある火鉢である。
- 第192図1～9は、口縁部が直口する鉢で、3～5・8のように脚が3ヶ所に付く火鉢と考える。9は角  
火鉢の四隅に付く脚である。10は大皿状になる瓦質土器の高台付きの底部である。11～14は内面刷  
毛目、外面指圧痕の鉢で、11は片口部である。第193図1～5は瓦質土器の播鉢である。6～9は瓦質  
土器の壺や甕の底部である。
- 吉備系土師器 第194～196図は土師質土器である。1は吉備系土師器で、2は白色系の土師質土器である。3～20  
は在地系土師質土器の皿である。21～34・第195図1・2は在地系土師質土器の小型の坏である。  
21・22・32～34の口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されている。第195図3は在地系  
土師質土器の碗である。4～16・第196図は在地系土師質土器の坏である。
- 第197図1～5はロクロ目のある土師質土器で、1は胎土が白色である。6～19は京都系土師質土器  
焼塩壺 であるが、6は焼塩壺の蓋と考える。7～10の口縁部には煤が付着している。21～24は外面に突帯が  
巡る土鍋である。25は口縁部が玉縁状に肥厚する鉢である。第198図と第199図1・2は口縁部が短く  
外反する土鍋である。内面は横方向の刷毛目、外面は指圧痕や削りの痕が残る。
- 埴埴・フイゴ 第199図3・4は縦方向に穿孔がある燭台である。5～7は鍛冶用具で、5は埴埴、6・7はフイゴの羽  
口である。8～12は土師器片を円盤状に加工したもので、13はその中央を穿孔した紡錘車である。  
14・15は両端を欠く棒状の粘土焼成塊で、両端に穿孔のある土錘と考える。16～62は紡錘形の土錘  
で、63は横方向に穿孔が入る土錘で、14・15はこのタイプと考える。
- 滑石製の石鍋 第200図の1～4は滑石製の石鍋であるが、2は口縁部の突帯部分を削り、再加工している。5も滑  
石製であるが、スタンプの原体と考える。6は硯である。7～21と第201図1～11は砥石で、多くは両  
面又は四面を使用している。
- 第201図12～15は弥生土器で、12・13は複合口縁の壺である。12の口縁部には櫛描波状文、13に  
は鋸歯文が付き、上面には浮文が連続して付く。14・15は甕形土器の底部で、弥生時代後期初頭と

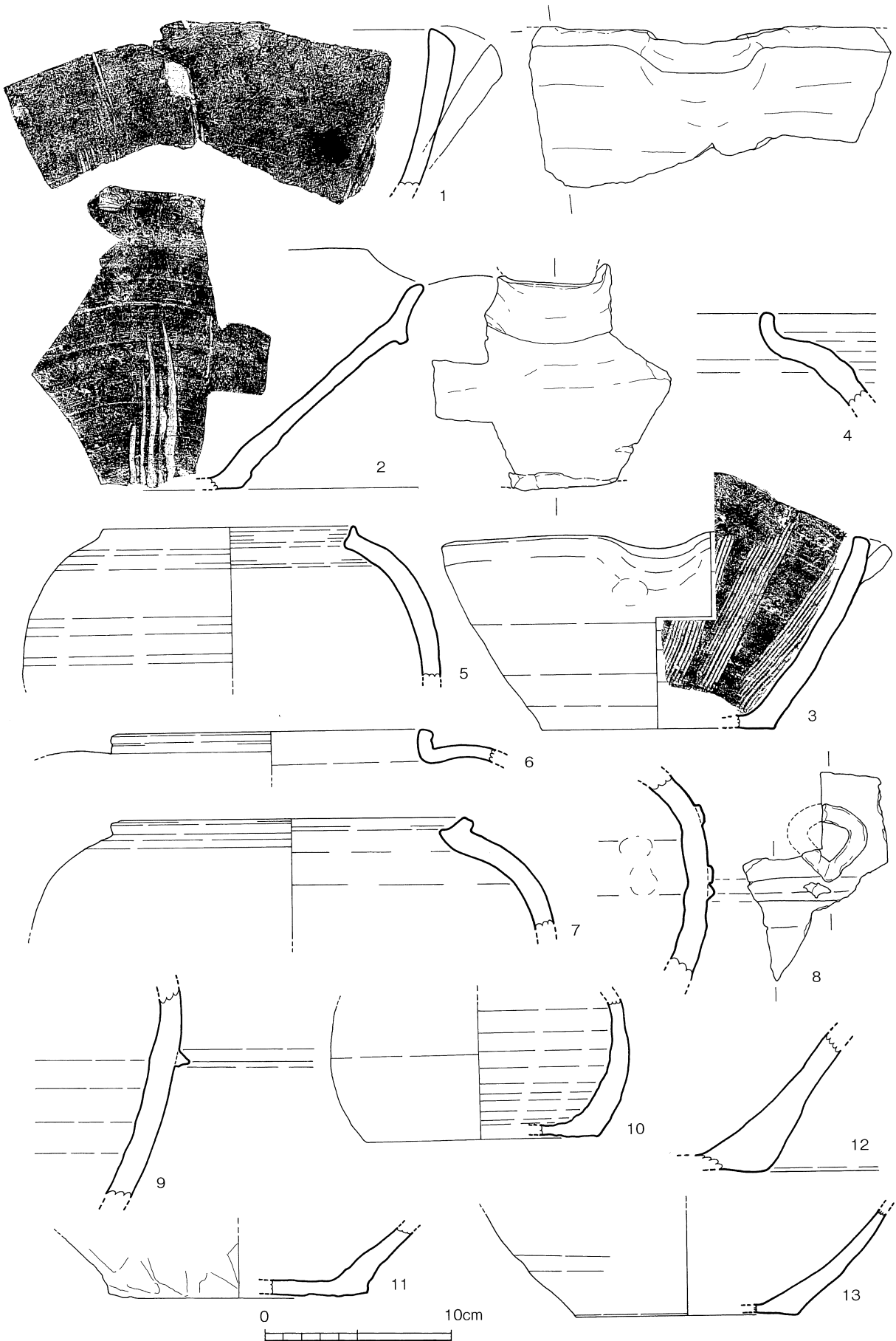




第187図 包含層地出土貿易陶磁器実測図① (1/3)



第188図 包倉層出土遺物実測図② (1/3)



第189図 包倉層出土遺物実測図③ (1/3)

第2節 遺構と遺物

考える。16は土師器の甕である。17・18は古代の高坏である。19～21は須恵器で、19の外面には櫛描波状文があり、20は内外面叩き調整が認められる。

紡錘車

第202図の1は紡錘車で、中央に焼成前の穿孔があり、そこを中心に両面とも放射状に沈線が入れており、側面にも沈線がある。直径3.4cm、厚さ1.4cm、重さ20gである。2～5はガラス製の玉である。

青銅製品

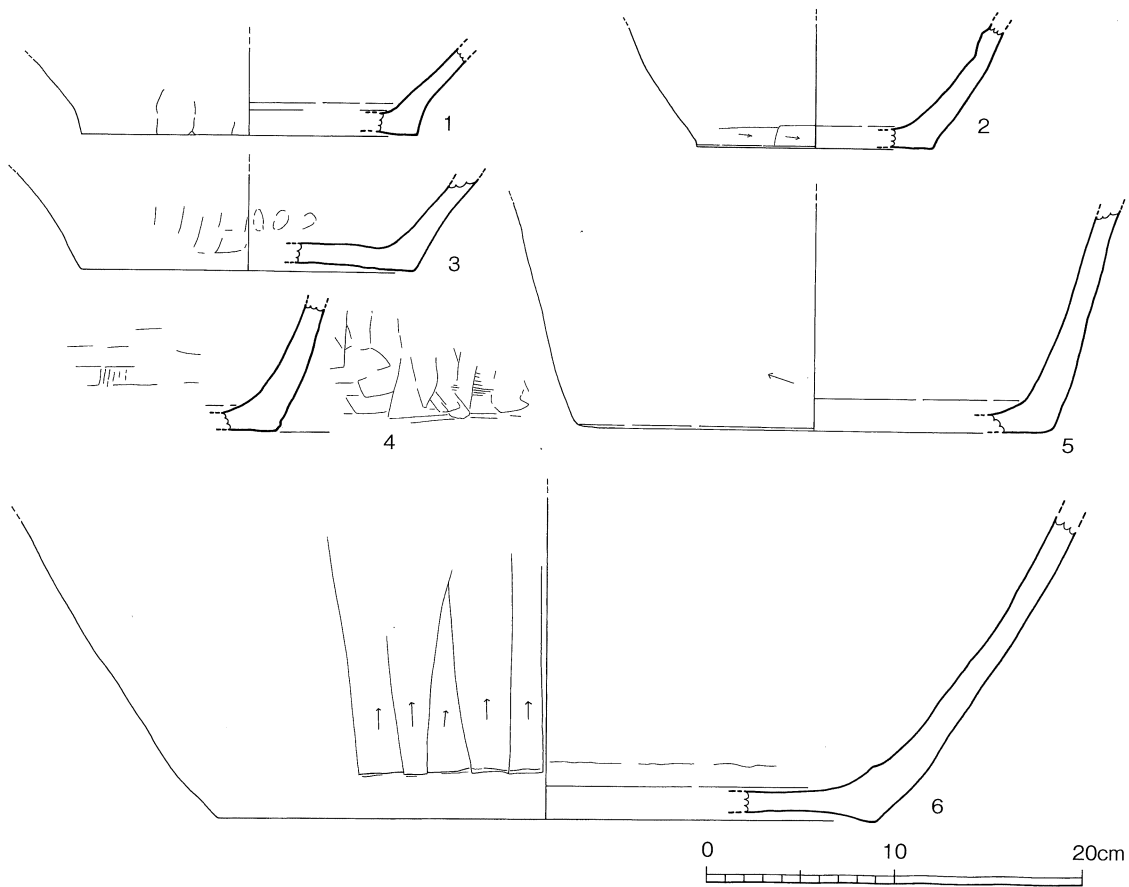
第203図1～20は青銅製品を実大で図示した。これらは薄く素材が軟質であるため、原型を保つものが少ない。形状は釘状になる6や、中空になる5・8～10、板状になる11～14などがある。16～20は被熱のため塊状になっている。

布

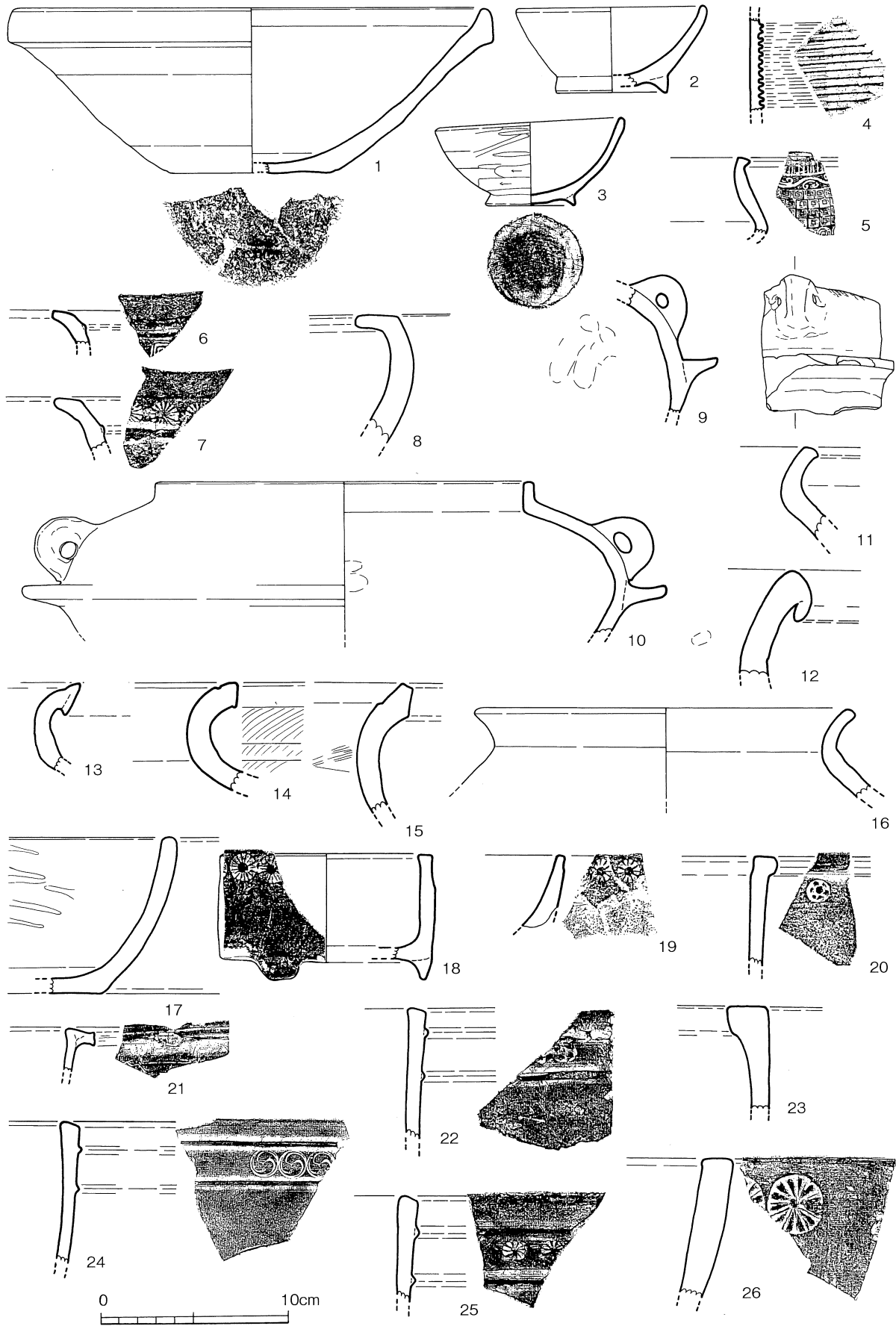
21は長さ約4cmの絞ったような形状の布である。

軒丸瓦

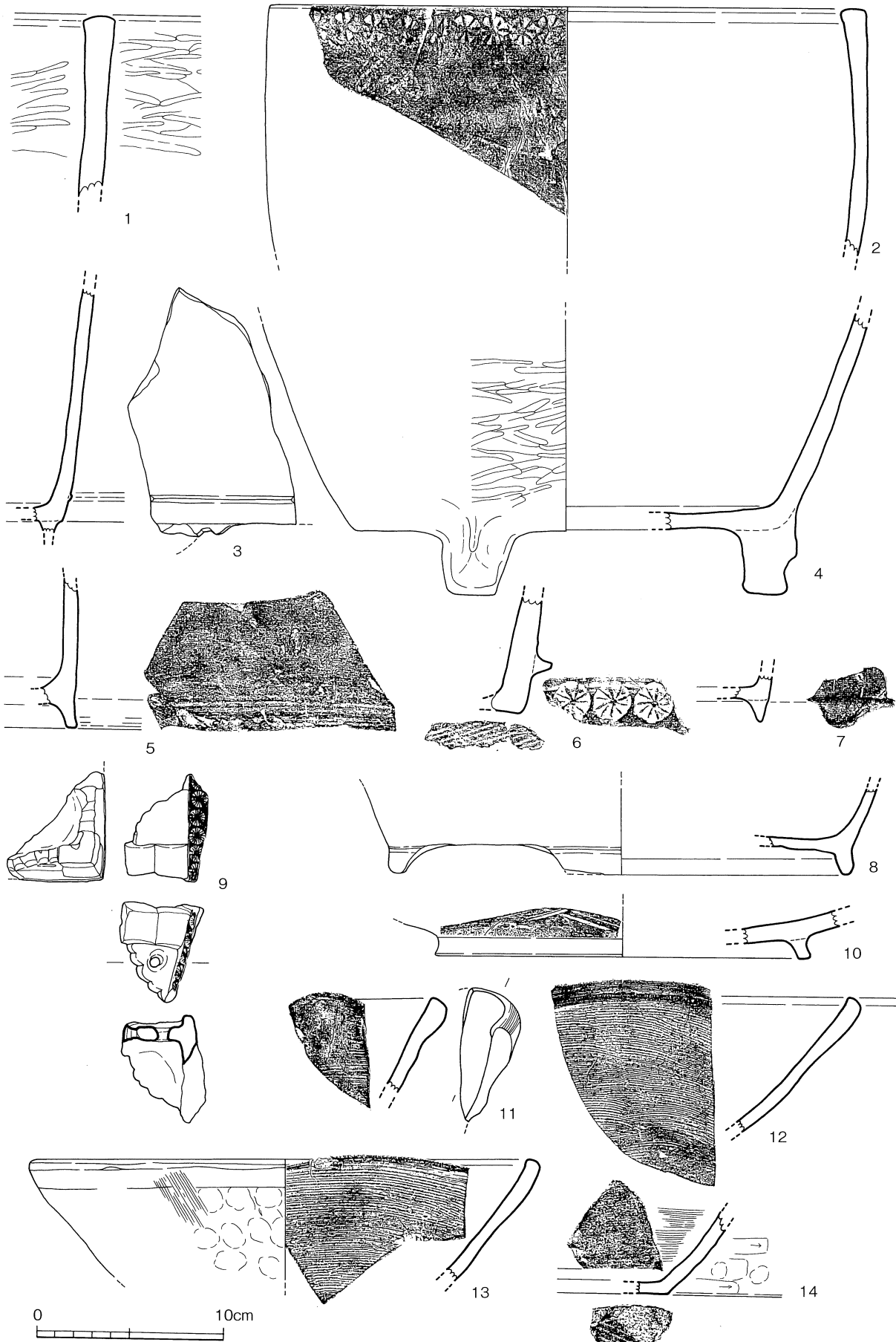
第204図は瓦類である。1～5は珠文と巴文で構成される文様を持つ軒丸瓦である。6～8も丸瓦であるが、外面に縄目叩き、内面には布目と本州タイプの吊り紐痕が残る。9～14は唐草文のある軒平瓦である。15は鬼瓦の資料である。16は屋根の頂部を葺く伏間瓦である。17は外面を格子目叩きのある古代の平瓦である。



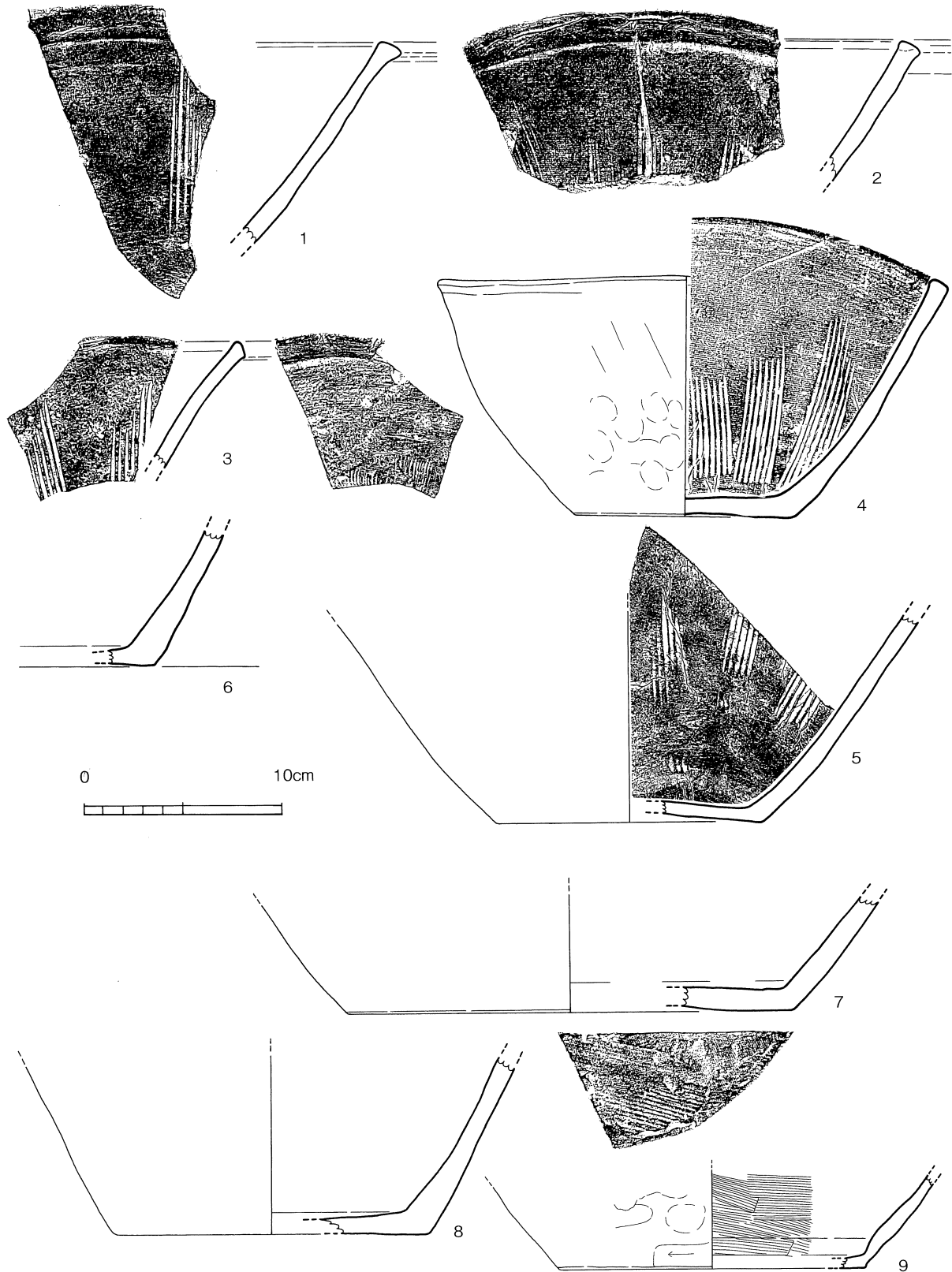
第190図 府内町跡30次包倉層出土遺物実測図④ (1/3)



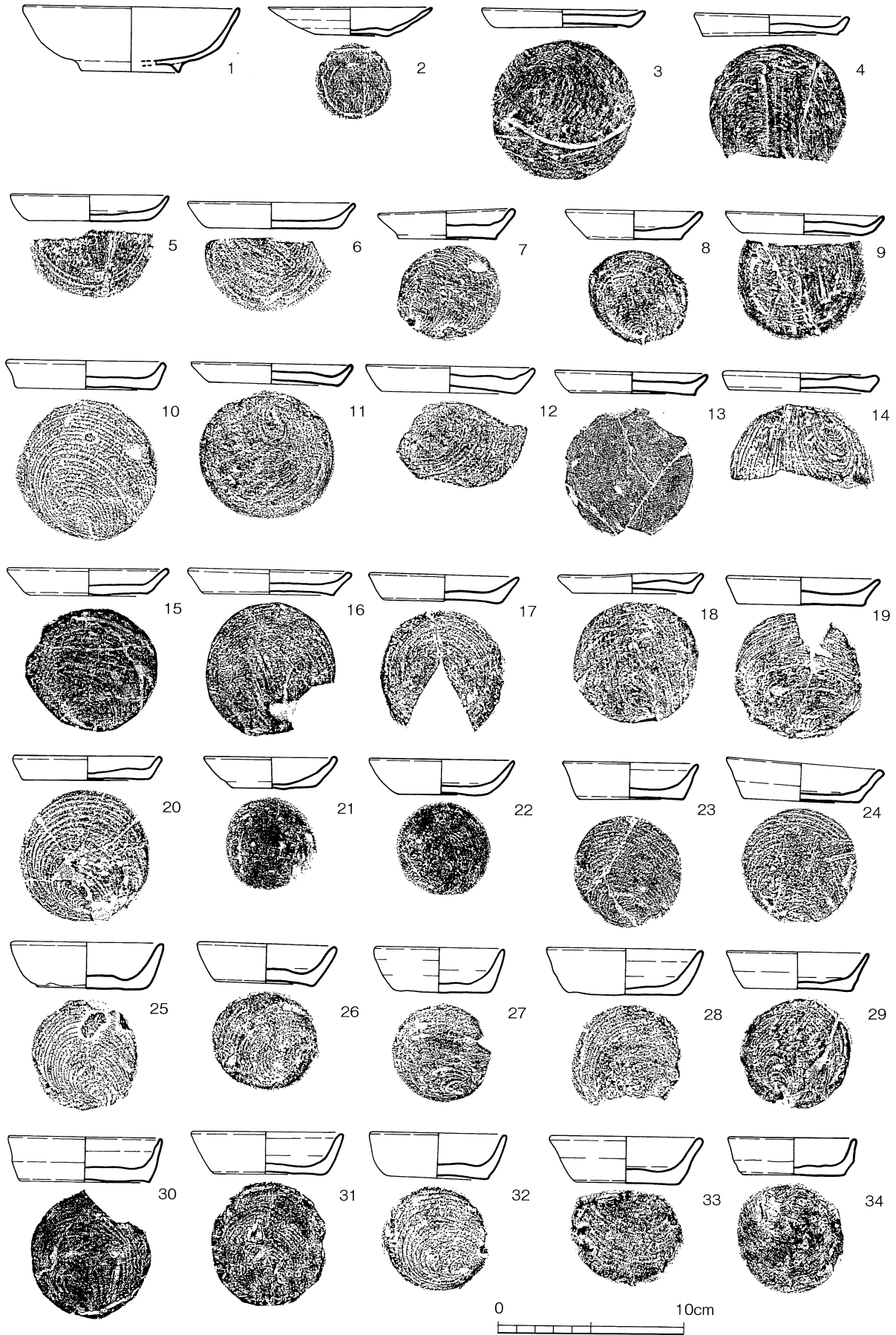
第191図 包倉層出土遺物実測図⑤ (1/3)



第192図 包倉層出土遺物実測図⑥ (1/3)

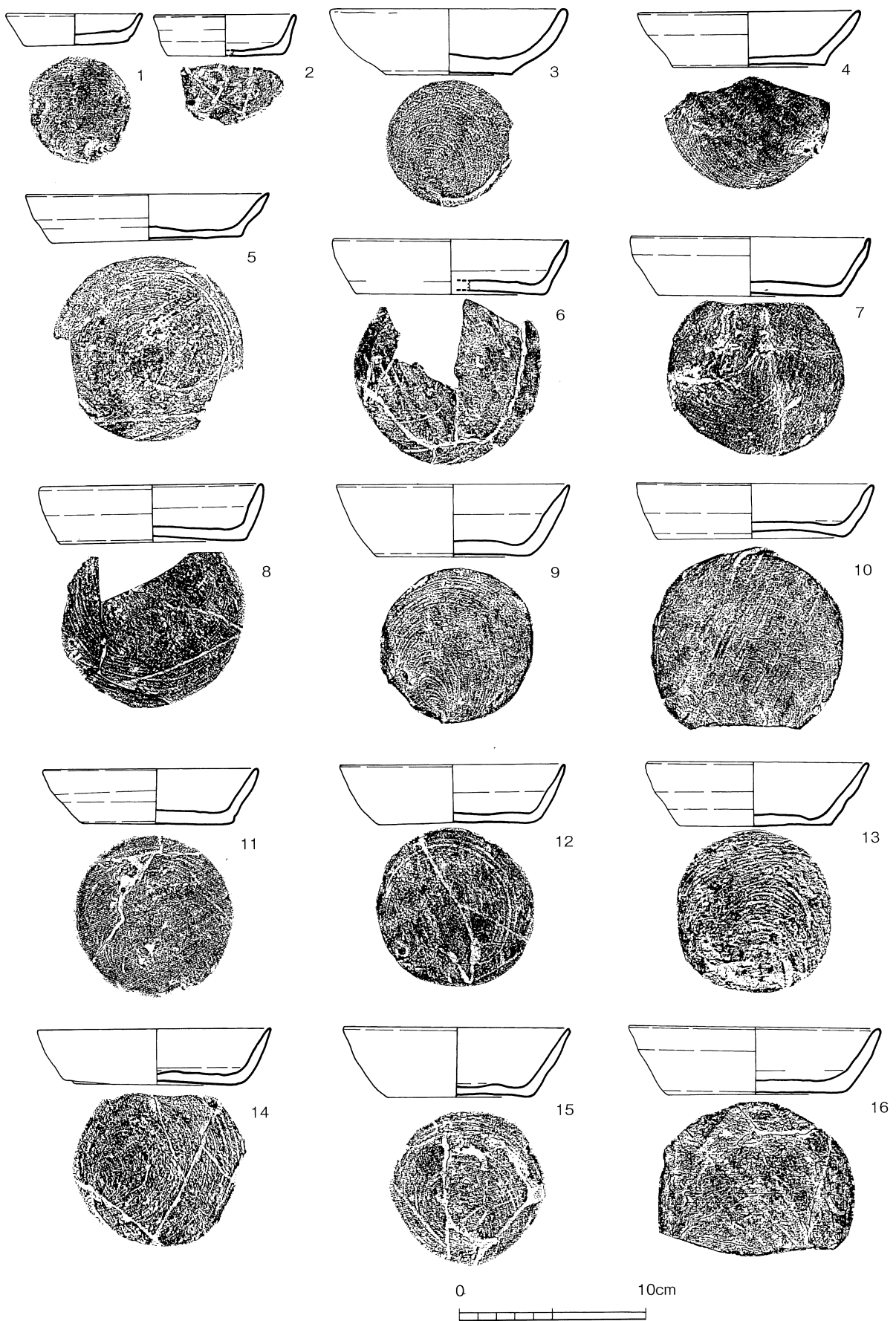


第193図 包倉層出土遺物実測図⑦ (1/3)

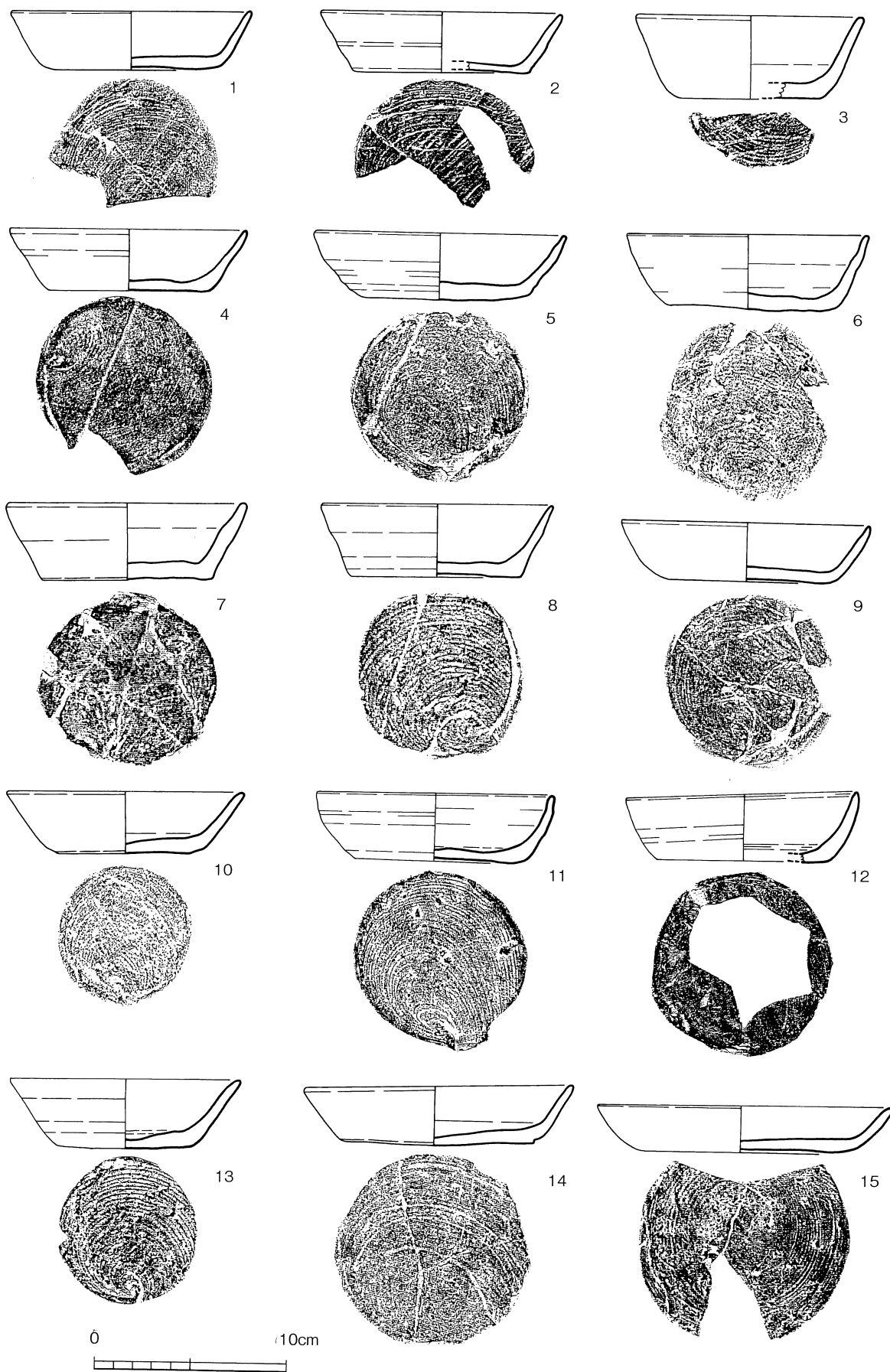


第194図 包倉層出土遺物実測図⑧ (1/3)

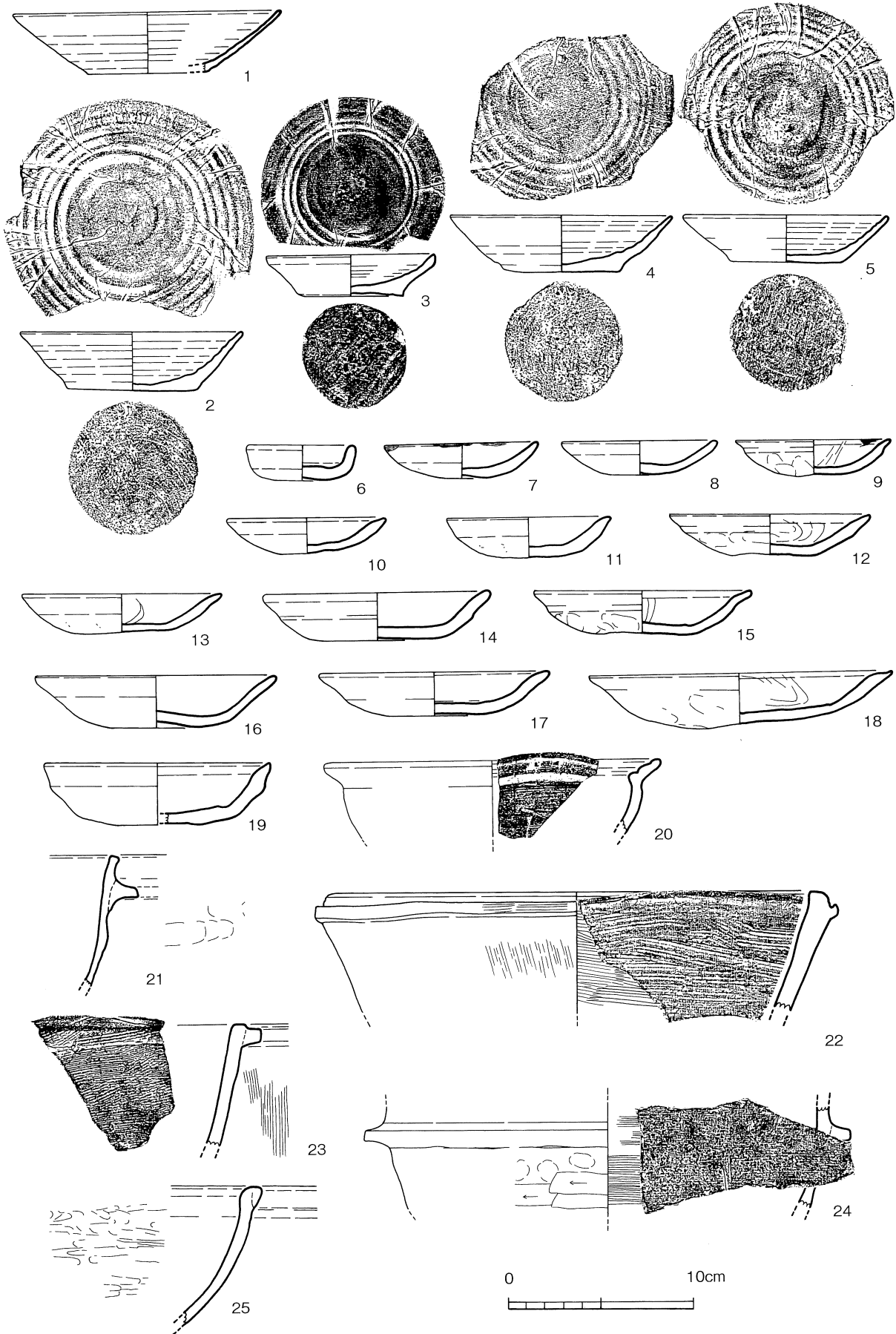




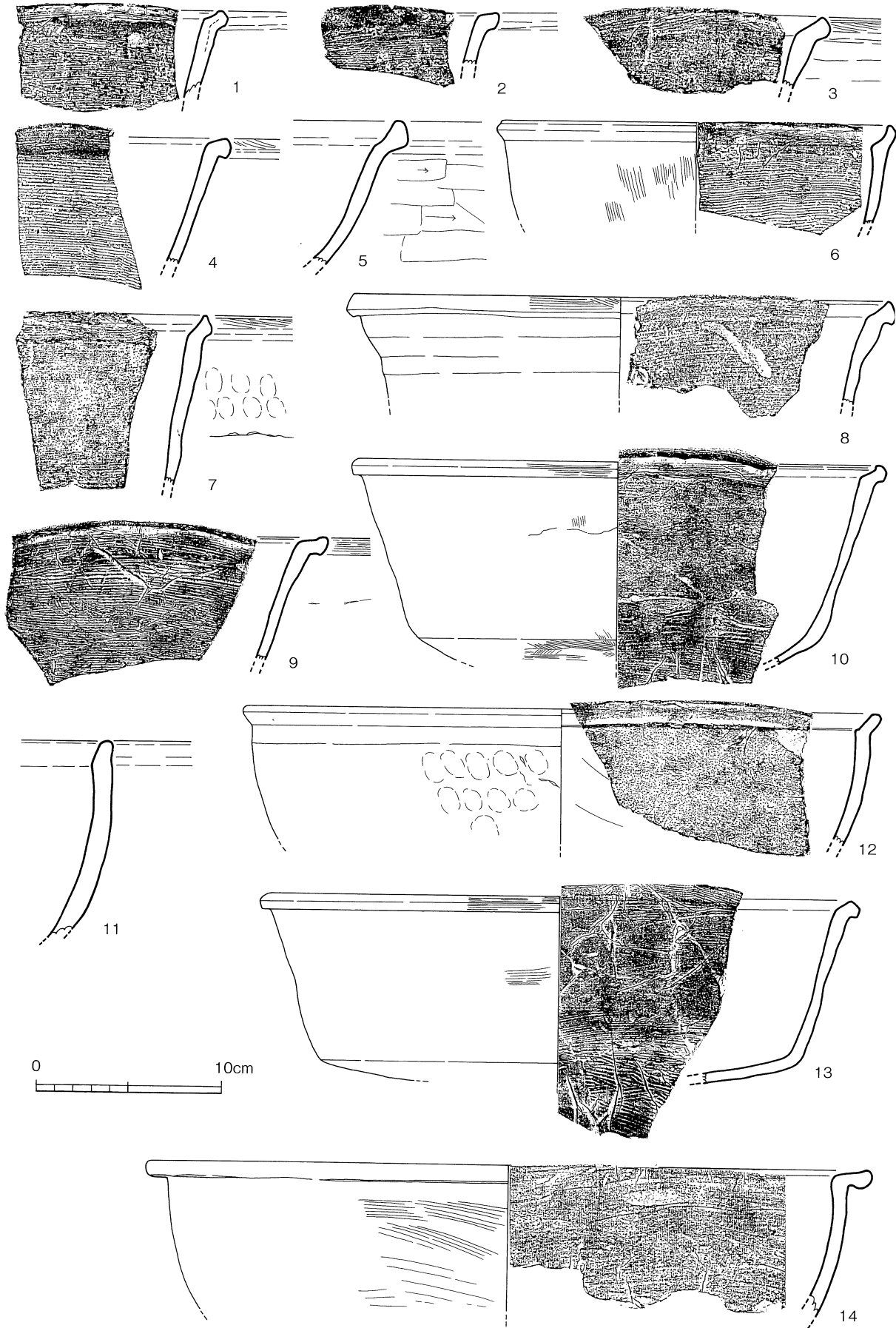
第195図 包倉層出土遺物実測図⑨ (1/3)



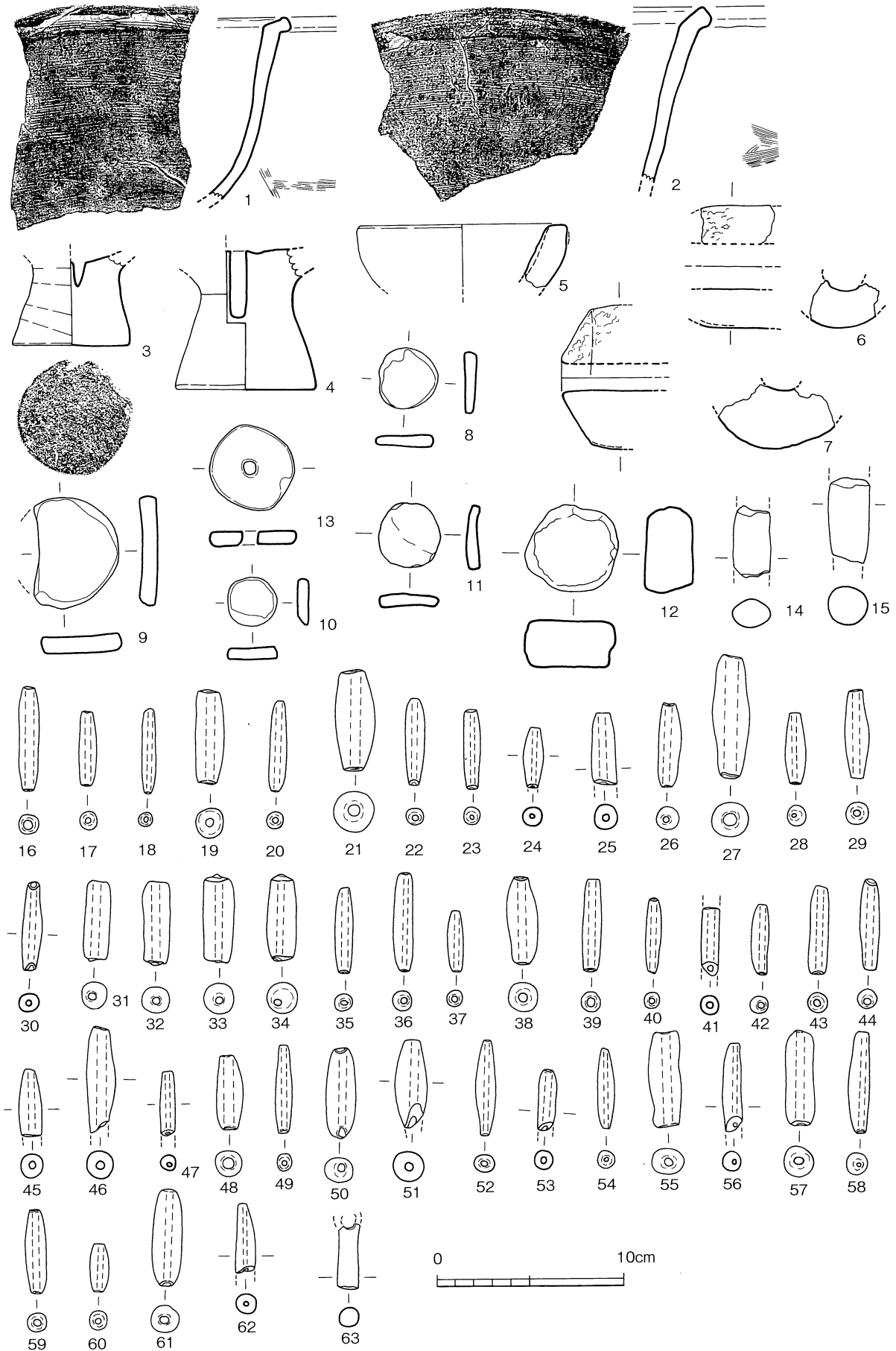
第196図 包倉層出土遺物実測図⑩ (1/3)



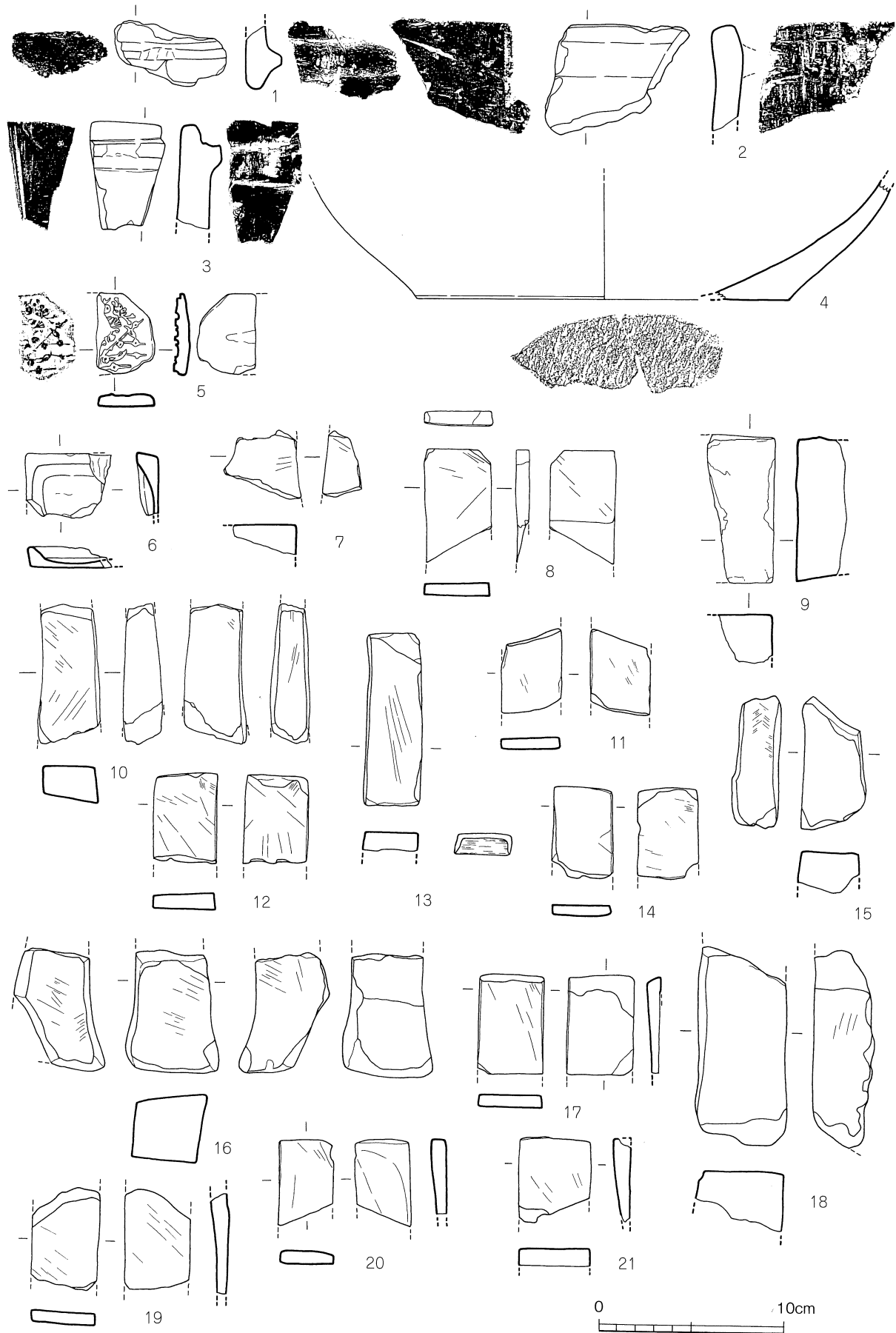
第197図 包倉層出土遺物実測図⑪ (1/3)



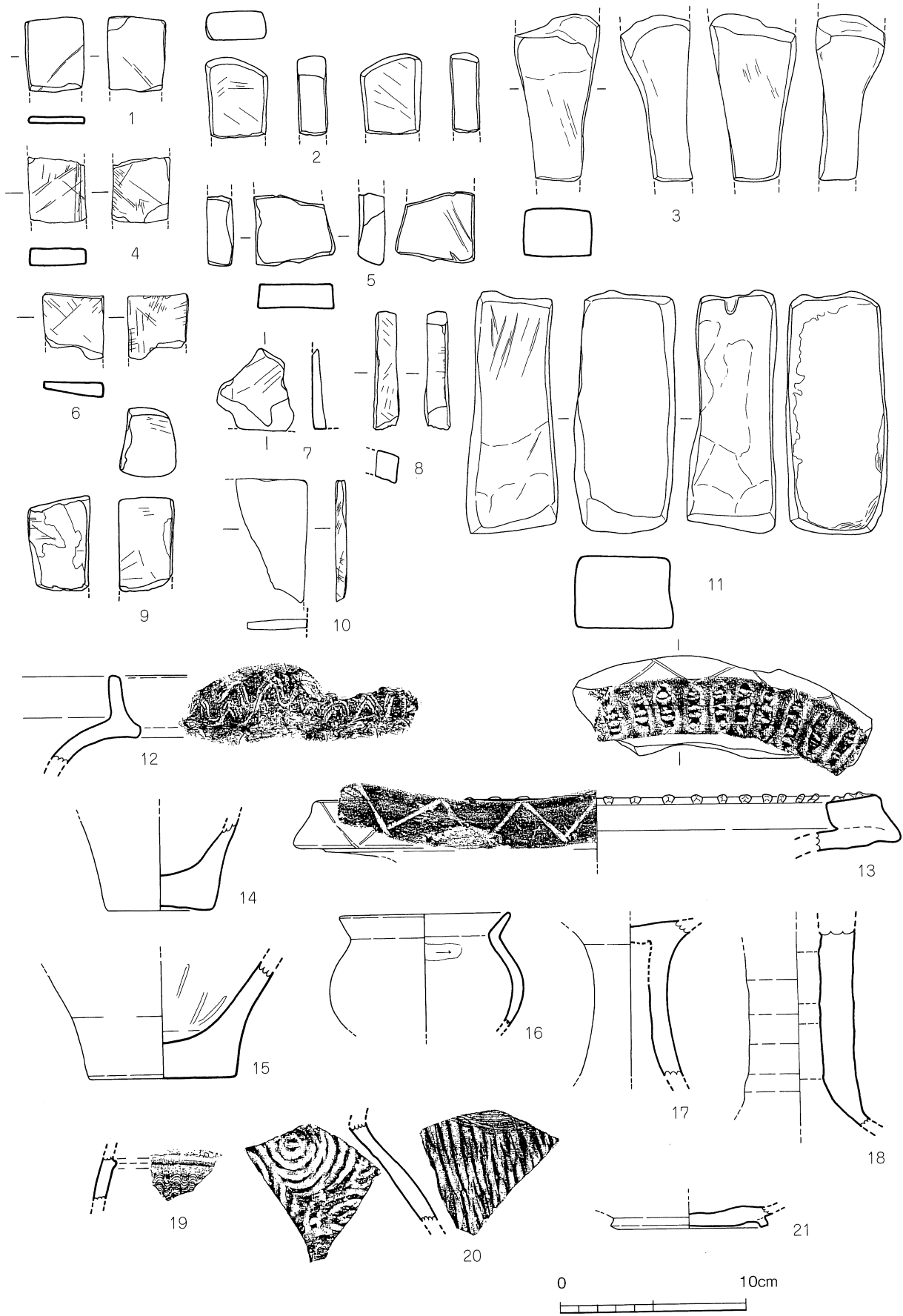
第198図 包倉層出土遺物実測図⑫ (1/3)



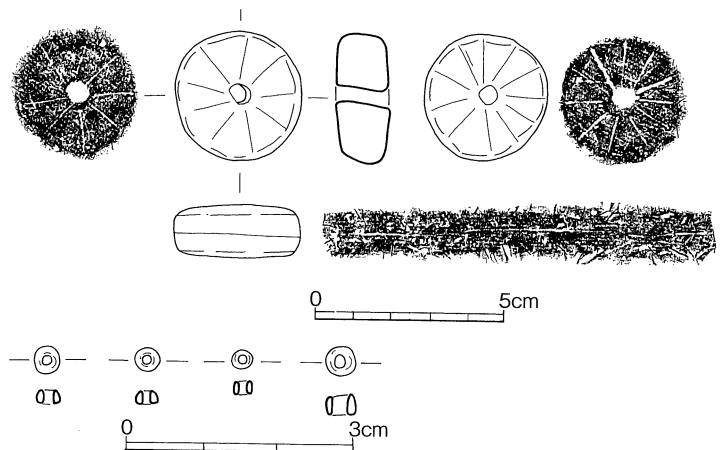
第199図 包倉層出土遺物実測図⑬ (1/3)



第200図 包倉層出土遺物実測図⑭ (1/3)



第201図 包倉層出土遺物実測図⑮ (1/3)



第202図 包倉層出土遺物実測図⑩

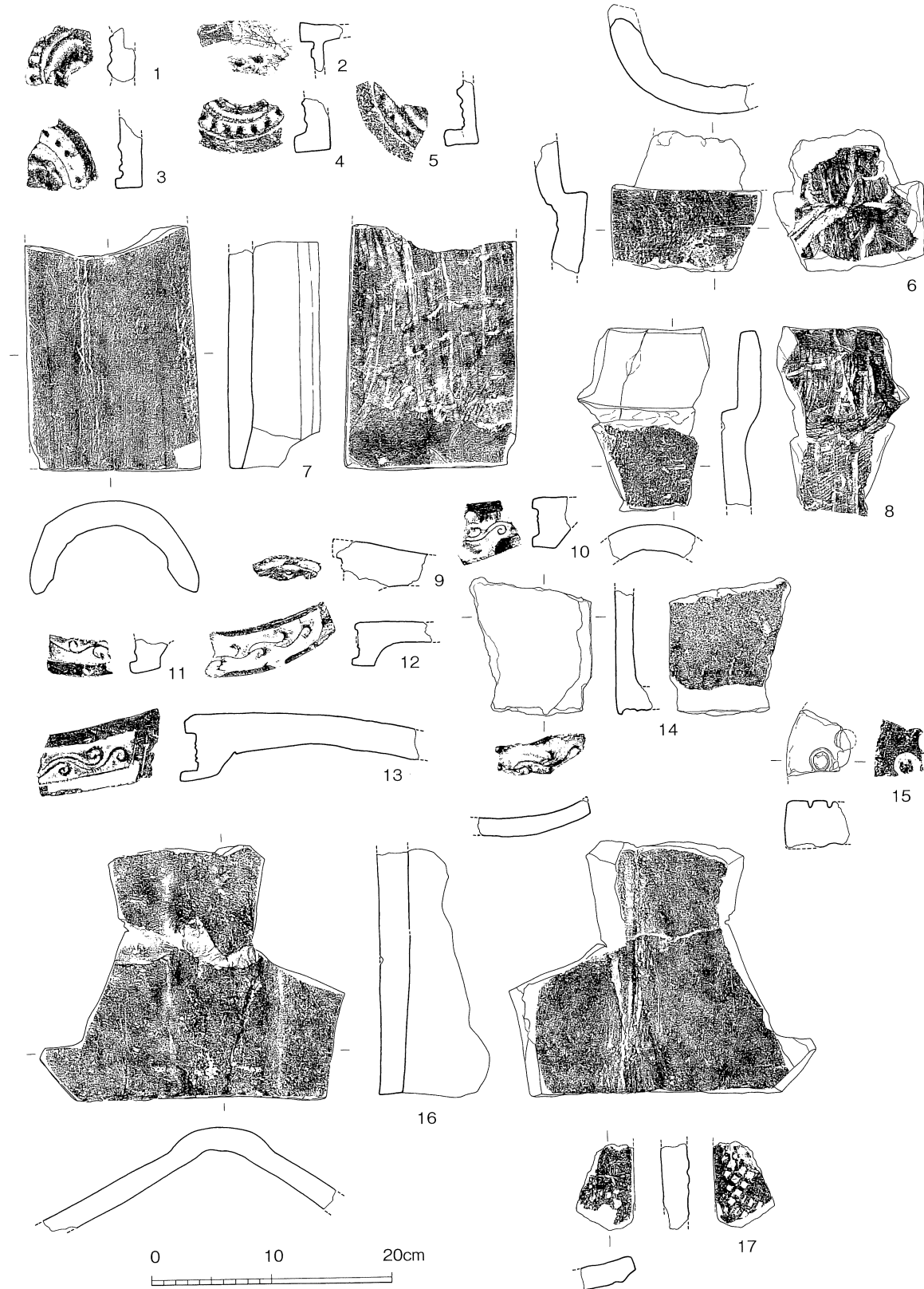


第203図 包倉層出土青銅製品実測図⑰ (1/1)

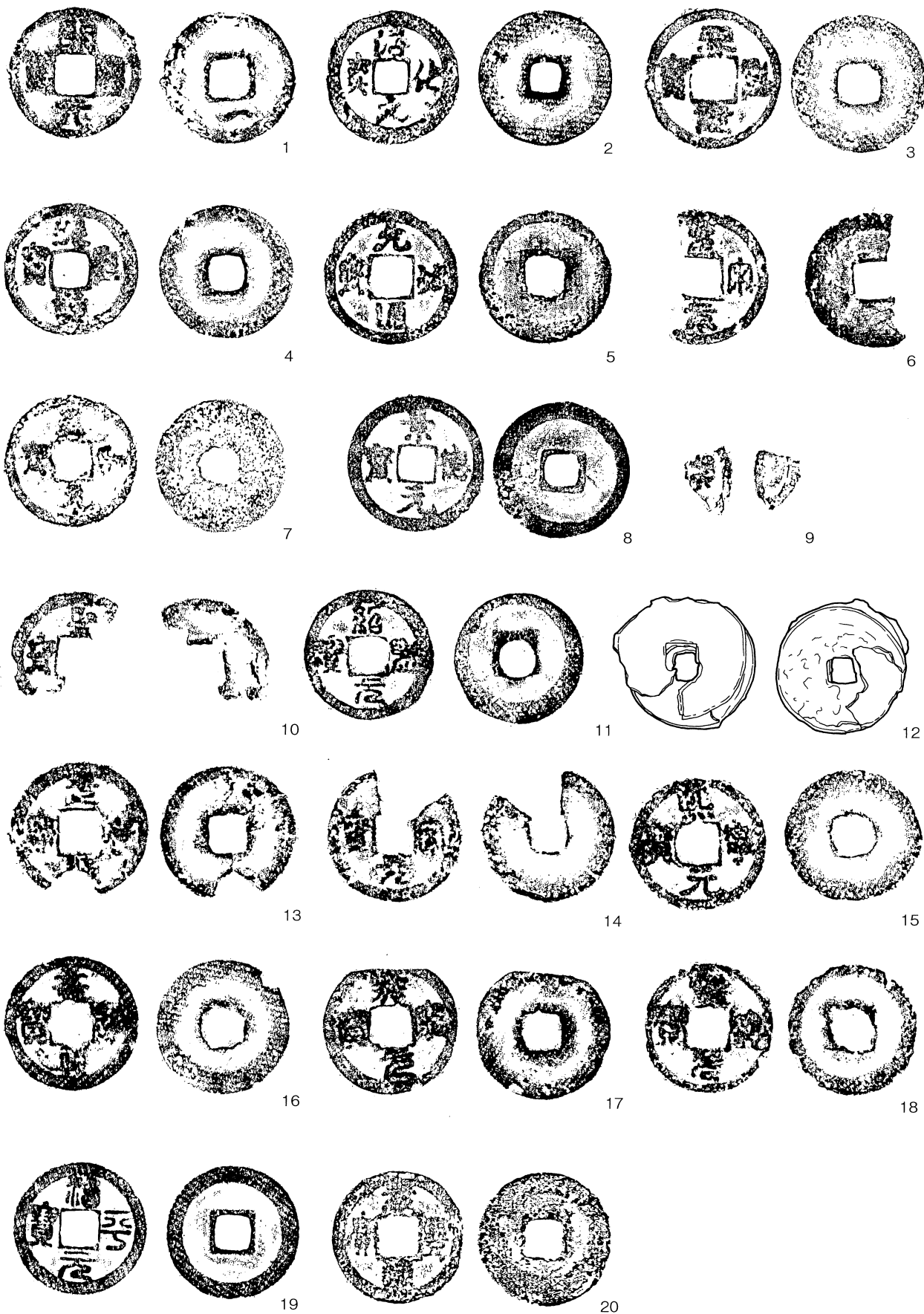


銅銭

第205～208図は銅銭である。破片を含め85点を図示したが、第205図12は2枚、第207図9は20枚、第206図の23・24は2枚が重なっており、全てで100点以上ある。種類は北宋の1068年初鑄の「熙寧元寶」が9枚、唐の621年初鑄の「開元通寶」が4枚、北宋の1023年初鑄の「天聖元寶」が5枚、北宋

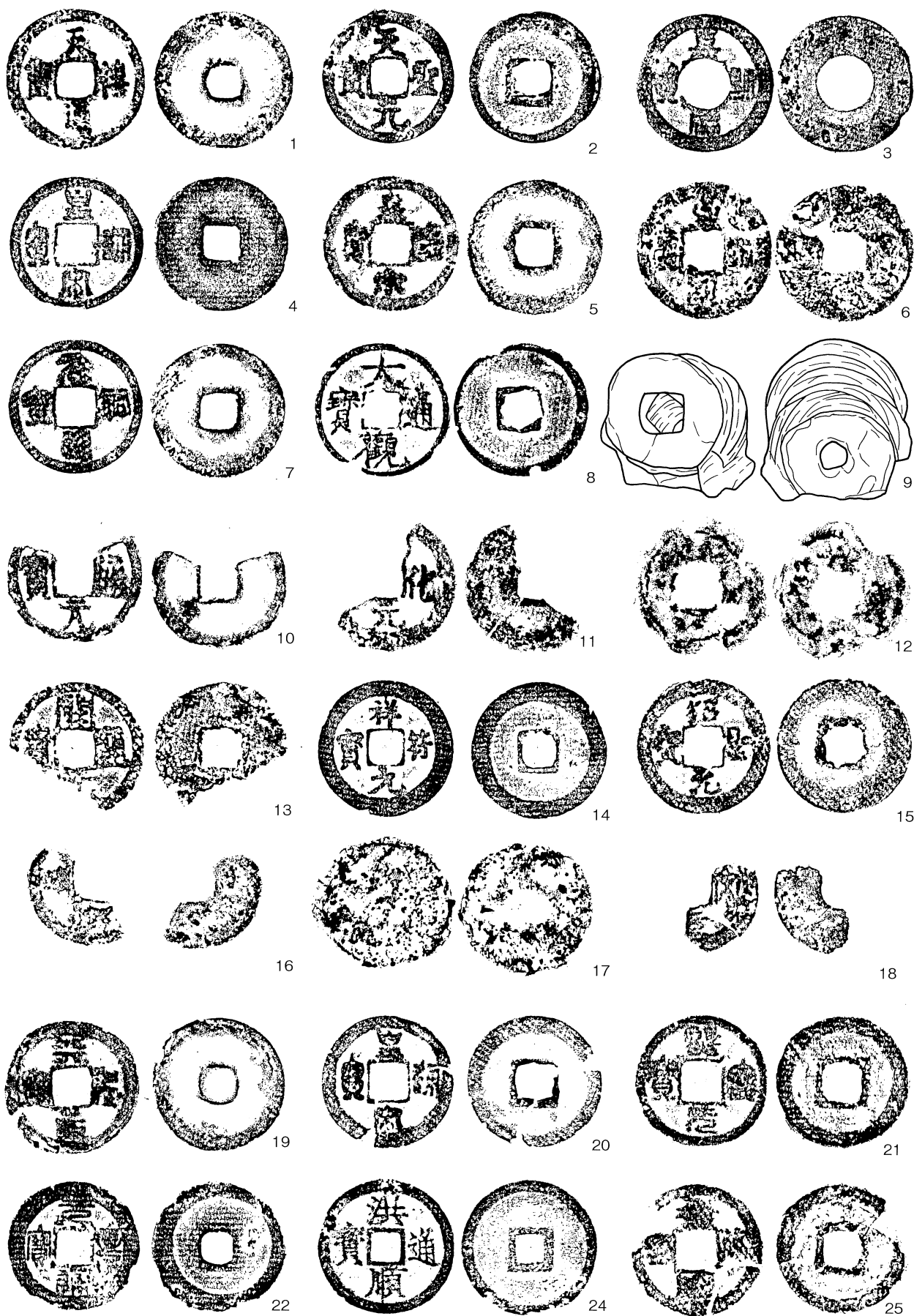


第204図 包倉層出土瓦実測図® (1/5)



第205図 包倉層及びJ区出土銅銭実測図 (1/1)



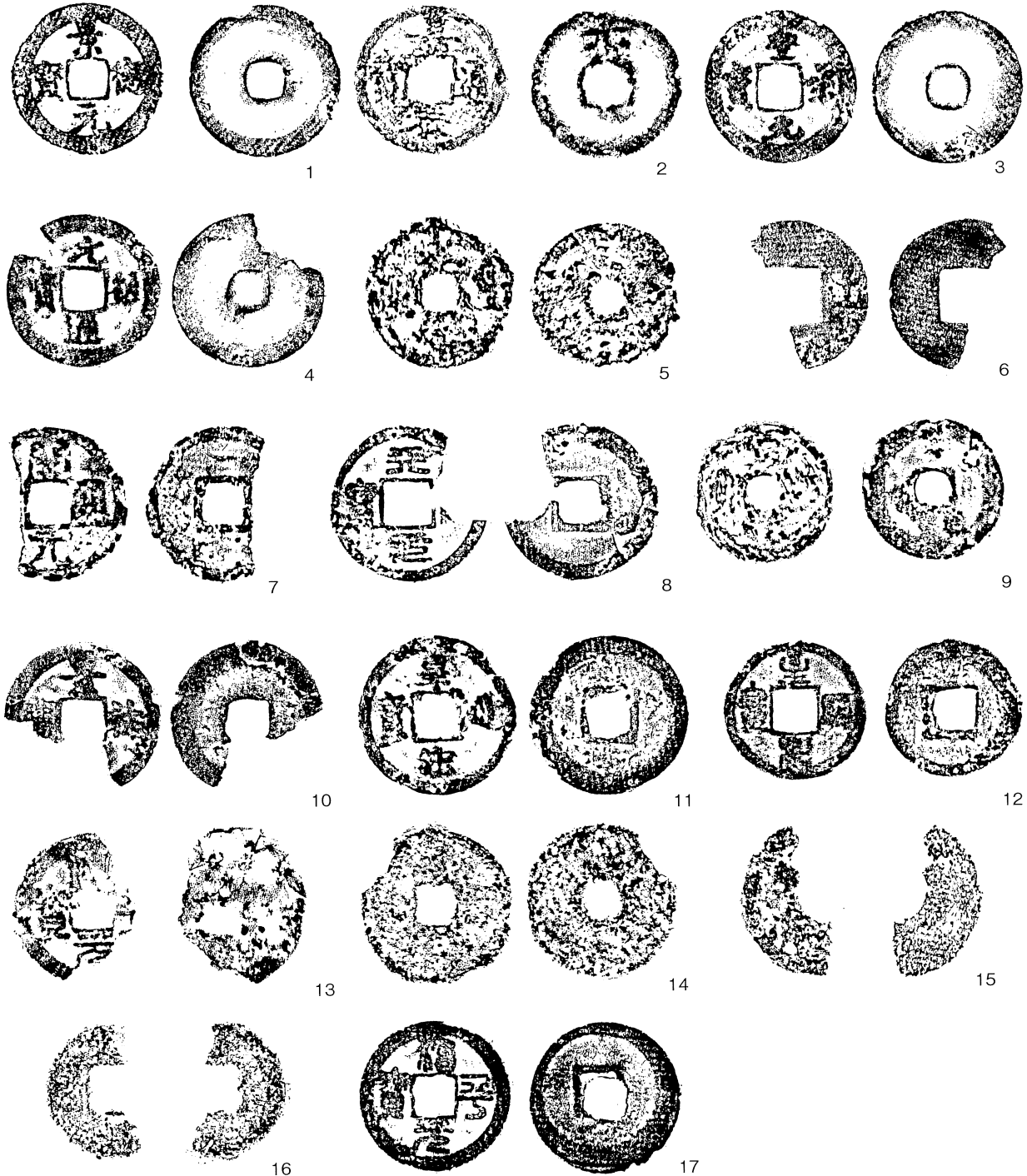


第207図 K75区出土銅銭実測図② (1/1)

の1038年初鑄の「皇宋通寶」が5枚出土している。この他3枚出土している銅銭として、1004年初鑄の「景德元寶」、1009年初鑄の「祥符通寶」、1054年初鑄の「至和元寶」、1064年初鑄の「治平元寶」、1078年初鑄の「元豊通寶」、1068年初鑄の「元祐通寶」、1094年初鑄の「紹聖通寶」、1107年初鑄の「大観通寶」があり、こうした銅銭が目立つ。

第207図9の20枚をはじめ、重なって出土した銅銭は、孔部が揃っており、本来は緡銭状態であったと考える。さらに第207図24の「洪順通寶」は1509年初鑄の安南銭である。

以上、包含層（整地層）から出土した遺物は、14世紀代から16世紀代までの各時期があり、同時にこの調査区での遺構の存続時間になる。



第208図 L77区出土銅銭実測図 (1/1)

## 第4章 総括

## 第1節 14世紀代の土師質土器

中世大友府内町跡の発掘調査は平成8年に大分市教育委員会により開始され、平成11年からは大分県教育委員会が加わった。発掘調査は2つの調査組織とそこに属する多くの職員が係わる事になり、共通の時間軸を共有する必要が生じた。そこで、調査当初から多量に遺跡から出土する土師質土器の編年が検討されてきた。中でも、14世紀代に位置付けた資料は、本書で報告した府内町跡第30次調査で出土した資料が中心であった。しかし当時、未報告であったため、十分な説明ができなかったため、ここで改めてその考えを述べる。

## 1 中世大友府内町跡の14世紀代の土師質土器群

府内町跡第30次調査では、一括廃棄された状態で、まとまった量の土師質土器が出土する遺構が数箇所調査され、出土する資料は微妙に形態や組成に差がみとめられた。特にSD137・SK109・SK155では在地系の土師質土器に他地域で編年研究されている遺物が伴う状況であった。

溝遺構であるSD137からは第3章で報告したように、皿と坏の2器種の在地系土師質土器が出土している。皿の平均法量は、口径8.4cm、底径7.0cm、器高1.3cmで、坏の平均法量は口径12.5cm、底径9.5cm、器高3.2cmであるが、坏は器形や口縁部の断面形態でさらに細分される。器形では第14図11・12に図示した2点が口径は平均値であるが、底径が7cm前後、器高が4.4cm、口縁部が外反し、他の坏と形態が大きく異なる。また、他の口縁部の断面形態は、①口縁部の器壁の厚さが中位で最大になるタイプ。②底部近くの器壁が厚く、口縁端部に向けて尖るように延びるタイプ。③器壁の厚さが底部近くから、口縁端部までほぼ均一のタイプなど、さまざまなタイプが見られる。こうした在地系土師質土器以外に破片がであるが吉備系土師器が出土している。

吉備系土師器

備前焼

SK109は大型の土坑で、下層と上層に別れ、短期間に廃棄された状態で、在地系土師質土器に瓦質土器・須恵質土器・備前焼・京都系土師器などが伴い出土している。出土した在地系土師質土器の皿の平均法量は口径8.1cm、底径6.7cm、器高1.3cmである。また、坏の平均法量は、口径12.5cm、底径9.0cm、器高3.1cmであるが、SD137で認められた3種類の口縁部の断面形態があるものの、②の底部近くの器壁が厚く、口縁端部に向けて尖るように延びるタイプが目立つ。また、SD137には認められなかった、底径が口縁部径の半分で、口縁部が内湾する平均法量が口径12.2cm、底径5.8cm、器高4.0cmの椀形の器形も認められる。

SK155は何らかの使用目的を達成後、すぐに土師質土器を一括廃棄した土坑で、完形品やそれに近いものが目立ち、在地の土師質土器に伴い吉備系土師器が出土している。土師質土器は皿の平均法量は口径8.1cm、底径6.4cm、器高1.3cmで、坏の平均法量は口径12.5cm、底径9.1cm、器高3.2cmである。口縁部の断面形態は、①の中位の器壁が厚くなるタイプが目立つ。また、SK109で出土したいる椀が一定量出土しており、組成の一部を占めている。その平均法量は口径12.3cm、底径6.2cm、器高4.0cmである。

以上が府内町跡第30次調査で出土した、14世紀代と想定される在地系土師質土器群であるが、次にこれ以外に、すでに報告されている14世紀代の在地系土師質土器群を紹介する。

府内町跡第35次調査区は第30次調査区の北側に位置する万寿寺境内の調査区である。まとまった資料が出土したのは、SK001とSD017である。SK001からは吉備系土師器と共に在地系土師質土器の皿1点と坏8点が出土している。皿の法量は口径8.2cm、底径6.2cm、器高1.2cmで、坏の平均法量は口径12.3cm、底径8.9cm、器高2.8cmである。坏の形態は、①の中位の器壁が厚くなるタイプと②の底部近くの器壁が厚く、口縁端部が外反気味になるタイプがある。

常滑焼

また、SD017は調査区内に南北に延びる溝であるが、遺構内から吉備系土師器と常滑焼の甕、在

地系土師質土器の皿・坏・椀が出土している。平均法量は、皿が口径8.3cm、底径6.6cm、器高1.1cmで、坏は口径12.4cm、底径8.8cm、器高3.1cm、椀が口径12.5cm、底径6.4cm、器高3.5cmである。

坏の形態は、口縁部断面が①の midpoint で器壁が厚くなるタイプ、②底部から口縁部にかけてほぼ均一のタイプが目立ち、さらに内湾気味に立ち上がる。

この他に万寿寺境内西北部にあたる府内町跡第20次A調査区SK1505から出土した在地系土師質土器群は、器形や口縁部形態に特徴を持つ。遺構は溝に掘り込まれた土坑で、在地系土師質土器はその周辺から集中的に出土した。器種は皿と坏で構成される。皿の平均法量は、口径7.8cm、底径6.6cm、器高1.4cmであるが、底部の器壁が厚く、口縁部の立ち上がり短い退化形態と想定できるものが含まれる。坏の平均法量は、口径12.2cm、底径8.6cm、器高3.8cmで、口縁部の形態は、器壁は均一であるが、底部から外傾して立ち上がり、端部は尖るように外反する。

以上が、中世大友府内町跡の遺構から出土した在地系土師質土器であるが、これらには他地域で編年研究されている土器が伴う。次にこれらの資料を基準に在地系土師質土器の時期を想定する。

## 2 14世紀代の在地系土師質土器と他地域の遺物

吉備系土師器 30次SD137からは吉備系土師器が出土している。底部から口縁部までの破片であるが、復元口径は10.4cmで、高台の底径は3.0cmで、断面は逆台形をしている。これと同じタイプの吉備系土師器は、35次SD017から2点出土しており、復元平均口径11.1、底径4.4cmである。同じ吉備系土師器であるが、30次SK155から出土したものは完形品で、口径10.2cm、底径4.0cmで、高台の断面形態は三角形で、さらに退化した形態である。同じ高台の断面形態のものは35次SK001からも出土しており、その法量は口径11cm、底径4.4cmである。

山本悦代 吉備系土師器は高台の断面形態から2つのタイプがあるが、いずれにしろ、山本悦代の編年研究によると口径が10~11cmであり、最終形態に属し、14世紀初頭から前葉に位置付けられている。また、35次SD017からは、常滑焼の甕の口縁部が出土しており、その形態は、中野晴久の研究から、13世紀末から14世紀前半頃と想定できる。

備前焼の播鉢 次に30次SK109からは、京都系土師器の皿と備前焼の播鉢が出土している。京都系土師器の豊後府内での本格的な受容は16世紀第2四半期以降で、16世紀末まで作製される。それ以前の京都系土師器が、30次SK109から出土した2点である。この土器は、非ロクロ系で、胎土が白色をしている。口径は7.3cmと7.5cmで、底部は外側から指で押され窪んでいる。このような形態の皿は、小森俊寛<sup>註1</sup>の編年によると、京都で「ヘソ皿」と呼称されており、14世紀代にと考えられている京Ⅷ期に定型化し、京Ⅸ期に一般化すると理解されている。同様な「ヘソ皿」は30次SK054からも口径6.5cmのものが出土している。京都で定形・一般化したものが、豊後府内まで伝播したものと想定できる。

また、備前焼の播鉢は、口径34.4cmで、口縁部の形態は、端部がわずかに肥厚する。内面の掘り目は底部から口縁部にかけて、櫛歯状の工具で掻き上げるように放射状に刻まれている。このような形態の播鉢は、乗岡実の備前焼の編年表では、14世紀中葉から15世紀前葉と比定される中世3期にあたる。この編年案で、中世3期はa・bの2期に別けられ、aを14世紀中葉から後半、bを15世紀前半と図示している。30次SK109の播鉢の形態は14世紀中葉から後半とした中世3期aに類似している。

乗岡実 以上、中世大友府内町跡第30次調査で出土した一括性の強い土師質土器と一緒に出土した他地域の遺物の編年的な位置を見た。その結果、吉備系土師器と常滑焼の壺は14世紀初頭、京都系土師器のヘソ皿は14世紀、備前焼の播鉢は14世紀中葉から後半であることが判り、微妙な時間差もあることが理解できる。そこで、次にこうした、他地域で明らかにされている遺物を時間軸に、中世大友府内町跡出土の在地系土師質土器の編年的な位置付けを試みる。

註(1) 小森俊寛「京から出土する土器の編年的研究」京都編集工房 2005

3 中世大友府内町跡の14世紀代の土師質土器の編年

14世紀初頭から前葉

吉備系土師器 他地域で製作され流通の結果、中世大友府内町跡で出土した遺物の中で、最も古く位置付けられて  
常滑焼 いるのが14世紀初頭の吉備系土師器と常滑焼の甕である。これらの遺物を伴い出土した在地系土  
師質土器のグループが30次SD137・30次SK155・35次SD001・35次SK017である。前述したとおり、  
吉備系土師器の底部の高台形態に差があるもののほぼ同時期と考える。

在地系土師質土器の形態は、皿・坏・椀の3形態に分かれる。皿の口径は8cm前半、底径は30次SD137の平均が7cm以外、6.5cm前後で、器高は1.2cm前後である。器形が小さいため、形態差を見出し難い。

坏は口径が約12.5cm、底径が9cm前後、器高3cm前後のものが主体を占め、口縁部の断面形態は、前述したように①口縁部の器壁の厚さが中位で最大になるタイプ。②底部近くの器壁が厚く、口縁端部に向けて尖るように延びるタイプ。③器壁の厚さが底部近くから、口縁端部までほぼ均一のタイプなど、さまざまなタイプが見られるが、30次SK155からは①のタイプの出土が目立つ。また、30次SD137の中に、口径はほぼ同じの12.5cm前後であるが、底径が7cm前後と小さく、器高は4.5cm前後と1cm以上高く、口縁部が外反する系統の異なるものが含まれる。

後藤一重 椀は口径12.3cm前後、厚みのある底部の径は約6cm、器高約4cmで、口縁部が内湾する。この形  
東国東型瓦器椀 態の土器の系譜を求めると、後藤一重<sup>註1</sup>が設定した東国東型瓦器椀が関連すると考える。後藤の研究によると、この瓦器椀は12世紀後半に定形化し、以後型式変化しながら14世紀前半から中葉にか  
存続する。この最終形態である東国東型瓦器椀3類は平底になり「土師質にちかい感じのものから、  
灰色を呈し、比較的硬質で須恵器を思わせるものまで個体差が著しい」。法量は「口径15.5～16.0cm  
に、底径は7.0～8.0cmに、器高は5.5～6.0cmにピークがある。また、例外的に口径12.2cm、器高6.4cm、  
器高4.1cmの小型椀もみられる」と述べている。

東国東型瓦器椀 後藤が東国東型瓦器椀を明らかにした八坂の遺跡とは別府湾を挟んで南に位置する中世大友府内  
八坂の遺跡 町跡出土の椀は、この東国東型瓦器椀3類の中で、例外的な存在の小型のものが土師質化し、この  
地で定形化し、一般化してこの時期に一定量存在したものと想定できる。

14世紀中葉から後半

吉備系土師器 中世大友府内町跡に他地域からもたらされた、吉備系土師器より新しい遺物が、30次SK109から  
ヘソ皿 出土した備前焼の播鉢と京都系土師器のヘソ皿である。この遺構から出土した在地系土師質土器は、  
皿・坏とわずかに椀が伴う。

皿は口径8.1cm、底径6.7cm、器高1.3cmであり、坏は口径12.5cm、底径9cm、器高3.1cmで、前時期と法量に大きな違いはない。また、坏の口縁部形態も先に述べた①～③の三形態が存在するが、①の口縁部中位の器壁が肥厚するタイプが減少する傾向が感じられる。また、椀の比率は低くなり、消滅傾向にある一方で、口径8cm弱、底径5cm強、器高2cm強の坏の小型化したものが出現する。

14世紀末から15世紀前葉

備前焼 14世紀末以降の他地域から搬入された時期明確な資料は、備前焼の播鉢があるが、伴う在地系土  
師質土器が明確ではない。ただ、20次A-SK1505からの出土の一群の遺物は、皿の口径7.8cm、底  
径6.6cm、器高1.4cmであるが、底部の器壁が厚く、口縁部の立ち上がりが短く容器として退化形態  
となるものが含まれる。また坏の平均法量は、口径12.2cm、底径8.6cm、器高3.8cmで、口縁部の断面  
形態は、器壁は均一であるが、底部から外傾して立ち上がり、端部は尖るように外反する。このよ  
うな形態は前述の14世紀代の在地系土師質土器には見られず、退化形態の皿・前時期から出現する  
小型化した坏を伴うことから、後出する土器群と把握し、この時期に置く。

註(1) 大分県教育委員会「八坂の遺跡」大分県文化財調査報告書第150輯 2003



## 第2節 豊後府内の万寿寺の範囲について

府内古図

府内町跡第30次調査での成果のひとつに、調査区の北端部で検出した石段遺構と街路状の積土層の確認があり、万寿寺の範囲に係わる遺構と考えられた。「府内古図」には万寿寺は、豊後府内の中で、大友館以上の規模で描かれている。その様子は、第2図のように北・南・西側を街路で囲まれ、南側は東西の街路沿いに築地塀を描き、中央部に二階建ての山門風の門、その東に小さい門を加えている。さらに、この築地塀に囲まれた万寿寺境内の南に五重塔を見ることができる。

築地塀

五重塔

こうした万寿寺の範囲については、発掘調査以前では、北は東西方向に周囲より一段低い水田が東西方向に続いており、地表観察で確認できた。また、西側は、大友館の東側を通る南北街路が「府内古図」に描かれており、この街路は、概ね現状の市道に踏襲されていることが想定された。しかし、南限については、明治時代の地積図を参考に想定をしていた。こうして万寿寺跡の範囲を示したのが、昭和63年刊行の大分市史の付図である。

発掘調査は、こうした現状の地形、明治時代の地籍図を基に復元した万寿寺の想定範囲を確認することになった。葬祭場建設に伴い大分市教育委員会が実施した平成10年の府内町跡第6次調査は、周辺の発掘情報が皆無の中であったが、調査区の北端部で東西方向の区画性の強い溝を検出したため、そこを南限と想定した。

その後、万寿寺跡の西端を南北に通る、国道10号古国府拡幅に伴う発掘調査が始まると、その範囲に係わる成果が明らかになってきた。まず、平成14年には府内町跡第20次調査として、万寿寺の北境と想定されていた、周囲より一段低い水田部を含み南の境内にあたる部分の調査を行った。その結果、一段低い水田部は幅約6m、深さ約2.5mの16世紀後半の堀であることが判った。さらに、この堀は長期間存続せず、すぐに埋め立てられ、東西方向の街路に変わっていることも判明した。また、この堀の南側の万寿寺跡の境内にあたる部分の調査では、町屋部の調査区に比較すると、遺構の密度が低く、無秩序な掘削跡が少ないことも確認された。

万寿寺跡

(西之屋敷)

次に平成15年は万寿寺跡の西境と南境に関連する調査となった。調査は府内町跡第29・35次調査として、万寿寺跡境内の西側部分の調査を行い、府内町跡第20次調査と同様、遺構密度が町屋部に比較すると低い状態で、掘削等に規制がかかっていたことを連想する状態であった。この調査区の西側に設定したのが、府内町跡第34次調査である。昭和63年段階で想定した万寿寺跡の南限に近い場所で、「府内古図」から見ると、南北街路が検出されることが想定された。しかし、発掘調査の結果、南北に約40mの細長い調査区のほぼ全面に南北方向の堀が検出された。その規模は幅約8m、深さ約2.5mで、北境の堀と同規模で、時期も同じ、さらにすぐに埋め立てられ礎石建物（西之屋敷）が建ち並ぶ状況であった。この調査結果から、万寿寺跡の南境はさらに南になることが確実となり、北境の堀とつながり、16世紀後葉のある時期、堀で囲まれる景観を見せていたことが判った。

また南境に関する成果が得られたのも、この年度に調査した本書に報告する府内町跡第30次調査である。遺構の詳細についてはすでに述べているが、SX012とした石段付の石列遺構とその北側で検出された版築状の積み土である。版築状の積土は、「豊後府内」のこれまでの発掘調査で確認した横小路町の街路や、第1南北街路・第2南北街路とした街路などに見られる土層である。即ち、版築状の積み土が確認できれば、街路と判断できる状況である。このことから、第30次調査区の北端は東西方向の街路と判断できる。また、この街路整備で半分埋め立てられた状況の石段は、この方向に入口があることを示し、街路に面していることの証明となる。以上のことから、府内町跡第30次調査区の北端で検出した版築状の積み土は、「府内古図」に描かれる万寿寺南側の街路と判断できる。

なお、府内町跡第30次調査区は、14世紀初頭から16世紀末にわたる各種遺構が数多く掘り込まれており、万寿寺の境内とは様相が異なり、町屋的な状況であった。逆に、府内町跡第6次調査区を

## 第2節 豊後府内の万寿寺の範囲について

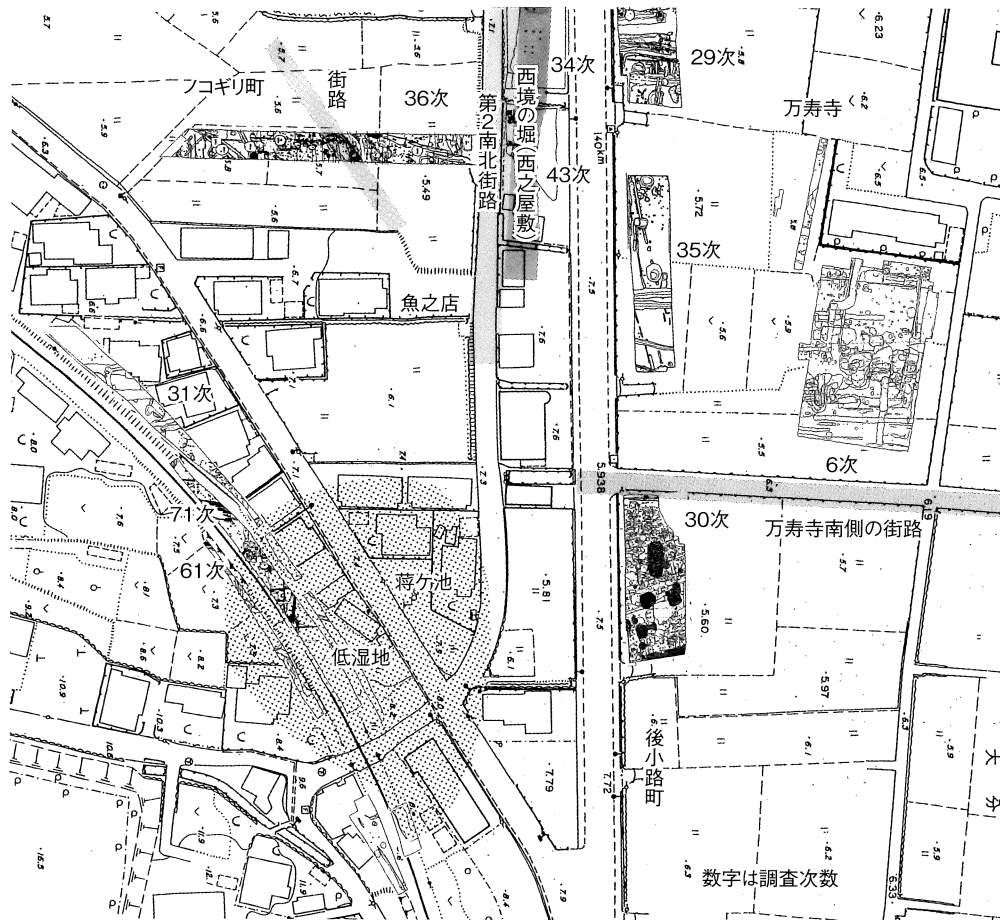
あらためて見ると、廃棄土坑や数多くの柱穴状遺構など、無秩序な掘削跡はなく、全体的に規制のかかった万寿寺の境内と見ることができる。

### 西境の堀

万寿寺の西側の府内町跡34次調査で確認された万寿寺の西境の堀は、平成16年度に実施した南に隣接する府内町跡第43次調査でも確認され、南に延びることが確認された。この堀はさらに南に延びており、万寿寺の南境で東に屈曲し府内町跡第30次調査区で確認した東西街路部の下にあるか否かを確認する必要が生じた。しかし、府内町跡第30次調査区の北壁は桜ヶ丘雨水幹線のコンクリートの構造物となっており、この施設の埋設工事のため、大規模な掘削が行われていた。そこで、国道10号線の拡幅事業の工事に立会、堀の痕跡があれば調査を実施することにした。

平成17年にその工事に立ち会ったが、堀は確認できなかった。万寿寺の堀が南側にも廻るかは不明である。また、この年に調査をした府内町跡第51次調査で、万寿寺の北境の堀と西界の堀の直角に曲がる屈曲部を確認し、これらが一連のものであることが確実となった。

こうして、万寿寺跡の北・南・西の境はほぼ確定できた。特に南側は昭和56年の想定より、約100m南に移動する。周囲を見ると、府内町跡第36次調査区で、東北から南東にかけて、第2南北街路に斜めに向かう街路が検出されている。この街路は「府内古図」で第4南北街路と第2南北街路を直接結び、万寿寺の南西部で交差する街路として描かれている。この街路は、府内町第30次調査で明らかになった万寿寺の南境の街路とも矛盾せずつながると想定できる。



第209図 府内町跡第30次調査区とその周辺